始

寄贈
51.10.-8
慈善綜合書
1086199

特 106
750

大正
8. 7. 16
内交

長篇講談

# 祐天吉松

## 目次

第一席　立花金五郎千葉周作の門弟となる事並に大川端辻斬の事……（二）
第二席　向両院開帳の事並に祐天吉松善心に立返る事……（一五）
第三席　加賀屋の娘象の軸物を破る事並に吉松加賀屋へ赴く事……（三三）
第四席　吉松加賀屋の養子となる事並に金五郎吉松を強請る事……（四八）
第五席　吉松半次の家に赴く事並に吉松四宮隼人の仲間となる事……（六一）
第六席　吉松加賀屋の災難を知る事並に向島花見の事……（七四）
第七席　吉松轟一熊太郎と試合の事並に吉松齋藤權太夫を殺す事……（八六）
第八席　吉松出家して祐澤となる事並に左甚五郎蝦を彫る事……（九九）

第九席　甚五郎幽靈額を溝店に納める事並に廣德寺山門の事……（一一一）
第十席　祐澤兩國橋に身投を助ける事並に祐澤繪草紙を見て數珠を切る事……（一二四）
第十一席　祐澤樽買の娘お榮を助ける事並に祐澤還俗して人入れ締となる事……（一四〇）
第十二席　稻毛屋おげん仇討の事並におげん吉松の女房になる事……（一五一）
第十三席　吉松飛鳥山へ花見に行く事並に悴七松に遇ふ事……（一六七）
第十四席　吉松先妻の貧苦を知る事並におげん身賣の事……（一七七）
第十五席　岩田七太夫浦琴に執心の事並に吉松七太夫と喧嘩の事……（一八八）
第十六席　吉松自訴入牢の事並に岩田組旗本減地の事……（一九八）
第十七席　吉松立花金五郎を大川に投込む事並に吉松岩田組に生擒らるゝ事……（二一〇）
第十八席　半次健次岩田屋敷へ放火する事並に吉松健次江戸を立退く事……（二二〇）
第十九席　吉松健次甲府へ乘込む事並に稻門村常五郎貧困の事……（二三六）





第二十席　常五郎韮崎一家の者と喧嘩の事並に魚屋六藏實意の事……（二四七）
第二十一席　吉松健次常五郎の死を救ふ事並に常五郎韮崎へ斬込む事……（二六一）
第二十二席　鍛冶町長兵衛、韮崎富之助喧嘩の事並に觀音寺久左衞門伊豆の久八仲裁の事……（二七二）
第二十三席　鬼京屋傳左衞門吉松を召捕る事並に吉松江戸送りとなる事……（二八二）
第二十四席　半次健次軍鷄籠を破る事並に吉松健次富之助を斬つて越後に逃ぐる事……（二九四）
第二十五席　吉松荒磯權藏と兄弟分となる事並に權藏妾おいちの事……（三〇八）
第二十六席　吉松淫夫姦婦を懲らす事並に吉松眼病に罹る事……（三一八）
第二十七席　齋藤佐十郎吉松を狙ふ事並に二代目富之助久左衞門に掛合の事……（三二一）
第二十八席　首斬梅吉首實檢の事並に金五郎堀甚内と僞名の事……（三四五）
第二十九席　金五郎宿屋の娘さとを貰受くる事並におさと男裝して上野の小姓となる事……（三五六）
第三十席　金五郎飯炊馬五郎と結托して惡事を巧む事並に持照院自害の事……（三七〇）

目次

第三十一席　金五郎品川に女郎屋を開く事並に半次金五郎の居所を知る事……（三八）
第三十二席　お日那半次郎の事並に半次大家の娘を救ふ事……（三七）
第三十三席　半次武藤屋の丁稚となる事並に半次金貸夫婦を殺す事……（四〇）
第三十四席　半次四の宮半人の門人となる事並に遊女屋四郎兵衛を殺す事……（四八）
第三十五席　半次三河屋茂蔵を訪ふ事並に吉松おぬひに別れを告くる事……（四三）
第三十六席　馬五郎金五郎を連出す事並に吉松仇討の事……（四四）
第三十七席　相の川段五郎の事並に淺草寺潜伏の事……（四五）
第三十八席　政五郎健次郎子の對面を計る事並に千歳丁遊獄門の事……（四六）

# 祐天吉松

神田伯山

## （第一席）立花金五郎千葉周作の門人となる事、並に大川端辻斬の事

此度お好みに依りまして祐天吉松の傳記を申上げます、尤も此の講談は吉松の外にも主人公が三人あります、お旦那半次、間々田の健次、立花金五郎と云ふ、就中立花金五郎が敵役で御座いまして之が吉松を苦しめる、吉松が之を討取らふと苦心するといふが本篇の眼目で御座います、デ先づお話は敵役の立花金五郎から始まります、徳川幕府盛んの頃ほひ、小石川三百坂に旗本で千二百石を戴だく立花金左衞門といふお方がございました、御身分は旗本に違ひないが、爲さる事が恰で町方の不破落のやう、遊女買をする、御酒を飲んで酔に乗じて素刀抜きをする、又は賭博をするといふ有様で、實に何うも譬へかたない身持ちでございます、奥様は早やく歿なつて、金五郎といふ忰が一人ありますばかり、心ある家來も一人や、二人は居りましたが、皆な暇を出して終ひ、道樂は次第に募る許り、支配頭の鈴木津守といふ御方が、二三度意見を致しましたが、





其の時には『誠に恐入ました、之からは決して博奕や悪所通ひは致しません、酒も必と慎みます』といふ舌の根の乾かぬ中に又やる、餘りの事に呆れて終に御老中の御耳へ入れるやうな事になりました、早速御取調べの上、御喚出しになつて『千二百石家斷絶、切腹申附る間左様心得ろ』といふ申渡し一時は驚ろきましたが流石は武士、茲に及んで臆びれたる氣色もなく、金『何とも申譯ございません、今更後悔致しましても返らぬ事、只々御上の是までの間御目醜しを有難がり、喜こんで切腹仕つります』此の時に御目附尾本嘉太夫が嘉『金左衞門何か申残し度き事があらば、武士の情で聞置いて遣はす』金『有難う存じます、此の期に至り何申残すべき事もございませんが、未練ながら只一目忰金五郎に逢ひ度うございます、此の儀御聞濟み下さらば忝けなく……』嘉『尤もの至り』と早速忰金五郎を喚出し金左衞門に會はせましたる所、まだ十二歳の小忰ながら父の様子を見て涙に暮れる、今までは覺悟致し涙一滴飜さなかつた金左衞門も年往かぬ忰を見ると、親子の情是非もなく、落つる涙は頰を傳ふて膝を濡らし　金『扨金五郎、悪き親を持ちしが其方の不運、親の敵は酒と女だ、成長致さば能く其の事を考がへ、酒を慎しみ、婦人に迷つてなはらん、博奕は云ふまでもない、人と成つて假令足輕同心でも立花の家名を興して呉れ、己れが不行跡をして家を潰しながら、子に身を慎しめ、家を立てろとは無理なやうではあるが、臨終の頼みどうぞ忘れて呉れるな、只今手紙を認めて遣はすから、若州小濱の浪人淺利又七郎先生の門人で神田於玉ケ池に道場を開いて居る北辰一刀流千葉周作といふ、之は此方が劍術の兄弟々子であ

るから、此の方へ手紙を持つて參り、千葉の門人となつて武藝を學べ……甚だ恐入ましたが料紙硯を拜借致します」と筆紙を借りて、役人の見て居る前で悴の賴み狀を認め終ると　金「さて金五郎が是に居りましては私切腹致すに切先が鈍ります、次へ御退げ下され度う存じます」涙を流して金五郎の出で行く後ろ姿を見送り、立花金左衞門、見事此の所に於て腹搔裂いて相果てました、其の死骸は御取捨になり金五郎は悄然於玉ケ池の千葉周作の道場へ來て手紙を出すと周作先生　周「ア、お前の親は誠に氣の毒なことをした、此方は町道場を開いて居る身體、お前の父は德川家の旗本、而も千二百石の高取り、立派な身分でありながら身持惡き爲めに斯くの次第、實は其となく意見を致したこともあつたが、今と相成ては其れを申した所が詮なき事如何にも父上の云はれた通り、酒と女が親の敵と思ひ、必らず此の兩筋を愼しみ、文武の道を勵むやう、及ばずながら斯くいふ周作、父上に代つて仕込んで進せる」と誠に親切に世話致して呉れますので金五郎も一生懸命修業をした甲斐あつて、何方も誠に能く覺えた、けれども固より武藝の道場に居るのではあるし、且又己の身體に適して居るものでございませうが、劍術は餘程出來る樣になりました、十二から二十二まで丁度十年、眞に稽古をして、モウ千葉周作先生の代稽古をするやうになり、同門の中でも拔打切りの上手といはれる位、恐ろしい早業師でございます、尤も千葉には良い弟子が澤山ありました、海保半平、早乙女萬彌、大庭藤藏、眞田半助、渡邊清左衞門、井上八郎、平手造酒、庄司辨吉などいふ豪い人物が居る、其中へ金五郎も數へられる程の腕前になり





千葉先生も賴母しく思つてお在なさる、金五郎誠に愼しみ深く、滅多に表へも出ない位、或る一日平手造酒が師の前へ出て　造「先生今日お稽古休みに付きまして淺草觀世音へ參詣致さうと思ひます」周「ア、行て來なさい」造「立花金五郎を同道いたさうと存じますが、如何でございませう」周「ア、彼れも餘り外出いたさんやうであるから、好き折柄ゆゑ同道してやんなさい」造「畏こまりました……、サア金五郎、先生の御許しを受けたから此方と同道さつしやい」金「有難う存じます、然らば御供致します」　打連れて表へ出た、尤も此の平手造酒といふ人は、師に勝れた腕前だなどゝいふ噂もありますが、元木更津の河野庄左衞門といふ一刀流の先生の弟子で、師範代を勤めて居りまして、其河野から手紙を貰つ

て千葉の道場へ參りましたので、千葉先生も其の時から造酒の腕前勝れたる事を知つて、門弟としても餘人よりは扱ひが宜しかつた、軈て觀世音へ參詣いたし、モウ夕景になつたから 造『立花、大分空腹を覺えたな』金『左樣でございます』造『向島の葛西太郎へ參て一ぱい飲らう』金『ハア、葛西太郎といふは何でございますか』造『料理屋だ』金『左樣でございますか、私は十年此方先生の道場に御厄介になつて居りますが、未だ一度も茶屋小屋などへ足を入た事がございませんから一向不案内でございます』造『成程知らんも無理はないが、葛西太郎の笑い聲酒が嵩て狐拳と云ふ端唄もある』金『端唄などは存じません』造『アハ、、、左樣か、イヤ不粋な奴だ』枕橋を渡つて向島葛西太郎といふ料理屋、毎度平手は參るものと見えて 女『オヤ平手先生、お出で遊ばせ』造『オ、おなみ、相變らず綺麗だな』なみ『アラ先生、程の好い事ばかり仰しやいます』造『イヤ皆な然ういつてるぞ、葛西太郎のおなみは大した女中だ、女中頭のおなみあつての葛西太郎といふ位、此の家の大黒柱だ、イヤ女の大黒柱は可笑い、辨天柱かな、マア辨天柱で仕合せ、馬鹿の柱だと天罰羅の種になつて終ふ』なみ『マア先生、又御戯談ばかり賞めて下さるのだが、惡くいふのだか分りやアしません、サアどうぞ此方へ』と例も好みの奥座敷へ案内いたし、なみ『御誂らへは、御見繕ろひに致しませうか……』造『宜いやうにして呉れ……ア、酒が來た、サア金五郎一つ飲んなさい』金『有難う存じます』造『お前酒は好きかな』金『好きでございませうか』造『嫌ひか』金『嫌ひでございませうか』造『何方だ』金『ハイ、親父が最期の際に然う申しました、酒と女は親の敵だと思つて





愼しめと、此の一言が耳に殘つて居りますゆゑ、一切酒を飲んだ事がございません、味ひませんが酒ゆゑに、美味か不味か、好きか嫌ひか自分でも分りません』造『成程、其は然うかも知れん、マア一つ飲んで見るが宜い』金『有難う存じます』造『澤山は飲むな、少しづゝ用ゆれば百藥の長、分を過せば百毒の長になる、酒は憂ひの玉箒、又天の美祿などゝいひ、佛道では飲酒戒といつて禁じてはあるが、出家は般若湯と稱へて用ひ、又神道では神酒といふ、冠婚喪祭は勿論總て人間喜びに就け、哀みに就け、酒を用ひん事はない、只多く過さんやうすれば宜い』金『ハイ』と金五郎グイと一口飲んだが苦い顔をして 金『ア、成程……』造『不味かな』金『グイと飲んで終つたので味ひません、先生モウ一ぱい頂だき度い』二度目も又グイと飲み 金『ア、不味、モウ一ぱい』造『オヤ不味、モウ一ぱいは可笑いな』大體是れは好きなのでございませう、初めて盃を取つた金五郎、忽ち數盃を傾むけ、ホンノリと顔を赤く致して 金『イヤどうも平手先生、酒といふものは結構なものでございますな、第一氣が浮々として、何となく世の中が賑やかになつて、江戸中一時に見渡すやうな心持ちが致します』造『ア、陽氣な酒と見えるな、飲まして置て云ふではないが餘り過さんが宜い、此方などは酒の上が惡くて往かん、サア飯を食はう』金『イヤ好い心持ちに醉ひまして御飯などは頂だき度くございません』造『ア、然うか無理に食はんでも宜い、俺も飲むと飯が食ひたくない、デハ徐々出掛けやうかな』勘定を拂つて座敷を立ち、有難う存じます、又お近い中にといふ女中の聲に送り出されて、葛西太郎を出た 金『平手先生道が違やア致しませんか』

造「マア宜いから此方へ來い」と向島の堤をブラ〳〵歩きながら　造「今日は卯月の十五日先月の今頃は花の盛りで、此の堤は却々の雑沓であつた」金「左樣でございますか」造「併し此葉櫻の間から月を眺めるも良い風情だ、アレ見なさい流れに月の映る影……」金「如何にも宜うございますな」造「立花、貴樣は拔打切りが上手だといふが、其の櫻の枝を一つ切つて見ろ」金「先生外の事は迚も貴所に及びませんが、拔打だけは手前得意でございます、先づ斯んな工合……」と跡へ下つた金五郎、腰を捻つてエイッ、サッと拔打ち樣に櫻の枝を切て落す途端にピタリ　金「先生如何、拔て切て鞘に納める、此の早いのが技でございます、」平手造酒大口開いて　造「アハ、、、、、何を下らんことをいつて居る、拔たから切つたのだらう、切つたから鞘に納めたのだらう」金「イヤ其に違ひはございませんが其早技を御覽に預りたい」造「默らつしやい、乃公より上手な者はない、乃公は巧いと自慢をするは藝の行き留りだ、天下の人は宏大だ、上を見ろ、下ばかり見て威强るな勘定をして切つて見なさい」金「何でございます勘定といふは」造「貴樣が拔いて切つて鞘に納める間、に五ッ六ッ勘定が出來る、やつて見ろ」金「何ういふ事に……」造「俺が勘定をしてやる、切て見なさい」金「宜しうございます」バラ〳〵と〳〵駈けて行て、又出ばつて居る櫻の枝をエイッ、サッ、拔打ちに切てピタリ鞘に納める間に、平手造酒が一二三四五六……　造「何うだ、俺が勘定を六ッした途端にピタリ鞘へ納まつた」金「成程、其ては今度私が勘定致しますから、先生一ッやつて御覽じろ」造「宜し、やつて見せるから能く勘定しろ、先づ三ッとは云はせまい」金「ヘエー」





氣合を計つて眼を着けた櫻の枝を、エイ、サッ、ピタリ……　金「一二三、アッ……」三と云ひ掛ける內に鞘へ納まつた　金「是は驚ろきましたな」造「アハ、、、斯んなものだ、サア俺が勘定しながら行くから貴樣ポン〳〵切て行け、見咎られても構ん撓まずやれ」金「宜しうございます」と、駈け出して行ては立花金五郎、エイッ、サッ、ピタリ、造「一二三四五！」エイッ、サッピタリ　造「一二三四五……大分早くなつた、三ッで鞘に納めるやうにならなければ往かん」　金「殘念だなどうも……先生今度はやつて御覽に入れます」と言問の手前の所まで參りまして、エイと突然拔いてサッと櫻の枝を立花が切て落した、途端に其の下に蹲踞で居た一人の男　男「ヤア、命ばかりはお助

け下さいまし」と立上るや否、パッと何か打附けるやうに其へ投げ捨てたまゝ、バラ〳〵バラバラ逃げて行つた　金「アヽコレ〳〵逃るには及ばん……」金「先生何でございませう」造「イヤ金五郎分つた〳〵、大方風流の者が葉櫻でも見物に來て、是で休んで居た所を、突如に引拔かれて、強盜追剝と間違へて逃げたのだらう、何にしろ消魂しい聲を出す奴だ」金「左樣でございます」造「何か其れへ捨てゝ行た」金「ヤッ先生御覽なさいまし、是は縞の財布で」造「ナニ縞の財布、五十兩も入つて居るか」金「……エー十六兩ございます」造「ウム十六兩、氣の毒なことを致したな、併し其だけの金を持つやうではまだ餘裕がある、此の金がなければ家へ歸つて釜の蓋が明かんといふ譯でもなからう」金「然うでございますな」造「マア宜い、我々に天より授かつたのだ、使つて終へ」金「ハヽ、先生、其も宜しうございますな」造「然らば之から吉原へ夜櫻見物に參らう」金「先生只今仰しやつた通り、夜櫻は三月でなければございますまい」造「イヤ立花、野暮をいひなさんな、解語花を手折りに行くのだ、遊女を差しておいらん、花の魁と書くではないか」金「ヘェ成程」造「行け行け」金「デハお供を致します」左「竹屋の渡船を呼ぶから待て……オーイ竹屋、造酒だ〳〵」渡守も毎度平手が乘るので知つて居りますと見えて　船頭「オー……先生今參りますよ……」少し立つて居る中に程なく船が來ました、ヒラリ是れへ乘移て　造「アー好い月だ、まだ四ッ前であるな」船頭今日は料理を持て居らんぞ」船頭「ホイ御馳走を頂けませんか」造「其の代り船賃を餘計遣るぞ」態々呼んで氣の毒であつたな」船「何う仕つりまして……」水棹をウンと突張り、船が二三間出る





櫓に代つて今戸橋の傍へ船が着く、其の時分堀の景氣といふものは大層なものだつた、山谷堀から突當つて吉原堤、道哲の前を過ぎて遊廓の内へ入つて來る、立花金五郎臍の緒切つて初めて足を入れたのでございますから、其の賑ひを見て膽を潰した、稲本屋といふ、稲本樓とは違ふ、先づ中店位の家で豫て馴染だから是へ登る、此時金五郎の敵娼に出たのが浮船といふ、年も若く美い女で、勤め離れて金五郎を待遇た、初會惚といふのでございませう、生て初めて斯んな事になつたから金五郎の喜びは何の位だか分りません、尤も平手が惡かつた浮船などゝいふ結構な花魁を買したから往けない、芥船か肥船でも買はせれば間違ひはなかつた、サア其れが初まりで毎晩のやうに造酒が連れて參ります、其の金は皆造酒が出す、何で平手が然んなに金が廻るかといふと、張里團左衞門、所謂穢多でございますな、之れから金が出るといふは團左衞門に劍術を敎へます、稽古を終ると、どうか先生御酒を召上つて下さいましと御膳が出る、德利を取つて振るとカチャと〳〵音がする、酒がガチャガチャ音がするのは訝いと、逆さにして見ると中から二分金が三ッ位飛出す、吸物の蓋を取ると小判が一枚入つて居る、刺身皿の上に半紙が一枚折つて載つて居るから、取て見ると下に小判が二枚位ある、御飯をといふので茶碗の蓋を取ると小判が一枚、お代りといふと又一枚、三ばいお代りをすれば三兩、造酒先生腹の空て居る時は十五六杯位お代りをする、稽古に行く度びに團左衞門から金が入るから幾ら遊んでも困らない、素より隱れて致して居たには違ひありませんが、何日しか此事が師匠の耳に入つたから、流石にどうも千葉

先生ハッタと怒りました、一間へ造酒を呼びまして　周『イヤどうもお前には愛想が盡きた、最早何もいふ所はない、只今より師弟の縁を切り、暇を遣はすから速かに道場を立退つしやい、今後只一刀流なれば宜いが、北辰といふ二字を附ける事はならん、又道場を開くなれば此の八丁以内は免さんから左樣心得なさい、實にどうも見下げ果たる奴だ』造『ハア、造酒伺ひますが、先生何を私が惡いことを致しました、私は先生より破門を受けお暇を頂だく覺えは毫末もございません』周『默らつしやい、云へば耻辱を掻かせると思ふから理由をいはんで暇を遣はしたが、强て聞きたくば云つて聞かせやう、何故其方は我が門人として、身分違ひの鬮左衛門の所へ足踏みをなし、劍術を敎へた』

此の一言に流石の造酒も眞赤になつて下を向いた、次の間に千葉周作の弟定吉、忰榮次郎を始め同門の人々控へまして、何とか詫を致してやらうと思つて居ると、右の次第を聞いたので皆驚ろいて、バラ〳〵バラ〳〵道場の方へ行つて終つて、一人として先生へ詫を入れる者がない、造『イヤ先生、私しが惡うございましたどうか御勘辨を願ひます、此上は何事も申しません、御免』といつて出て行つたかと思ふと小半時經つて、引返して來た造酒、玄間前へ突立上り　造『ヤア平手造酒だ、某しが師より破門を受けるに詫言を致す奴が一人もないとは朋友の交誼を知らぬ不實者だ、是へ出ろ片ッ端から斬捨てる』と一刀スラリと引拔きました、門人衆は皆此の人の腕の强いのは知つて居りますから、誰も出て來ない、千葉周作先生バラ〳〵と玄關へ立ち出で　周『己れまだ立去らぬか』と片膝突いて柄に手を掛けた、此の有樣を見ると平手造酒、右の手に持つたる刀の後ろへ廻し　造『是れは御師匠にございますか』周『行けッ、ア、待て此所に金子が十兩、貴樣に惠むのではないが、捨てゝ置くから拾つて行け』と十兩の金の包みを其れへ投げ出し、其儘奥へ立入る師匠の後ろ姿を見送つて造酒、何思ひけん、ヤッといふ聲と共に拔打ちに玄關脇の柱へザックリ切り附けウハ、、、、と高笑ひして出て行て終まつた、跡で千葉先生が一同に向つて　周『身持ちは彼に肖かつてはならんが、腕前は彼れに肖かるやう心掛ろ』といつたので、各々木刀を持つて來て平手の切附けた柱を打つたといふ位、誠に惜き人物でございます、扨て造酒は表へ出ました跡から兄弟々子の井上八郎といふ者がまゐつて、心得違ひのないやうに話しを致し、此人

から手紙を貰つて造酒は下總へ行つて飯岡の助五郎を訪ねる意であつた所、助五郎が甚く評判が惡いので笹川繁藏の所へまゐり、俗にいふ用心棒となつて居ましたが、天保十二年八月二十三日下總須賀山明神の境内で、繁藏、助五郎の大喧嘩の時終に斬死を致しました、之は天保水滸傳で申上げますから、此の講談には省畧いたします、扨金五郎は今までは造酒に連れられて遊びに行つて居たのが、其の後は自分の懐ろでなければ行かれません、有つてさへ廓の金には盡きるが慣ひ、況して何所からも得る所のない身分で如何とも仕方がない、ハテ何うしたら宜らうな、待て よ向島の堤で造酒先生と俺と二人で素乃抜きをして歩いて居たら、町人が追剝辻斬と間違へて金を投つて逃げた、町人は弱い者だから、夜往來へ出て辻强盜をしてみようと、此奴惡い事を考へ着いた、今でこそ賑やかだが其の時分、柳原、大川端邊りは誠に淋しかつた、態々向島の堤などへ行かないでも宜い、折々柳原、大川端の間部河岸邊りへ來て辻强盜を致し、其の金を以て惡所通ひ、或日周作先生金五郎を呼びましたから、脛に疵の譬、恐る〳〵兩手を仕て 金『先生何御用にございます』周『イヤ金五郎、他ではないがお前の親の金左衞門が腹切る時にお前に何といつた』金『ハイ』周『ハイではない、何と云つた、酒と女は敵だぞ、此の親が能き手本であると云つたのを忘れたか、此頃其方に目を着けた事がある、以來惡所通ひなどをするな、今晩から私の許しを受んで道場を出ると、師弟の緣を切るに依て然う思ひなさい、私は武士ぢやテ、諄い事は云はん、只一言申聞けて置く』金『ハイ、誠に恐入ましてございます』金『恐入つたら其で宜い、過つて





改たむるに憚る事勿れ、以後は愼しめ』先生の前は恐入つたといつて退つた金五郎、ア、何の事だ馬鹿〳〵しい、今夜浮船に遇ふ約束をしてあるに依て是非とも行かなければならん、ハテ何うしたもんだらう……、ウム今夜から出るなど叱言をいつた其の今夜出ようとは師匠も思ふまい、多少油斷があるに違ひないから、先生の御寢みなすつた時分を計つて門番に賴んで内々出して貰はうと、金五郎夜に入るのを待て居る。

## （第二席） 回向院開帳の事、並に祐天吉松善心に立歸る事

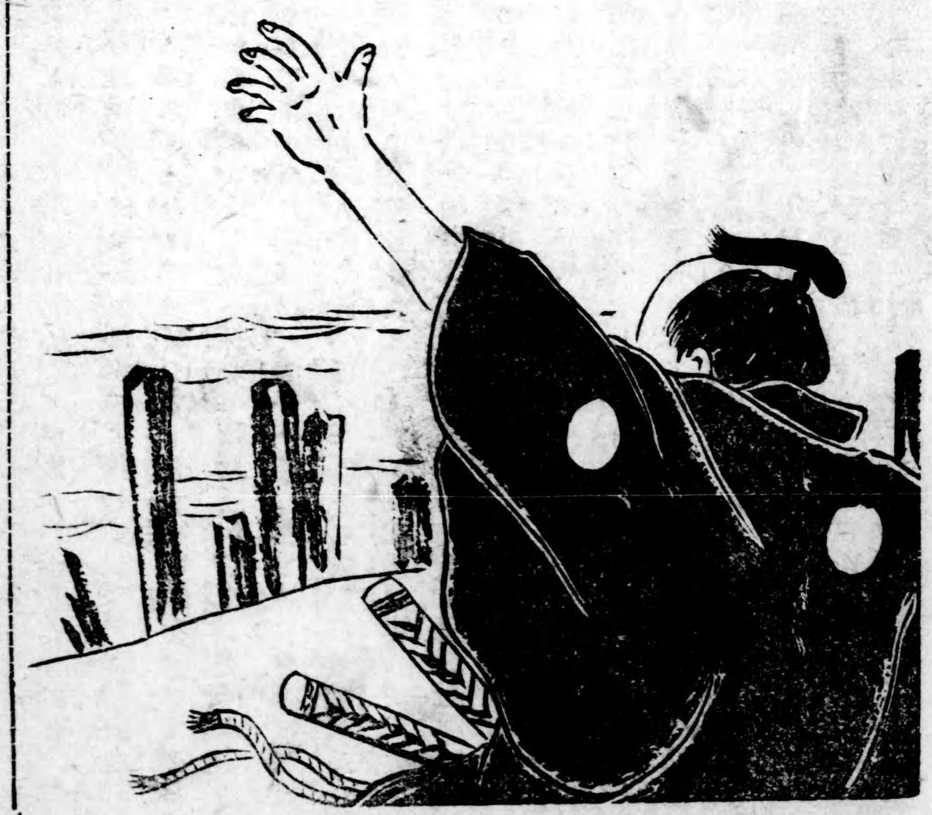
其の夜遲くなつてソッと支度をした立花金五郎、道場を拔出して表門へ參り 金『オイ門番』番『是は立花先生でございますか』金『一分遣るから外出を默つて居れ、明日暗い中に歸つて來るから』番『成たけお早くお歸んなさいましよ、知れると私が迷惑を致しますから』金『宜し〳〵……、ア、一分遣つたら懷中に金もなくなつた、扨何うしよう、相變らず柳原の堤でやらうか……』考へながら柳原の堤まで出て來たが今夜は少しも往來がない、偶々來たと思ふと乞食見たやうな奴だ、ア、困つたな、甚い不漁だ』と呟やきながら兩國の廣小路まで出て來ると此所はまた江戸一の盛り場賑か過きて何も出來ない、橋を渡つて尾上町、左へ切れて駒止の橋、百本杭、僅かしか離れて居ないが寂として誠に淋しい、ブラリ〳〵御倉橋の手前まで來ると、頭巾を冠り、飜れ松葉の印の附いた小田原提灯を提げ、一歩は高く一歩は低く、跟蹌と千鳥足でやつて來た男、石にでも

躓いたかヒョイと前へのめつて ○「アッ灯火を消した、ヱーイ……イヤ酔ては往かんものだ、無盡が當つて十五兩、之を落すと又家内の理窟を聞かなければならない、アヽ慥しかにある〳〵、先づ有難い、之さへあれば酔つて歸つても何もいはれる氣遣ひない」と獨り言をいゝながら橋を渡つて行く後ろから、バラ〳〵〳〵と駈け寄つた金五郎、ヤッと一聲拔打に斬附けた、彼の人は胴體二ッになつたかと思ひきや、身を轉すと共にピタリ大地に座つて終つた、失錯たと再び切り込む利手を取つて肩に擔ぎ、片膝突いてヤッといふ聲と共に、金五郎ドブン大川へ投げ込まれた、グッと沈んでガバ〳〵〳〵と浮き上り、プッと一つ息を吹いて、橋杭へ漸と手を掛け、上らうとする、其の上に聲あつて「サア上れ立花、イヤサ金五郎、早く上れ、斯ういふ事もあらんかと、汝が出て行く跡を尾けてまゐつた、最旱や師弟の縁は是れ限り、以來千葉の門人だといふな、扨も〳〵千葉周作は門人に何故斯縁が薄いのか、役に立つべき平手造酒はアノ始末、偶々其方に目を着けて居れば此の有樣、アヽ瓜の蔓には茄子は生らん、苦々しい奴だ」といふのは師匠の周作だチャラリ〳〵雪駄の裏金を鳴らして行つて終つた、濡しよぼたれて漸く上つて來た立花金五郎金「アヽ驚ろいた、本家ぢやア迚も敵はない、師匠が附て來るとは氣が着かなかつた、何しろ此の儘ぢやア仕樣がない」とスッパリ裸體になつて下帶一本になり、脫捨た衣類を丸めて重石を附け、ドブーンと川の中へ投込んで終ひ、腰の物だけを持て師匠は兩國の方へ行つたから橋を渡つて向ふへ行かうと、御倉橋を渡つて道を急いで多田の藥師の前の石置場の中へ入つて往來の樣子を窺





つて居る、とチャラ〳〵チャラ〳〵雪駄の音がするから又師匠ではないかとソッと見ると武家は武家だが年を老つてる、占たと金五郎バラ〳〵と後ろへ來て、金「御武家今晩は」○「何ぢやな」と振返る奴を物をも云はず突然肋三枚目の邊りをエイッ、アッといつて打倒れる處を馬乘りに跨がつて又ヤッと當身を食はし、是れで宜いと髻を掴んで石置場の中へ引摺り込み、素裸體にして其の衣類を着て終ひ、懷中物は勿論足袋から雪駄までソックリ間に合ひ先方の大小と自分の大小と鰻見たやうに四本差して 金「アハヽヽ是で宜い〳〵」と石置場を出て 金「ドレ吉原へ行かう



か……』○『ヤイ待て、ヤイ暫らく待て』金『ウム誰だ』二人ヌッと其れへ出て　○『奇な仕事をしやアがつたな、盗人の物した物を横取りをするといふ事はねえ筈だが、手並を見りやアまだ素人、汝等に斯んな眞似をされた日にやア此方等の飯の食ひ上げだ、默つて半分懐中の物を置いて往きねえ、其に又盗人でも情がなけりやア長保がねえ、大小なんぞ打奪て賣た所が二束三文澤山の直段に賣やアしねえが此武士は大小がなけりやア家が滅れて終ひ、妻子一族にまで迷惑を懸けなければならねえから下着を一枚取つて袴と大小だけ其の人の身體へ着けて置』金『成程なア』○『然しろ〳〵』金『シテ貴樣達は何だ』金『大仰の事をいふな俺達も盗人だ』金『ア、貴樣達は盗人か、太い奴だ』○『何をいやアがる、汝の方が餘ッ程太え』金『俺は別だ』○『巫山戯るな、手前ばかり別にする奴があるか』金『實は俺は天下の旗本立花金左衛門の悴金五郎といふ者だ、於玉ケ池の千葉周作の門人であつたが、仔細あつて勘當された』○『泥棒をすりやア仔細なくつても勘當されるのは當然だ』金『貴樣達の名は何んといふか、次第に依つたら仲間入をしてやらう』△『イケヅ太え野郎だな、人に名前を名乘らして次第に依つたら仲間入をしてやらうたア大きく出やがつた、併し素人にしちやア宜い度胸だ、尋ねに任せて名乘つて聞かせるが、俺は淺草藏前入山形にトの字を附けた武藏屋といふ呉服屋の丁稚上がり、今ちやア田町二丁目で糶呉服屋の武藏屋半次、泥棒仲間の通り名をお旦那半次といふなア俺のこつた』△『俺は經師屋の職人上り、脊中に彫つた累解脱の繡物が異名となつて祐天吉松といふ盗人だ』金『ウム、然らば仲間入を致すから何分賴む』半『然んな





ら兎に角俺の所へ來い』と連れ立つて來たのが淺草田町二丁目の徳田屋といふ質屋の裏、裏とは云へど一軒立ての二階屋で、却々氣の利いた家、女中も何も使つて居ず、表向きは武藏屋といふ糶呉服屋で内々はお旦那半次といふ大泥棒、弟分の祐天吉松、此所で立花金五郎と兄弟分になり、兄貴が武藏屋半次、吉松と金五郎は五分の兄弟で其から段々惡事を覺えお旦那半次と金五郎はノベッに夜盗追剝などを致しますが、吉松は餘り然んな事はやりません、此奴は巾着切といふ方で其の時分兩國に嵯峨の御釋迦樣の出開帳がございました、徳川家盛んの頃には御開帳といふと兩國の回向院に限つたやうでございました、此の出開帳の初まりは、紀伊國屋文左衛門の番頭仙臺の家來で林長五郎、浪人をして文左衛門の番頭になり百萬兩の身上にするまでには隨分種々な事をした中に嵯峨の御釋迦樣をば江戸へ持つて參りまして御開帳をしたのが抑も開帳の嚆矢ださうでございまして、莫大の金を儲けました、何日來ても〳〵嵯峨の御釋迦樣が損をして歸つた事が無い、其で外の御開帳も皆な回向院へ持つて參ります、尤も橋一つ渡ると其の時分江戸一の盛り場といはれた兩國廣小路といふ者があるし、どうしても人の足が向きました、明治になりまして儲けたのは奥州金華山から出て參りました辨天樣、夜詣り日詣り朝詣り、アノ長橋を萬燈引きも切らず、往來の雜沓夥だしく奉納物に賽錢は山のやうであつた、同じ奥州から出て參りましても、お竹大日如來、是は大層損をしたさうでございます、何で損をしたといふと、五十日の御開帳中まるで雨が降つて終つたので、十日間日延べをした所が、又八日降つて只二日しか御天氣

がなかつた、其の時の落首に

　　褌を忘れて來たかおたけさん

六十日がふりで開帳

成程ふりで開帳などは拜めたものでございません、丁度嵯峨の御釋迦の三度目の開帳、其の年長崎へ大象が渡つて參りました、今に江戸へ入つて來る、象の觀世物は珍らしいといふ評判に、興業師などは際物で儲けるのが上手なものでゼンマイ仕掛で象を作らへまして口上言いが股引腹掛大象と書いた半纏を着て、大入叶と書いた扇子を持ちまして舞臺へ出て、口上をいつて終うと、カチと木が入つて舞臺が二ツに割れると、象が躍出しになります、器械を廻すと象の鼻が前へブラツと垂れる、其れへ毛氈を掛けると、其の鼻に絲が附いて居て中でグイと絲を引張るから毛氈を頭へ載けて終ふ、器械で一廻りグル〳〵と廻ると、カチンと木が入つて、象の脊中が二つに割れると青竹が一本出て、唐子の姿をした小僧が上へ昇つて一本乘りをやる、此の觀世物が大層繁昌いたし、お釋迦樣の御開帳へ行ても象の觀世物を見なければ耻のやうにワイ〳〵いつて見物が參ります今も今とて一ぱいの見物、頻りに象の見世物を見て居る中に、年頃五十ばかりになりまする婆や　婆「お嬢さん和女簪を拔かれましたよ……此ン畜生何をしやがるンだ、お嬢さんの簪を窃りやアがつて」と若い氣の利いた巾着切の髻を摑んで引張る、此の聲を聞いて山のやうに入つて居る見物がグル〳〵ッと周圍を取卷きまして、尻尾の無い彌次馬といふお馬が　○「ヤア巾着切





捉まつた、泥棒が捉まつた、兩國の川には蓋が無い、賣卷きにして投り込んで終へ」△「何所の川にだつて蓋はない、口もなければ蔓もない、それは破れた土瓶だい」などゝワイワイ冗言をいふ中に髻を取られた巾着切　巾「オイお婆さん、串戯しちやア往けねえ、俺は何も窃りやアしねえ、巫山戯ちやア往けねえ」婆「何を吐しやアがる、窃つたに違ない」と爭つて居る所へ退け〳〵退けと見物を分けて入つて來たのは年頃二十四五、色の淺黑い鼻筋の通つた齒列の良い、眉毛の房々として居る好い男でございます、德川風の卷元結、龍紋の衣類を着流し、獻上博多の帶を締め、細身の大小落し差し、お芝居でする定九郎見たやうな男　×「ア、婆さん、憎くい奴だが兎も角も手を放してやれ」婆「だッて旦那、放せば逃

げます』×『イヤ乃公が附て居るから大丈夫だ、逃んとすれば眞二ツにして終ふ』婆『然うでございますか、ぢやアどうぞお賴み申します……』×『サア嬢さん、婆さんもモウ些と後に退んなさい……、アヽコレ見物騷ぐな〳〵……』ピシリッ、平手を以て巾着切の横面を打つた 布『アッ、痛えエヽどうか旦那御免なすつて下さい』×『簪しを出せ、イヤ無いとは云はせん、出せ、出さんか』巾『へエ出します』懷ろへ手を入れて取出して右の手で渡すを、左の手で其の侍が受取たのは金足の珊瑚の珠の簪、捨賣りにしても四兩や五兩のものはある品 ×『却々目の利いた稼ぎだな、何故盛り場へ來て斯んな事をする』巾『へエ、エー旦那斯うなつては仕方がございません、親父や阿母が長の病氣で何うする事も出來ません、藥の代に困りまして惡いと知りつヽ 據ろなくやりました、向後斯ういふ事は思ひ留まりますから、どうか勘辨してお呉んなさいまし、其はモウ私が爲した罪ゆゑ、御牢内へ送られて、どんな苦役を勤めるのも厭ひはございませんが、跡へ殘つた阿母や親父が臨困るだらうと思ふと、夫が冥途の障りでございます、どうか旦那助けてお呉んなさいまし』×『喧ましい、貴樣のやうな奴が捉まると、大抵然んな事をいふ、紋切形は極つて居る、さりながら僞はりにもせよ好い言葉だ、親の病氣といふは……さて嬢さん、嘘か眞か分らんが、假にも親の病氣といふが、助けておやんなさるか、之を役人に渡して、町奉行の調べになれば、ソレ引合ひ又引合ひと一々喚出されるも隨分迷惑だが、併し懲しめの爲め役人に渡すと仰しやれば、身共が此儘引立つて參る、其とも助けておやんなさるか何れとも其許の御了簡次第ぢや』





嬢『ハイ、エヽ妾は宜しうございますとも、親御が病氣といふことなら助けて上げて下さいまし』×『ア、流石大家の嬢さん、能く聞き濟なすつた、コレ有難く御禮をいへ』布『へエ、どうもお嬢さん何とも有難う存じます、御恩のほどは忘れません』×『必と忘れるな、お嬢さん斯ういつて居るから、何卒免してやつて下さい』嬢『エーエ、宜しうございますとも』×『コレ奴、能く覺えて置け、米澤町、尾上町、兩國を股に掛けて身共のやうな者が居る以來兩國などへ來てうろ〳〵して居ると、其の時こそ捨置かんぞ、必らず忘れるな』と再び平手で横面をピシリ、モウ一つピシリ、巾『アッ……』×『サア行けッ』巾『へエ御免下さいまし、御免〳〵』と見物を押分けて行かんとする後ろから、彼の柔やかの嬢さんが 嬢『アッ、少々お待ちなすつて下さいまし御巾着切さん〳〵』往來の者は吹出した』ウフッ、お巾着切さんだといやアがる、物も叮嚀過ぎると可笑くなる』×『コレ〳〵嬢さんが呼んで居るから此方へ來い』巾『へエお嬢さん何でございます』嬢『お前さん今聞いて居れば、阿父さん阿母さんの病氣で、藥の代や食べるに困つて賊をすると仰しやいましたが、盜んだもので藥を買つて宛がつたとて、親御が何で喜こびませう、却つて毒を服ませるやうなものでございます、以來斯樣な事は必らずともになさらぬやう、一家親類親兄弟は云に及ばず貴郎が住んだ町内の人達にまで耻を搔かせるやうなもの、利は細くとも正の稼業をして、然うして親御を養つてお上げなさい、少しばかり資本の御金を上げませう、戸板の上へ飴菓子を並べ、蜜柑を商なうても堅氣は堅氣、商人は立派な商人でございませう』と小菊の紙に幾らかの金を包んで

出した、巾「ヘエどうも恐入ます、旦那お貰ひ申しても宜うございませうか」×「大家のお嬢さんが下さる折角の思召し、御親切を反古にしてはなるまい、貰へと私が差圖せんが返せとも云はん」巾「ヘエ分りました、ちやアお辭儀なしに頂戴致します、お嬢さん有難う存じます」中は幾らか白紙に包んだ金を押頂だいてコソ〳〵と見せ物小屋を出て行きました婆「サアお嬢さん參りませう、皆さん御免なさい」と婆やアは娘の手を取つて之も出て行く、後ろ姿を見送つて ○「エーオイ留ッ子」熊「何だ熊」留「巾着切めえ、お嬢さんに幾らか貰らつて行やアがつた、俺達も考へが違つたなア」熊「何を」熊「俺達が早く簪を引こ抜きやア幾らかになつたんだ」熊「馬鹿下らねえ事をいふな、役人の耳にでも入つて見ねえ捕まるせ」熊「アハ、、嘘だ〳〵、何處へ彼奴め行きやがるだらう、ア、彼方へ行く〳〵」とゾロ〳〵尾て來る彌次馬を漸々追拂つて、急いで歸つて來た淺草田町二丁目の武藏屋半次の表ガラ〳〵〳〵 吉「オ、半次兄哥家か」半次が内から障子を少し明けて半「吉かマア此方へ昇れ」晝間は糶呉服屋の武藏屋半次、向ふ三軒兩隣は云ふに及ばず、近所界隈皆な然う思つてるんだ、ナゼ旦那といつて入つて來ねえ、さもなけりやア武藏屋さんと云つて來るが宜いぢやアねえか、半次兄哥家かといふ奴があるか」吉「イヤ其が兄イ泡を食つたもんだから」半「ウム、然ういやア顏の色が大分惡いが仕事を仕損なつたな」吉「どうも兄哥、今日といふ今日は實に俺は驚いて終つた」半「どうしたんだ、立花は別か」吉「モウ其中に立花も歸つて來るだらう」半「何うした」吉「兩國の廣小路で仕事をしようと思つた所が、どうも今日は宜い仕事がねえ、





金五郎と二人で回向院の御釋迦の開帳へ入つて行た」半「ウム」吉「然うすると象の觀せ物があつたから、其處へ飛込んだ」半「成程」吉「見ると何所の嬢さんだか知らねえけれども金足に珊瑚の珠の簪を差して居る、此奴を一本手繰て見ようと思つて宜い工合に引いた」半「ウム」吉「スルと後ろに婆やアが見て居て、突然髷を掴んで中指へクル〳〵と元結の所を搦んで、巾着切だ盗人だと斯う吐しやアがる」半「いはれたつて宜いぢやアねえか品物さへなけりやア宜いんだ、吸取の立花金五郎に渡して終やア何といはれたつて差支ねえぢやアねえか」吉「其が吸取の立花に渡さうと思ふと、遠くの方に象の見せ物を面白がつて見てゲラ〳〵笑つてゝ氣が着かねえんだ」半「馬鹿野郎何の爲に附てきやアがつたンだ」吉「逃ようとすると彌次馬に取卷れて、兩國の川にやア蓋がねえ、賣卷にして投り込んで終へとワイ〳〵いやがるんだ」半「ウム」吉「其でも立花は流石武士だ、其處へ來て斯う口を利いて俺の横面を平手で酷く撲りやアがつた」半「ウム」吉「立花の扱ひを好機に小屋を飛出さうとすると其の娘が御巾着切さんといやアがるんだ」半「ヘエー」吉「正の稼業に就くやうに資金にしろといつて幾らか紙に包んで呉れた」半「フーム幾らある」吉「ナーニ四百か五百だらう、何の稼業の資金になんぞなるものか、此の先に大分鮮魚が見えたから刺身でも誂へて一杯やらうぢやアねえか」半「ア、然ういふ事にしろ、間の惡い時には吉松仕方がねえや止せ」吉「止さう止さう」半「幾らあるか明けて見や」吉「ウム」内懷ろから取出した其の包み、開いて見れば七重八重色も變らぬ山吹色、二分金許りで五兩二分吉「ヤア兄哥之やア大した金だ」半「ウム大層光るな」

驚ろいたも道理、百が味噌二百が薪木二朱が米、一分自慢の年の暮哉といつた、此の時代の五兩二分といつたら、今の金にして何十兩といつて過言でない、其だから彼の娘が五兩二分包んで商法の資本を上げるといつたは尤も千萬、

牛『ウム、大した金だ……、吉、汝何を考へてる』吉『兄

哥俺は巾着切は止めだ』牛『何故止める』吉『俺は親の有難えといふ事が初めて解つた』牛『ウム』吉『間に合せに親父や阿母が長の病氣といつたら、盜賊して持つて行つた金で親を食はしたり藥を服ましたりしたッて親は喜こぶまい、資金を遣るから堅氣になれと意見をして呉れた、親といふ字を出したればこそ斯うだと思ふと有難え、草場の蔭の兩親が俺が賊をして居たら浮ばれなからう、今日限り巾着切を止めるから、兄哥濟まねえけれども兄弟分の緣をプッツリ切つて呉れめえか、是から俺は堅氣になる』脂下りに煙草を喫みながらジッと吉松の顏を見詰めて居た武藏屋半次が、吉『其やア吉、結構な話だ、俺だッて盜賊巾着切を宜いと思つてやつちやア居ねえ、兄弟分の緣を切るから堅氣になれ』吉『併し兄哥人間萬事塞翁が馬、昨日まで多くの家來を使ひ巨萬の金を積んで贅澤三昧盡して居た者も一夜の中に乞食同樣の身になる者もあれば、橋の上に菰を被つて一文三文の袖乞ひをして居た者が一つ運に叶へば立派な身上になる者もある、俺も堅氣になつた曉、今いつた通り金滿家の旦那になるか、乞食になるか分らねえが、假令橋の上で一文頂だかして下さいと袖乞をして居ても、オ、吉松か不便だと、三文五文惠んで呉れなくッても宜いが其代り若又俺が地面地屋敷持つた大家の旦那になつても、決して元の兄弟分だ、兩國の巾着切などゝいふ事を人にいつて貰ひ度くねえがどんな者だらう』牛『其やア大丈夫だ、何所で顏を合したッて口なぞを利く氣遣えねえから安心しろ、だが堅氣になると立派に云つて、又此の後巾着切や夜働らきをしたといふ事を聞いた其の時にやア、此の半次が汝を生かして置かねえぜ』吉『何で然

んな事があるものか、然し兄哥お前も物の解つた人だ寧そ堅氣になんなさらねえか」牛『サア俺も堅氣になりてえ事は山々だが、二十代から今年四十四になるが、今まで積る惡事の數、窃盗や追剝なら兎も角も人殺しの五人もして居る身體、今更堅氣になつた所が、御用と食やア何うしても磔刑 兇 狀は免れねえ、だが俺は非道の長者を倒しても、貧民に施こす、マア義賊……、頭に義があつては賊は出來ねえが、私慾にばかり賊はしねえ、俺はモウ堅氣にならうたッてなれねえんだから俺の事は云はねえで呉れ、お前なざア高が兩國の巾着切、幾ら金を取つた事があるものか、一番汝が能く取つたのは三兩二分、堅氣になつて元の罪が發た所で傳馬町の御牢内へ三月四月入つてりやア其こそ白い身體になつちまうんだ、今此所で止めればマア傳馬町の御戸前口を潜らねえでも汝は清む身體だから堅氣に必となれよ」吉『大きに有難う』牛『併し堅氣になつた所で、汝といふ人間は、何か稼業があるか』吉『ウム兄哥、俺は稼業があるんだから心配しなさんな』牛『何だ稼業といふなア』吉『俺は兄哥、經師屋の職人だアな』牛『然うか、今まで俺は然んな事を聞かなかつたな』吉『祐天といふ綽名だつて、經師屋から背負て來たんだ』牛『ア、然うか、汝仕事が出來るのか』吉『エー』牛『仕事が出來るのか』吉『ウム經師屋ぢやアマア仲間に些と嫌がられてるんだ』牛『餘まり仕事が出來ねえでか』吉『串戯いつちやア往ねえ、出來るんでよ』牛『フーム然うか』吉『俺の親父は深川六間堀の經師屋半助といつて、俺が九歳の時に死んで阿母は十二の時に死んでしまつた、所で深川の常盤町に經師屋の久兵衞さんといふ、是は親父の兄弟弟子だから此所へ引





取られて年季野郎でマア可愛がられて居る中に十七八になつて何うやら雜仕事の一つもするやうになつたが、どうも俺は疎忽かしくつて往けねえんだ」牛『成程』吉『隣りに金床といふ髪結床がある其所の親方が不動樣の畫を持て來て、斯うして置ては勿體ねえから掛軸にしてえと思ふ、何日でも閑の時で宜いから表裝へて貰ひてえといふんで、ア、宜うございますと、其を俺が貼つたんだ』牛『成程』吉『大層能く出來たと自分でも思ふ位、早速隣家へ持たして遣ると、間もなく隣りの親方が怒つて來て、巫山戯ちやア往けねえ、此の不動樣が掛けて置かれるかと云ふから、親方と二人で開けて見ると兄哥の前だが長え月日には隨分裏返しに貼る事もあるもんだが俺は不動樣を逆まに貼つちまつた』牛『成程鈍馬の野郎だな』吉『親方が怒つた逆さ不動てえのは聞いた事がねえ角兵衞の不動が拜まれるかと小言を云はれて、汝ぐれえ疎忽かしい奴はねえ、芝三緣山增上寺三十六世の大僧正祐天和尚は十二の時に御出家をなすつたが、どうしても御經を覺えない、ソコで一遍死なうとしたが又御心持ちを取直し、下總の成田山へ登つて三七日の間斷食をした處、不動樣の御利益で鈍血を吐いて清血を增し天晴の名僧になつたといふ、汝も成田へ行つて斷食をして、疎忽かしいのを直して、仕事の良くなるやうに不動樣を祈つて來い、と親方に云はれて下總の成田へ行き、斷食堂へ入つて二十一日行をして其から歸つて來て一生懸命仕事をすると、二三年經つ中に段々竦忽しいのが直つて、仕事も滅切り良くなつた、經師屋の極意といふのは瓢簞の中へ紙を貼るンで、是が大體のものには出來ねえ、俺はマア其れもチャンと出來るやうになつた、是は

誰のお庇護だといふと、親方に訓へられて不動様を祈つた爲だから、其の恩を忘れねえやうに、脊中へ不動様を彫うと考へたが、月に七日の汚れのある女にだツて事に寄やア近寄らねえとも限らねえ、又不淨場へだつて入るのに、不動様を身體へ彫つちやア勿體ねえと、段々考がへると、初め祐天様の引例をされて其から修行をしたのだから、祐天様の祈りの誠で下總羽生の堀越與右衛門の女房累を解脱さしたといふ話を聞て、其から累解脱の分身をした、ソコで誰いふとなく祐天吉松と綽名を呼ぶやうになつたンだ』半『ウーム然うか、其ほど立派な技倆がありながら何で巾着切なんぞになつたんだ、折角マア氣が着いたんだからモウ金輪際惡い事をする心を出すな、人間は何でも堅氣で送るほど結構な事はねえ』吉『ウム有難う、其やア然うと兄いお前は宜いが、是を聞いたら立花が嘸驚ろくだらうな』半『ナニ彼れも武士だ、斯ういふ譯だと云つたら苦情をいやアしめえ、萬一苦情をいやア俺がアノ野郎〳〵ちまう』吉『だつて先方はお玉ケ池の千葉周作の免許取りだぜ』半『串戯いつちやア往ねえ、俺も今ぢやア斯んな半チクの身體で居るが、若え時に習ひ覺えた劍術か腕にある斯う見えても常州茨城水戸様の御家來四ノ宮隼人といふ御指南番の免許取俺が彼奴を睨み附ければ蛇が見込んだ蛙同様、何で動きを取らせるものか』話半ばに表の格子をガラ〳〵〳〵 金『武藏屋さんはお在かな』吉『兄哥立花だぜ、訝う沈着てるな』半『イヤ流石は武士心掛が豪えものだ世間を憚かつてア、いふ工合……イヤ是やアお出でなさい、どうぞ此方へ』金『ハイ御免……イヤ吉今日は仕事を失錯なつたな』吉『立花失錯なつたぢやアねえ、眞正に兩國で驚





ゐいたお前が吸取だから簪を受取て呉れりやアア、彼の婆アに酷い目に遇はねえでも宜いんちやアねえか』金『ウム氣の毒だつた、併し身共が口を利いてやつたから那れで宜らう』吉『其やアマア濟んだから宜いけれども、友達だから那んなにビシヤ〳〵打たねえでも宜いぢやアねえか』金『アノ位に打たなけりやア情が移らない』吉『餘まり移り過ぎらア、其は然うと今武藏屋の兄哥に話をして居た處だが、先刻の娘が呉れた金を披いて見たら五兩二分あつた、何でも大家の娘に違えねえ』金『フーム』半『就て立花今吉が是々斯ういふから、俺は苦情はねえといつたが、お前も苦情はなからうな』金『其は豪い吉松、何で身共が苦情があるものか大丈夫だ安心しろ』吉『其やアどうも有難え、主に苦情がなけりやア何より結構だ』半『さう極つたら吉や、長居は無用だ早く往きねえ』吉『ぢやア兄哥御免なさい……』半『ア、待て〳〵吉松、今まで汝に兄哥と呼したンだから、小遣ひの些とばかりも持してやりてえが汝是から堅氣になる身體、俺の懷ろの金は汝も知つての通り、何分何厘何毛と算盤玉をせゝつて汗や涙を流した金ぢやアねえ、皆な盗したものだから、斯んなものを持ツてたら却つて身の汚れになる、嬢さんから下すつた、情の籠る五兩二分、其れだけを持つて行きねえ』吉『イヤ兄哥、假令欲いと思つても、之を貰つて行ちやア俺は義理が立たねえ』半『マア宜いから持つて行け』半『金は使へば失なるが、小菊の紙を捨てねえで、大神宮様の棚へ飾つて朝晩拜んで今日の事を忘れるな』吉『其ぢやア圖太〳〵しいやうだが、面を被つて貰つて行く、然んなら武藏屋の兄哥、立花さん……』半『ウム吉、誠に氣の毒だが淺草田町二丁目の武藏屋半次とい

ふ者が小塚ッ原で三尺高え木の空で芋刺の刑になつたと聞いたら……』吉『兄哥、皆なまで云ひなさんな若しも然んな事になつたと聞きやア、非人に頼んで髪の毛の一本でも貰らつて別に葬むり直し、必と供養を怠たらねえやうにするよ』半『ア、吉其を聞いて安心した、名殘は盡ねえ、早く行け』吉『然んなら御免』と吉松は別れを告げて其儘に何處ともなく立去りました、跡へ殘つた半次に金五郎、金『人間といふものはをかしいものだなア』半『さうよ併しまアあれで吉が堅氣になれば結構だ、俺達にはどうも盜賊根性が錆付いてるから離れねえ』金『ワッハッハッハ大きにさうだ』相變らず此二人は善からぬ事をいたして居ります、夢の間に早や三月ほど經ちました、折々は噂をする 半『何うしたらうな金五郎、吉松は』金『ウム何うしちまつたか、マア彼奴の事だから堅くなつて經師屋をして居るだらう』と話を致しましたが尋ねて見るといふ考へもない、去る者は日々に疎し、日を經るに從つて其の噂も絶えました。

## （第三席） 加賀屋の娘象の懸物を破る事、並に吉松加賀屋へ赴く事

爰に本郷二丁目に百萬石の加賀樣のお出入町人加賀屋七兵衞、一代身上で三萬兩からの金滿家、明治の今日でいへば何十萬といふ身上でございませう、一人娘のおぬひといふが、今年十九、水の垂れるやうな美女で、人綽名して本郷小町、八百屋お七此方の美人だなどゝ、本郷界隈の人達が寄ると障ると噂を致します、此頃おぬひが病の床に就たきり、加賀屋夫婦は心配して 七『乳母





一寸來て呉れ』乳『旦那樣何御用でございます』七『外ぢやアないがの、娘が三月許り前、嵯峨の御釋迦樣の御開帳へお前が附て行た、那れからといふもの碌々口も利かず物も食べずプラ〳〵病、お醫者樣に聞て見ると何か胸に思ふ事があつて、其で氣鬱の病になつたのだといふ、事によつたら戀煩らひとでもいふのぢやアないかと思ふが、乳母アお前は始終傍に居るから樣子が分るだらう、何か是といふ心當りの事はないか』乳『旦那樣私も種々考へました大方然うぢやアないかと思ひましたから、お嬢樣に若しや思召しに叶つた男でもおあんなさるなら仰しやいましと申上て見ましたが、何うしても仰しやいません』七『どうも困つたな、葉櫻になるまで愚痴な婿選み、餘り家内が心配をして、何うの斯うのといつて居る者だから、遂に斯んな事になるんだ、どうかマア乳母お前娘の胸を聞てお呉れ』乳『畏こまりました、御氣分の宜い時に御伺ひ申して見ませう』と乳母は娘の居間へ行く、七兵衞夫婦は茶を喫みながら猶種々と話して居る所へ、店から番頭の幸兵衞が來て 幸『エー旦那樣』七『ア、番頭どん何か用かえ』幸『明日 正午の刻までに御納め申す御約束の佐竹樣からの御誂らへ、山王樣御祭禮の繪卷物が、經師屋の茂助さんの所から出來てまゐりました』七『ア、然うかえ、中橋の豐國さんが半年も掛つて漸々描き上つたんだが、念の入つた結構の繪だ、……イヤ番頭の前だけれども、經師屋の茂助さんは仕事が宜いな』幸『左樣でございます』七『年を老ると、何の仕事でも艶が失なるものだが、此の人は少しも艶が拔けない、巧いものだ、ア、是やア良い表裝を着せた、此の位の表具でなければ往けない、成程萬事私に任せて置

て呉れろと、茂助さんが然ういつたが巧いなア、水晶の軸だ、却々良い水晶だ……、何うだ繪も結構ぢやアねえか、山王様の御祭禮、天下祭りといつてな、種々曳物などを描いたんだ、……アア乳母何だ娘に藥を服ませるのか、服ましたら一寸來な』乳『ハイ、……アノ旦那様お藥を上げて參りました』七『ア、然うか、之はな、佐竹のお姫様へ上がる山王様の繪卷物、餘り能く出來て居るから、汚さないやうに持て行て見せてやんなさい、少しは氣も晴れやうから……』乳『承知致しました……、アノお嬢さんえ』ぬひ『乳母アロを利いてお呉れでない、私は何の話をするのも嫌だから』乳『イエお話をする譯ぢやアございません、此れは佐竹様のお姫様へ上げる山王様御祭禮の繪卷物ださうでございます、マア御覽遊ばせ綺麗でございますよ、山の手の本町といふ麹町名代の象の曳物、御上覽の時に麹町の御門から代官町へ入らうとすると、御門へ半分しか入らなかつたといふので半象御門と云のだと申ますが、又或人に聞ましたら服部半藏といふ方が番をして居たから半藏御門といふのだと云ひました、何方が何うだか私には分りませんけれども、マア此の象の大きい事御覽遊ばせ』と頻りに乳母が機嫌を取り〳〵、大象の曳物の所を開いて見せやうとする、おぬひは何にも云はず金足珊瑚の珠の附いた簪で頭を掻きながら、其の象の曳物の繪を見て居りましたが、突然簪を拔いてぬひ『乳母ア私はネ此の象が癇に障つてならないんだよ、エ、口惜しい』ブツリ象の繪へ突通した、乳母は驚ろいて乳『アレお嬢さん何をなさるんで、マア和女は飛んでもない事をなさるぢやアございませんか、御我儘も大體になさいましよ、佐竹様





の御屋敷へ納める品を瑾物にしちまつて何うしたら宜うございませう』と顔の色を變へて右の繪卷物を持つて乳母は奥へ飛んで來て乳『旦那〳〵』七『何だ乳母ア大きな聲をして』乳『だツて貴所大變なことをして終ひましか』七『何うした』乳『アノお嬢さんが繪卷物を見て在つしやいましたが、此の象が癇に障るといつて突然お簪を突通したので此の通り二ツ穴が明いて終ひました、どうも飛だ事をして相濟みません』七『エーツマア飛でもねえ、此んな瑾物が御屋敷へ納められるか、明日の正午の刻までに納める事になつて居る品だ、何だつて然んな狂人見たやうな者に見せたんだ』乳『其でも旦那貴所が見せろと仰しやいましたから……』七『ウーム、ぢやア仕方がねえけれども……、何にしろ困つた事が出來た、店へ行つて德藏を呼んで來い』德藏といふ若い衆が參りました 德『ヘエ旦那何御用で……』七『神田佐久間町の經師屋の茂助さんの所へ行つて、大急ぎの仕事が出來たから、刷毛を持つて直ぐに來て呉れと、飛んで行つて來な、早くだせ……』德『ヘエ畏まりました……、ヘエ旦那行つて參りました』七『恐そろしい早かつたな』德『大急ぎと仰しやいましたから、一生懸命飛んで行つて來ました』七『然うか、御苦勞だつた、茂助さんは直ぐ來るかえ』德『其が今親方が本所の津輕様のお屋敷へ出仕事に行つて、日が暮れなくッちやア間に合はないといふんでございます』七『フーム、俺の所に斯んな急ぎの仕事のあるのに、津輕様へ行つて終まうといふのは餘まり酷いぢやアないか』德『イエまだ此方から迎へに行かない中に行つたんでございます』七『成程、其ぢやア仕方がないな、ぢやア日が暮れても歸つたら直ぐ來るやうに然う

いつて來たか』德『ヘエ然う申して來ました』七『ア、仕樣がないな』と旦那が脂下りで煙草を喫んで居ります、店では番頭若い衆達が　○『餘まりどうも娘さんを我儘に育てるから斯んな事になつちまうんだ眞正に仕樣がない』△『全たくだ』と話をして居ると、表から店の方を覗いて、此所かなといふやうな樣子をして居る年の頃二十六七の色の淺黑い鼻筋の通つた齒列びの宜い眉毛の房房として、油氣なしの水髮で、唐綾の着物に目倉縞の腹掛、千草の股引に白足袋、手拭を竪に四ツに疊んだ奴を帶の間に挾み、鼻緒の細い麻裏、唐綾麥藁縞の羽織の紐を一寸結んで、萠黃の風呂敷に糊箱を包み刷毛を一梃持つて居るのは經師屋の職人らしい　○『一寸番頭さん』幸『何だい德どん』德『好い男ぢやアありませんか』幸『ア、好い職人だ、芝居にもアンナ好い男の職人は少ないね、マア音羽屋だらうか』德『然うですねえ、イヨ音羽屋ア……』幸『オイ賞めちやア往けない』×『眞平御免なさい』德『番頭さん何でございませう竹ツ篦を呉れろといふんですか……』幸『然うぢやアない、生粹の江戸ツ子で、口の利やうが早いから分らないのだ、眞平御免なさいと云ひなさるんだらう』德『へ、エ成程……どうも貴郎相濟みません、何方から御出でになりました』×『私やア神田佐久間町の經師屋茂助の所から參りました、親方が津輕樣の屋敷へ出仕事に行つて歸りが遲いからツて姐さんが心配して、大切の御華主へお間を缺かしちやア成らねえから、どんな仕事だか知らねえが、汝行つて來て呉れろといふんで私やア職人でございますが、直ぐにやつて來たんで、どんな仕事だか兎に角拜見を致しませう』幸『ア、左樣でございますか、マアお昇んなさい





まし、只今取次ぎますから……』奥へ來ると主人の七兵衞、どうも困つたと途法に暮れて居ります　德『エー旦那、經師屋の茂助さんの所から斯々いつて參りました、年頭は二十五か六か七か其とも八でございませうか』七『何をいつてるんだ』德『好い男の職人で、どんな仕事だか一寸拜見を致しませうといふんで……』德『然うか、折角だが親方でなけりやア仕樣がない、オギャアと生れてまだ二十何年ぢやア碌な仕事が出來るものか』德『其れぢやア歸しませうか』七『マア待て〳〵、歸さないでも宜い、まんざら素人でもあるまいから、此の瑾が親方なら直るとか直らないとかいふだけの見極めを附けて貰ふから、此所へ通しなさい』德『ヘエ、エーどうも御遠さまいましたどうか此方へお昇んなすつて……』ヘエといつて直ぐに昇るかと思ふと、往來の眞中へ出て、帶の間に挾んであつた手拭を取つてバッバと手先き足先きなどはたいて、尻を卸し　×『御免下さい』と上に昇りました、若者が案內をして奥へ參り德『ヘエ經師屋の茂助さんから來た若い衆は此の人でございます』七『ア、此方へお入り……』×『ヘエ、私や御取次から申上た通り、親方の代りに參りました、何んな御仕事か拜見致します』七『ハイ〳〵其は御苦勞さま、山王樣の繪卷物に瑾が附いたんだが、お前さんぢやア往けない、親方に出來るか出來ないか其だけ見て呉れゝば宜い、明日の正午の刻までに納めなければならない品だが、此の穴を巧く親方に繕ろへるか何うだか、後で知れるやうでは何にもならない、お前さんはどんな仕事をするか知らないが、ギャツと生て二十何年、失禮ながらマア碌な事は出來まい』職人之を聞くと勃然として　×『何をいやアがるん

だ、箆棒めえ、年が若けりやア仕事が出來ねえと誰が極めた、巫山戯たことをいふな、此の頃親方が目が上つて良い仕事が出來ねえから俺が代りをして、親方の名前で出してるんだ、年が若えから碌な仕事が出來ねえといふなア汝等の考へだ、三萬兩か四萬兩の端た金を持つたつて大きな面をするな、何でえ錢は其方のもんだが腕は此方のもんだ、嫌なら仕事をしねえで歸るだけよ、瓢箪の中へ紙を貼るのが經師屋の極意だ、其より面倒の仕事なら兎に角、只年が若えから良い仕事が出來めえたア何を云やがるんだ、何だ斯んな掛物を自慢らしく掛けてねえで引裂いで終ひねえ、俺が直ぐに貼り替てやるから……』七『オ、大變な若い衆が來た……イヤ、若い衆誠に濟まない、私が惡かつた遂ひやきもきして居るものだから口が滑つたのだ、此の通り詫をする』×『然う貴所のやうに兩手を仕て詫られちやア困ります、私で宜りやア兎に角拜見致しませう』七『ア、お前さんで宜いどころではない、飛だ失禮をいつて誠に惡かつた、サア是れにある此の繪卷物へ瑾を附けたンだが之が直るだらうか』×『ア、是やア旦那簪で突いたんですね』七『イヤ是は驚いた、何うして其れが分るだらう』×『ナニ同じやうな穴が二つ明いてる、夫婦穴といつて足の揃つたもので刺した瑾でございます、併し惡い戯らをする奴があるもんだ』七『イヤ家の娘がやつたんだ』×『へエーお嬢さんが……マア宜いお樂みでございますねえ』七『巫山戯ちやア往けない、斯んな宜い樂みがあるものか、何うだらう直るかね』×『宜うございます繕ろつた跡を透して見て分るやうぢやア眞正に直したんぢやアねえ、誰が見ても分らねえやうスッカリ繕つて御覽に入れますか

ら、何所か氣の散ねえ座敷を貸してお呉んなさい」七『其はどうも有難いどうかお願申す、ちやア那の奥の座敷が靜かで宜いだらう、徳藏や此方を八疊へ案内をして上げな』徳『ヘエ此方へお出でなさい』若い者に案内されて廊下を通つて來た經師屋の職人 ×『ア、宜い庭だ石の置き方、アノ松の木の工合といゝ、石燈籠も大したものだ、人間萬事金の世の中、金がなければ斯ういふ贅澤の活計は出來ない、オ、此の御座敷に御病人があるんですかい』徳『お嬢さんが身體が惡くつて寢てお在なさるので……』×『ア、然うでございますか』とヒョイと覗いて見てビックリ驚ろいた ×『ヤツ其ぢやア兩國の回向院で俺が簪を拔いて捉まつたのを堅氣になれと意見をして、五兩二分の金を呉れたのは此の家のお嬢さんだつたか、當家のお嬢さんと知れた上は、今夜から本郷の方へ足を向けちやア寢られねえ』これは申さずともお解りで御座いませう、例の祐天吉松でございます 徳『經師屋さん何を考へて居るんで……』吉『ヘエ、何のお座敷でございますえ』徳『ヘエ此方で』吉『ア、然うですかい、濟みませんが、どうか此の手焙りへ火を二つばかりと、御盆に綺麗な御湯呑か何かへ水を汲んで持て來てお呉んなさい』徳『ハイ……、エー若い衆さん是で宜ございますか』吉『ア、有難うございます、之で宜かからお前さん彼方へ行ておくんなさい』火鉢へ小さい鍋を入れ、盆へ糊を薄く解いて、其から例の繪卷物を擴げて、口へ水を含んでピーッと吹いて忽まち仕事に掛つた 吉『オ、誰だい其所から覗いてるのは、彼方へ行てお呉んなさい、チラチラして仕事が仕憎いから』七『然う怒んなさんな俺だ』吉『ア、旦那でございますか、然んなら此方へ





お入んなさりやア宜いに……』仕事は何ういふ工合にやるものか、私共には分りませんが、暫らく經つて出來上りました 吉『ヘエ旦那御覽を願ひます』七『ア、成程巧まいものだ大きに御苦勞だつた、サア那方で一口やつてお呉れ』吉『イエ私は御酒は頂だきません』七『然んな事はあるまい』吉『イエ其に恐ろしい忙がしい仕事が他にあるんで、其方へ一寸行かなけりやアなりませんから……』七『マア其にしても一口やつて行つても宜いぢやアないか』吉『ヘエ其ぢやア何でございますか、貴所の家の急ぎの仕事さへして終へば、他の仕事は遲れても宜いと仰しやるんでございますか』七『お前さんはどうも理窟ぽくて困る、ナニ然ういふ譯ではない、其では少しばかりだ是を持つて行てお呉れ』吉『イエ、私は親方の代りに來たんでございますから、親方が頂いて其内から幾らかの手間を貰へば宜いので、假令仕事の代でなくとも此方樣から直接に手前が頂戴して行て、後で小言をいはれると往ませんから、どうか其は親方に御渡しなすつて下さいまし、どうも御喧ましうございました左樣なら』と其儘祐天吉松は歸つて終つた 七『ア、どうも良い職人だ、生粹の江戸ッ子肌の人だ』と主人の七兵衛感心をして居る所へバタ〳〵〳〵 乳『旦那』七『何だ乳母ア、お前は女の奉公人頭ぢやアないか、バタ〳〵家の中を駈けて歩く奴があるか』乳『御免遊ばせ、アノ旦那分りましたんでございます』七『何か分つたのだ』乳『お嬢さんの戀人が分つたのでございますよ』七『ナニ娘の戀人が……其は誰だ』乳『アノ今の經師屋さんでございます』七『エ、アノ經師屋……』傍に内儀さんが聞て居ましたが 内『マア貴所、何といふ事でムいませう、外に男が

無ぢやアなし職人なんぞに惚るといふのは……』七『マアお前默つてお在職人なんぞといふが、士農工商といつて商人の上に立つ職人だ、アー結構だ、俺も氣に入た、俺が縱令氣に入ねえでも娘が氣に入つた者なら職人でも藝人でも婿にしようと思ふ、親が氣に入つたからつて當人の好かねえ者を無理に持たせたりなんぞするから間違ひが起るんだ、眞逆に穢多や盜賊ぢやア往かねえけれども……だがまてよ……アノ經師屋は今日はじめて來たのだがどうして娘が』乳『……其が旦那大變なのでございますよ、私はネこの象が癪にさはるプツリ……でございませう』七『ナニを云つて居るのだか、お前のいふことは薩張わからないが』乳『ダカラ大變でございまさアね、象から種が上つてお嬢樣のお口があいたので……』矢張わからない、之から一通り話をして 乳『アノ經師屋が何日か、嵯峨の御釋迦樣の御開帳の時、象の觀世物小屋でお嬢さんの簪を拔て、私が捉まへたのをお嬢さんが御金を惠んで、意見をしておやんなすつた巾着切なんでございます』七『エーッ』加賀屋七兵衞是には驚ろいた 乳『所がアの象の繪卷物の繕ひに來た經師屋の職人を見るとつてお在なさいますよ』七『然うだらう、三月も病つて居る位ゐだから……、ア、加賀屋七兵衞一代に三萬兩の身上を作る間に無理があつたと見える、一人娘が人もあらうに巾着切なぞに惚れると云ふは何かの罰が中つたに違ひない、併し之は巾着切でも堅くなつて是れだけの良い腕を持つて居れば職人だ……、乳母娘に心配するな何か親父さんに考へがあるらしい、と然ういつて宥め





て置きな』乳『ハイ畏こまりました……、エーお嬢さんに然う申上て參りました』七『何だ娘は』乳『親父さんにも阿母さんにも申譯がない、想が叶へば是から何んな孝行でも致しますと大層御機嫌でございますよ』七『現金の奴があつたものだ』兎角して居る中に日が暮れました ○『ヘエ旦那、經師屋の茂助さんが參りました』七『ア、然うか、丁度宜つた是れへ呼びなさい……、茂助さん能くお出でだ、今お前の所へ使を出さうと思つてた所、能く來て呉た』茂『何う致しまして、相憎今日出仕事で私が留守にしたもんでございますから、取敢ず家の職人を遣しましたさうで、若い者でございますから滿足の事が出來なからうと思つて拜見に出ました、惡い所は私が直しまするから』七『然うかえ、ぢやア一つ繪卷物を見てお呉れ……此邊の所にあつた瑾だが』茂『ヘエ……、旦那是ぢやア御氣に入りでございませう』七『ア、氣に入つた良い仕事をするねえ』茂『然うお褒めに預かつちやア仕合せでございます』七『時に親方、アノ人は元兩國の巾着切ぢやアないか』茂『エーッ、マア嚙附く蝮は生涯嚙附くといつて、堅くなつた〳〵と思つたらまだやりやアがるか……旦那仰しやる通り彼奴は元兩國で巾着切をして居た吉松といふ奴でございます、何を考へましたかヒョックリ家へ參りまして、今まで惡い事をしましたが、何うしても堅氣にならなけりやア濟まない事があつて、フツ〳〵改心をしましたからどうか使つて呉れろと云ふのを私も一二度は斷りましたが、全たく改心したといふんでツイ仕事が宜いもんだから家へ置て使つて居りました、其ぢや御大家の當家へ出たんで又ムラ〳〵として何か惡い事を致しましたか』七『イヤ私の所で、

何も悪い事などをしやアしないが、其ぢやア今では全たく堅氣になつて居るね』茂『へエ實は私も何うかと思つて二三度釣つて見た事もありますが、怪しいこともなく、全たく改心をした樣子でございます、今日御宅でさへ悪い事をしなければやモウ大丈夫でございます』七『然うかえ、何うだね親方職人でも算盤は少しは出來るかね』茂『へエ算盤は上手なものでございます、私しはどうも此の勘定が疎いんで今まで困つて居りました所が、彼れが來てから、スツカリ算盤を彈いて書出しをして呉れるんで大きに助かります、手も能うございまして、此頃旦那の所へ書附を持て上りますのも彼れが書くのでございます』七『然うかえ、實は是々斯々で家の娘が想ひを懸けて……』と今までの話をすると茂助が、膝を叩いて 茂『へエー、其で旦那樣子が解りました、彼れが私しの所へ來て、二三日經つと御宮の小さいのを買つて來ました仕事をして居る後ろの棚へ載けて置て、朝起きると顏を洗つて其を拜んで御飯を食べ、仕事に掛る時に又お辭儀をして、晝飯の時も其の通り、表へ出ても歸つて來るとお辭義をする、何だと思つて私しがアノ野郎の居ない時に踏臺をして御宮の中を見ると、小菊の紙に包んだ二分金ばかり五兩二分ありました、何の眞似だと今まで思つて居りましたが、其ぢやア御嬢さんの下すつたのを、何所の御方か分らないので、其の金をお嬢さんのつもりで拜んで居たのでございませう』七『へエー然うかえ、それが本當の話なら中々見上げたもの、兎に角お前當人を連れて來て呉れまいか、猶種々話も聞ゝて見たいから……』茂『エー宜しうございます、直ぐに連れて參ります』急いで歸つて來た經師屋茂助 茂『吉松、





此の野郎旨くやりやアがつた、汝三萬兩の養子だ、默つて俺に千兩貸せ』吉『マア親方何うしたんで……』茂『是々斯々だ、サア一緒に行きな』吉『親方お嬢さんが其ほどまでに思つてお呉なさるといふは、眞正でございますか、其やア有難う存じます、だが親方、假令何でも大事の御店へ巾着切を一遍した人間を、堅くなつても養子にさしたら、人の口には戸が立てられず、彼所の家の養子は巾着切りだ、盗賊だと、噂をされちやア御華主樣へ耻を搔かせるやうなもの、縱令御嬢さんが御望みでも私にはお世話が出來ませんとお前さんが意見をなさるのが當然だ、洒落や串戯に頭を禿らかしたんぢやアありますめえ』茂『誰が洒落に頭を禿らかすものか、俺は禿さしたかアねえが自然に禿たんだ』吉『自然に禿たといやア年の故だ、宜い年をして能くも然んな事を引受けて來られたもんだ、馬鹿〳〵しい斷わつて來てお呉んなせえ』茂『成程、云はれて見りやア道理だ、ぢやア行て斷わつて來よう……』茂『へエ日那、早速ながら御挨拶に昇りました』七『アゝ親方御苦勞だつた、何うしたえ當人は……』茂『へエ、宅へ歸つて吉松に話しました處が是々斯々お斷わりをして呉れと申します、私の頭は洒落や串戯に禿らかしたんぢやなからふ、とコキおろされました、誠に相濟みませんが御緣のないものとお諦め下さるやう、貴所からお嬢さんへ宜しく御意見をなすつて下さいまし』七『成程、どうも豪いな、直ぐ飛上つて來るやうぢや、通常の人間だが斷はる所に價値がある、其れも星が合はないとか、年廻りが悪いとか、方角が悪いとかいつて斷わるなら世間並だけれども、其の斷りの口上が如何にも感心だ、併し親方お前は何歳におなり

だ、洒落や串戯に頭を禿らかした譯でもなからう」茂「オヤ同じやうな小言が出た、どうも恐入ります」七「假令先方で然ういつたにもしろ、自分も受合つて行たものを、成程道理だといつて直ぐに斷わりに來るのは親切が屆かなからう、一遍受合つて行つたもんだから兎に角當人を連て來ないといふ事はない筈だ」茂「大きに御道理樣、其ではモウ一度戻つて當人を引張て參りますから、どうか暫らくお待ち下さいまし」七「どうか然うしてお呉れ」茂助爺まご〳〵して居る。

## （第四席）　吉松加賀屋へ養子になる事、並に金五郎吉松を强請る事

經師屋の茂助さん、彼方へ行つたり此方へ行つたり、使ひ奴見たやうたと愚痴を溢すのも無理はない、再び歸つて强てといふので吉松も、然んなに親方を困らせるでもないからと同道をして加賀屋へ參りまして、七兵衞から段々賴むやうに話を致し、兎も角も當分客分として私の家に居て貰ひたい、其の中緣があつて娘の婿になるやうなら、此の家を讓るとも分家をするともしやうからといふので吉松も元々嫌でない話、先づ當分は客分として加賀屋の店へ引取られる事になりました、娘のおぬひも然うなると、假令枕は交さずとも戀人が家へ來て、此の上親父さん阿母さんの鑑識に叶へば自分が夫婦になれると思ふから喜こんで病氣も癒り、朝に晩に吉松の顏を見るのを樂しみにして居る、親父の七兵衞は吉松を帳場へ座らせて、帳合ひをさせて見れば、算盤も却々達者、手蹟も能く書き、職人とは思はれぬほど讀書が出來、他の奉公人にも物柔しく、三月ば





かり居る間に七兵衞夫婦も氣に入り、奉公人の評判も好く、どうして此の人が兩國で巾着切などをしたかと思ふやう、其の中に何日しか娘のおぬひと吉松は妙な仲になつて間もなく懷姙致しました、親は固より承知の事ゆゑ、斯うなればモウ安心と、公然夫婦にいたし、七兵衞は諸方御出入屋敷へ吉松を連れ歩いて　七「是は婿の吉松と申す者でございます、私は追々年を老りますに依て、是からは此の者を伺がはせますゆゑ何分宜しく願ひます」と披露を致し、其の後は吉松が始終お屋敷廻りをして居りますが誠に何れでもギアといふ產聲高く生れましたのが男の子、七夜に名を七松と命け、一家の喜こび一方ならず加賀屋夫婦は樂隱居の身分となつて、此の分で行けば身上は上るばかり、人は一旦邪道へ踏み迷ふ事があつても、之を救ひ出す者があれば、元の正道へ歸るといふが吉松とても其の通り、先づ良い婿と人に誇つても耻かしくはない、只此の上は孫の七松が無事成長をするやうにと其のみ祈つて居ります其中に昨日と過ぎ今日と經ち、月日に關守なく早や三年を送り、云ふまでもなく我が子の七松は三歲の春を迎へました、ア、有難い、之で先づ俺も疊の上で往生が出來る思へば女房のおぬひは俺の爲には大恩人だ、どうか此の先き蹴躓づきのないやうにしたいものと、今では全たく眞心に歸つた祐天吉松、何隔てなく働らいて居りますと、或る日の事モウ黃昏時、吉松は店の帳場に座つて　吉「小僧さんや、埃を立てないやうに、表を掃いて水を少し撒いてお呉れ、能く向ふを見て水を撒かないと人樣に掛けると往けないから……」彼是と差圖をして居る所へ　○「へ

エ御免なさいまし』吉『ア、何方かお出でになつた』と吉松がヒョイと見ると、腹掛に千草の股引、白足袋に麻裏草履、襟に『嬉野』と書いた半纏を着て、右の手に手紙を一本持つて居ります○『エー若旦那はお在になりますか』吉『ハイ吉松は私でございます』○『エー手前は伊豆倉横丁の嬉野の若い者でございます、御武家の御客様が御出でになつて、之を若旦那へ上て御返事を頂だいて來いといふ御申附けでございます、小僧さん憚り様、若旦那へ之を御上げなすつて……』吉『若い衆さん御苦勞様』と手紙を受取た吉松、見ると加賀屋若旦那様、裏を返すと何も書てない、ハテナと思つて封皮を脱つて中から出た手紙を見れば、吉松殿立花金五郎としてある、アヽ惡い奴から手紙を附られたどうせ碌な事ぢやアあるまいと、披いて見るとお前に別れて昨日今日と思ふ中に早や四年、武藏屋半次にも別れ、越後へ行つて暫らく遊んで歸つて來て聞けば、お前は本郷二丁目の加賀屋七兵衞といふ大家のお婿さんになつたといふ事、蔭ながら喜んで居る、就ては一寸遇ひたいから、どうか嬉野まで來て貰ひたい、來られなければ此方から出向いて帳場へ座つて話をしようと、奥歯に物の挾まつたやうな手紙の文言、アヽ惡い奴に來られた、と流石の吉松も胸にギックリ應へたがどうも仕方がないと思案をして、二朱の金を紙へ包んで、吉『オイ小僧や』小『ヘエ』吉『是を若い衆に上げな……』若『ヘエどうも若旦那様有難う存じます』吉『イエ、ホンの印ばかり、アノ御返事は上げませんが、只今直ぐ昇りますと、其の御武家様へ宜しく申上げてお呉んなさい』若『ア、左様でございますか、御免下さいまし』と嬉野の若い衆は歸つて終ふ　吉『番頭さん、此の帳場は此の儘にして置てお呉れ帳合が仕掛けてあるから……』番『宜しうございます』やがて奥へ參りまして舅七兵衞の前へ手を仕て　吉『エヽ本所の津輕様の御留守居が伊豆倉横丁の嬉野へお出でになつて居りまして、何か御

用があるからと只今お迎ひが參りましたゆゑ一寸行つて參ります」七「アヽ、其は御苦勞樣、お前が來てから御出入の御屋敷も殖え誠に喜んで居ます、如才はあるまいが御留守居の旦那方は一層能く氣を着けてお上げ申すやうに」吉「承知致しました」と別間へ來ると女房のおぬひが今七松に乳を呑まして居ります　吉「アノお前御出入屋敷の旦那樣が入しつたので一寸嬉野まで行て來るから……」ぬひ「然うでございますか、其ではお召物を……」吉「イヤ乳を放して七松が又泣くと往かないからお前立たないでも宜い」と自分で簞笥の抽斗から、唐綾の羽織を出して引掛け　吉「其では行つて來る」と吉松は表へ出ましたが、モウ此の時には日はトップリ暮れて終ひました、頓て嬉野へ參りますと店先の所に女中が三人ばかり居て　女「オヤ加賀屋の若旦那入つしやいまし」吉「ア、今御手紙を下すつた御武家樣は……」女「ハイ、お二階の奥の御座敷にお待ち受でございますどうぞ此方へ……」女中の案内に連れて二階へ上つて、奥の座敷へ來て見ると、床の間を後ろに立花金五郎座を占めて　金「ヤア是は加賀屋の忰……能う來て呉れた」吉松も女中の手前があるから　吉「是れは津輕樣御留守居樣で在つしやいますか、何日も御機嫌克う……」金「イヤお前も相變らず機嫌が克くて結構だ、一寸な又御買上げの事に付て少し相談があつて參つた、直ぐ店へ行かうとは思つたが、久々で一口飲りながら話すも宜らうと迎へをやつた」吉「ヘエ毎度御用仰せ附られ有難く存じ居ります」金「ア、女中、少々内々で加賀屋に話したい事があるから下へ行つて貰ひたい、用が相濟めば手を叩くから」女「畏まりました」御免遊ばせと、女中は下へ行く、立花金五





郎は立つて次の間を開けて見たが誰も居ない、吉松が一方の襖を開けて見ると、此方にも別に客は居ない二人は元の席へ座つて互ひに顔を見合せ　金「吉暫らくだつたなア」吉「何うした立花」金「イヤ例も例も達者で結構だ、就ちやア吉松、今日改めて金五郎が汝に頼みがあるが聞て呉れめえか」吉「何だ」金「汝が兩國の巾着切で、俺は吸取で散々惡事を働いて居たが、汝は考へる事があつて眞人間に成て終つた、其の後田町の武藏屋半次と二人で、夜盗掻割鏃切り樣々の惡事を重ねて居たが、どうも武藏屋半次の仕打に少し氣に入らねえ所

があつたから、アノ野郎に別れて其から北越地方を一二年歩いて些とばかりの金を持つて歸つて來た所が、彼方此方に盆の上の借りがあつたもんだから、ソレ立花が歸つて來た、乃公は幾ら貸しがある、俺は幾ら貸があると責立てられ、僅かばかり持て來た金は茶々風茶に失なつて終つた、斯んな間の惡い時に仕事をしても仕樣がないと、其から此方窃盗もしずに居るんだ、誠に濟まねえが段々聞くと汝は三萬兩の身上の加賀屋の娘に惚れられて、若旦那になつて三歳になる子供まで出來たと聞いた。何うだ此通り兩手を仕て賴むから五十兩ばかり金を貸して呉れ、來月の中旬には必と返すから五十兩貸して呉れ……吉默つてちやア分らねえ、武士たる者が兩手を仕て賴むんだ、貸して呉れ……汝默つてるのは不承知か、ちやア宜し明日の朝加賀屋の店へ座り込んで此の吉松といふ奴は兩國で巾着切をして居た男だと怒鳴るから然う思ひねえ……此の野郎未だ默つてやがる歸れ〳〵……サツサと歸れ』酒も飲まないで脂下りに煙草を喫みながら、吉松は立花の顏をヂツと見て居たが、ボーンと灰吹の音をさして煙管を投り出し 吉『喧ましいやい、靜かにしろ、餘まり嘴を尖がらかしやアがつて烏天狗見たやうな面をするない、當然よ、汝が云はねえでも俺は兩國の巾着切だつたに違へねえが、惡いと知つて眞人間になつたんだ、堅氣になつたんだ、昔の惡事が露顯をして、御用と食つても、傳馬町の御牢内に三月か四月入つて來りやア其で俺は白い身體になつて終ふ、煙くともやがて寐易き蚊遣哉、結局其方が俺は樂だ、俺が巾着切をしたことは、加賀屋の家で知らねえンちやアねえ、知つて養子にしたんだが、其から後は惡





事といふことをしたことがねえ、汝は何んだ、まだ盗賊をして居やがるだらう、立花金五郎はまだ盗賊が止まねえだらう、巾着切をやめて今ちやア堅氣になつて稼いで居る俺が惡いか、元武士でも今盗賊夜働きをしてゐる汝が惡いか、サア惡事の量目を秤器に掛て見ろ』ビックリ驚ろいて金五郎が 金『待て〳〵靜かに〳〵、大きな聲をするな』吉『大きな聲は地聲だ、汝が我鳴つたから俺も我鳴り返したんだ、物は酷く叩き附けりやア刎ツ返る、密と打附ければ返らねえ、俺は堅氣になつたが、汝はまだ盗賊が止まねえ……』金『マア靜かにしろ之は身共が惡かつた、此通り兩手を仕て謝まる、拙者が惡かつた』吉『止せッ、盗賊の癖に身共だの拙者だのと嫌な言葉を使ふな』金『誠に面目次第もない、如何にも俺が見損なつた、金五郎斯の通り兩手を仕て詫入る、吉どうか一つ俺が困るんだから五十兩恵んで貰ひたい、助けて貰ひたいものだが何うだ』吉松何にも言はず内懷へ手を入れて、二十五兩包みを二ツ出て金五郎の前へ 吉『ホーラきた』金『イヤどうも濟まねえなア』吉『汝も苦勞をして居る人間ぢやアねえか、初ツから助けて呉れ恵んて呉れと嘘にも柔しく出りやア、俺だつて荒え事をいやアしねえ、モウ汝が手紙を附た時に、五十兩や三十兩の金は遣る意で來たんだ、其を汝が大きな聲を出して脅したツて、驚ろくやうな俺ぢやアねえ、四年前に田町の武藏屋半次の所で何といつて別れた、此の俺が巾着切を止めて堅氣になつた上は、往來中で出遇しても口を利いて呉れるな、人間萬事塞翁が馬、明日が日橋の上で乞食をして居ても、一文だつて恵んで呉れるには及ばねえが、其の代り巨萬の身代の旦那になつても、元の兄弟

分など、いつて金の無心に來て呉れるなといふと、俺も男だ大丈夫だと武藏屋の半次は然ういつた、其の時お前は何といつた、俺は今こそ盗賊をして居るが生れは武家だ、決して無心なんぞにやア行かねえから安心しろと、立派に汝いつたぢやアねえか、流石田町の武藏屋半次は剛えもんだ、能くアノ人の事をお旦那と綽名をした、何して那んな人間が盗人になつたかと思ふ位、ツイ此間も俺が女房と忰と乳母と、番頭に丁稚を連れて淺草の觀世音に參詣して、三社前の所へ掛ると、バツタリ半次に出遇した、ア、惡い所で出遇つた、口を利かねえと約束しても、此方が乞食見たやうな姿をして居りやア知らねえ態をして居るも宜いが、富限になつてるだけに、澄して行つたら忌な了簡を起しやアしねえかと思つて、オヤ武藏屋さんでございますか、御機嫌克しうと俺の方から挨拶をすると、怪訝な顏をして、ハイ私は美濃屋と申す者で武藏屋とは申しませんが、お人違ひぢやアございませんか、と苦笑ひをして行つて終つた、ア、有難えな、斯んな情のある人が、どうして賊をするか、之を稱へて義賊とでもいふのか、イヤ義があつたら賊は出來めえが惜しい人間だと俺は其の時涙の出るほど嬉しく思つて歸つて來た 金『ウム』吉『三月ばかり經つと本郷二丁目の俺の家の前へ來て暫らく立つて內を覗いて居る、ア、此間三社前で遇つた時何の話もなく別れたが、事に依つたら今日座り込む氣で來たのかと、此方から口を利かうとしたら、首をヒヨイと向ふへ曲げて行つて終つたのは、加賀屋の家に辛抱して居るか居ねえか見極めに來たものと見える、其つきり俺の所へ手紙一本遣さねえ、其だのに汝の態は何だ、武士だなんぞと吐





しやアがつて、金の無心に來るたア何の態だ』金『イヤ然ういはれると實に俺は面目次第もねえ、どうか勘辨して呉れ』吉『ぢやア手を叩いてモウ一遍酒を飲んで、お飯を食つて別れよう』金『ウム』吉『女中が來たら、矢張其方は津輕の御留守居樣だから宜いか餘まり武士が丸座を搔いて、酒をガブ〳〵飲んぢやア外見ねえせ』金『宜し』ポン〳〵と手を叩くと女中がトン〳〵トン〳〵昇つて參りまして 女『ハイ御呼びでございますか』吉『モウ御話は濟んだから旦那樣へ御飯を上げて、私も御飯を頂だかう』女『承知致しました、其から御飯が濟む、金五郎が懷ろへ手を入れると 吉『イエ旦那樣、御勘定は私が致します』金『其は氣の毒だな、私の方から呼びにやつて……』吉『どう致しまして、姐さん御勘定は私の家へ取りに來てお呉れよ』女『宜しうございます』金『デハ出掛けよう』打揃つて下へ降り、嬉野と書いた手提灯をぶら下けて表へ出る、立花金五郎は右へ、祐天吉松は左へと別れましたが 吉『ア、金五郎といふ奴は惡い野郎だ、併しマア五十兩で濟んで宜かつた、アノ位にいつてやつたらモウ來る氣遣ひもあるまい』と家へ歸つて來て舅の前は體よく繕ろつて其の夜は相濟みましたが、四日ばかり經ちましてから、帳場に座つて居ると、嬉野から又迎ひ、若『先日の御武家樣が入しつて、若旦那に御出でを願ひます、御出でにならなければ、此方から昇る……と仰しやいますが、御返事を伺ひ度う存じます』吉松ギヨッとしたが 吉『ア、然ですか、今昇りますから、叮嚀に御待遇をして置てお呉れ』若『畏こまりました、デハ御待ち申します、左樣なら……』吉松は此間も口には强い事をいつたやうなものゝ、三萬兩の身上は大事だ、間違ひ

があつては舅姑に濟まない、且女房や子供が可愛いから、成べく事を荒立たせたくないと思ひまして、兩親に斷わり、又幾らかの金を持つて嬉野へ行つて、金五郎のいふがまゝに三十兩の金を取られる、モウ斯うなると三日に上げずノベツに參りまして、三月ばかりの中に二百兩の金を强請れました、或る日の夕刻、吉松は帳場の内で腕を組んで考へて居ると 若『ヘエ御免下さいまし、伊豆倉横丁の嬉野から參りました』吉『ホラ來やがつた……ア、若い衆、例の御武家さんか、今日は少し遲くなりますが伺ひますから、暫時御待ち下さいと斯ういつてお呉れ』若『ヘエ宜しうございます……』何うしようと又腕を組み直して考へて居りましたが、エー何うなるものか、アノ野郎殺して終へ、間違つたら俺も死にやア其で宜いんだと、固より度胸の宜い男でございますから、キッと覺悟をいたして頓て奥へ參り 吉『さて阿父さん、本所の津輕樣の二番目のお姫樣が今度愈よ赤坂の一萬石矢田の彈正樣御屋敷へ御嫁入りになります』七『成程』吉『其の御支度一式の御用を仰せ附けられました、之は莫大の利益があらうといふ見積りでございます』七『ウム成程』、吉『就ては今日津輕の御留守居樣其他重役の方と嬉野で御打合せを致して、其から又深川へ藝者買ひに行くとか、吉原へ遊びに行くなどゝいふお催ほしもあらうかと存じます、事に據ると今晩は歸れませんかも知れませんゆゑ、どうぞ御承知を願ひます』七『ア、宜いとも、私なども隨分交際交際で茶屋女郎屋で三日も四日も夜を明したことがある、お前が私の所へ來てモウ四年になるが今まで一夜も明けた事がないが、定めし辛いこともあるだらうと婆さんとも毎度話をして居ます、





是も家の爲だから氣遣ひなく行て來なさるが宜い』吉『左樣なら行て參ります』と疊へ手を仕て挨拶をいたし、其の座を立ちながら、ア、勿體ないやうな結構な舅さんに嘘をいつて出るといふは濟まないことだと、堰き來る涙を瞼に留めて、次の間に參りまして 吉『ぬひや、今阿父さん阿母さんに御話をしたが、今夜ヒョット御屋敷の御用の都合で歸らないかも知れないから……』ぬひ『行つて入つしやいまし、けれども貴所風時でございますから、お早く御用が濟みましたら、どうぞ歸つて來て下さい』吉『ア、宜いとも成たけ早く歸るつもりでは居るが、若しも又た御屋敷の旦那方の御交際を外す譯にも往かないから、事に依たら歸れないかと思つて、念の爲め御兩親へ御斷わりをして置たので、お前もどうか然う思つて居てお呉れ、七松は何うしたえ』ぬひ『坊は何だか風邪でも冒いたと見えまして少し熱がありますから寢かし附ましたよ』吉『ア、然うかえ、宜よい、宜よ密としてお置き、又泣かれると往けないから……』女房の取出す衣類と着換へまして、親の讓りの不動國行の合口を知れないやうに懷ろへ隱し、何にするのか三文判をクル〳〵と紙に包んで袂へ入れ、吉『其れぢやアおぬひ行て來るよ』ぬひ『ハイ行て入つしやいまし……ア、貴郎少し待て下さい』吉『何だえおぬひ』ぬひ『一寸坊の寢顔を見て行つて下さい、皆んなが此の子は阿母さん子ぢやアない、阿父さん一人の子だなどゝ云ひますが、貴郎が子供の時にも矢ッ張り斯んなに可愛い顔をして居ましたかねえ』吉『何を詰らない事をいふんだ人が出掛けようといふ所を引留めて……』笑ひながら熟々と我が子の寢顔を見て居りました祐天吉松心の内に、ア、是れが事に依た

ら永の別れになるかも知れぬと、思へば又女房の顔も見納めと、妻と子の面を見比べ、何となく憂ひに沈む様子　ぬひ『モシ貴郎何うかなさいましたが大層鬱いで……』吉『イヤ少し考へ事をしたもんだから……、デハ行て來るよ』と踏み出す途端に、夢にでもをびえましたかワッと泣き出す七松の泣聲　吉『ア、坊が目を覺ました、モウ送るには及ばない、早く乳を呑ましてやんなさい』と思ひ切つて立出る我家、後ろ髪を引かるゝ心地して漸々伊豆倉横丁の嬉し野の前　吉『ハイ今晩は』女『オヤ加賀屋の若旦那入つしやいまし、先刻から御武家の御客様が御待ち兼ねでございます、どうぞお二階へ……』と案内に連れて吉松が、昇る梯子は針の山、座敷へ通り立花金五郎の顔を見た時には閻魔大王の前へ進んだやうな心持ちでございます、女中はモウ馴れて居りますから、女『アノ御用がございましたら御呼び下さいまし』と下へ降りて了ふ　金『イヤ吉松能く來て呉れたな』吉『立花又金か』金『どうも面目ねえな、顔を見る度びに金々といふも極りが悪いが、モウ根切り葉切り是ッきり、どうしても來ねえから、誠に濟まねえが今夜二十兩貸して貰ひてえものだ』吉『ウム、俺も此間から種々考へたが、どうもチビ〳〵二十兩だ、三十兩だ、十五兩だといつて來られるのは、蒼蠅くつて仕様がねえから、寧つそ今夜一時に渡してやるが、何うだ三指で諦らめて呉れねえか』金『エー三百兩、其は木に餅の生つたやうな話だ』吉『就ちやア一通り俺のいふことを聞て呉れ』金『ア、聞くとも、何だ吉』吉『お前の方にも覺えがあるだらうが、丁度三月で二百兩だつたな、お前に渡した金は』金『然うだ〳〵二百兩だ』吉『俺が兩國で巾着切をして居た事を





承知の上で娘の可愛いばつかりに俺を養子にした、加賀屋七兵衛といふ人は考へて見りやア實に氣の毒千萬のものよ』金『ウム』吉『併し今ぢやア孫も出來、俺の辛抱も見屆けて、安心をして三萬兩の身代を任せて呉れては居る者の、若し間違つて喧嘩でもして俺が彼所を出る日になつたら、世間の者は何方へ肩を持つ、俺は元兩國の巾着切だ、彼奴が悪いんだと、縱令俺の方が宜つても、世間の人は先方の肩を持つだらう』金『其れは然うだ』吉『然うなつたら仕方がねえ、俺は經師屋の職人だから、矢張り元の職人で、半纏を着て働らかなけりやアならねえ』金『ウム』吉『其の時に若し金があつたら一軒家を持つて、經師屋の親方で、若い者と小僧の二人づゝも使つてりやア、其でも働らき者だ、加賀屋を出ても經師屋の親方でやつて居ると、斯ういつて賞めて呉れる、其に就けても金の用意をして置かなけりやアならねえから、お舅の金を融通して儲けた金が丁度五百兩、神田小柳町の金萬といふ質兩替屋へ預けてある』金『エー幾ら』吉『五百兩預けてある』金『ウム……』吉『所が此所で棚卸し勘定をされると、お前に遣つた二百兩の金が不足して居るから、檻樓を出さなけりやアならねえ』金『ウム』吉『仕方がねえから、今夜之から金萬へ行つて……ホラ宜いか』と袂へ手を入れて、紙へ包んで來た三文判を出して　吉『五百兩の金を受取る』吉『成程』吉『三百兩お前に遣つて、二百兩は帳場へ入れて置くんだ』金『成程』吉『三百兩遣る代りにやア三年の間上方へでも行つて歸らねえやうにして貰ひてえが何うだ』金『其は宜いとも』金『モウコレ舅だつて六十だ、七十まで生きるとしても之から十年辛抱すりやア宜いんだ舅が何うかなりやア三萬兩の

身代は俺の自由になるが、今の所は養子の悲しさ、息子とは云ひながら番頭同様金を自由にする譯に往かねえ』金『ウム』吉『俺の物になつて終やア何うにでもお前の法は立つて遣れる、然うなつたらお前は劍術が上手だから、盜人を止めちまつて、町道場を出して門人を取立てろ、金方に俺がなつて遣るが何うだ、其で往かなけりやア破かぶれだ、百も遣ねえから勝手にしろ』金『イヤ吉然んなにお前に苦勞を掛て濟なかつた、ちやア今夜直に金を渡して呉るか』吉『だから之から一緒に行けといふんだ』金『其つア有難え』吉『何しろモウ一つ飲て出掛よう』ボン〳〵と手を叩くと漸やく昇つて來た女中が女『どうも御待遠樣でございました、何だか今表がガヤ〳〵致しますから、火事でも初まつたのかと思つて、表へ出て見ましたら巾着切が追はれて來て捉まつたんでございます』二人は顏を見合せ　吉『ア、然うかえ、イヤ立花の旦那、世の中には心得違の奴があります ねえ』金『然うだなア』吉『夫は然うと姐さんモウ一本お熱いのを持て來て、其から御飯を頂だくから……』女『畏こまりました』食事も終つて勘定は例の通り帳面といふ事にして、手提灯を吉松が提げて嬉し野を出る　吉『オ、立花、明神坂が道普請で甚く道が惡いから、御茶の水の堤を行うぢやねえか』金『ウム然うしよう』と御茶の水の堤へ二人掛つて來たが、宵の中から雨模樣で星一つない眞の闇、吉松は物に躓づき踉蹌る態をして、提灯の火を消して終つた金『ア、吉、何うした』

吉『ナニ石を雪駄で踏だもんだから足が辷つて踉蹌る機みに提灯を消して終つた』金『命にして居た提灯消しちまつちやア、鼻を摘まれても分らねえ』吉『仕方がねえ徐々行かう……オ、立花』金





『エ、』吉『俺の指さす方を一寸見ねえ』金『何だ』吉『此の眞正面に赤え提灯が一つ見えるだらう、ソレ昇平橋の御目附の所だ、アノ側に見える提灯は何だらう珍らしい提灯ぢやアねえか』金『ドレ俺には見えねえよ』吉『見えるぢやねえか』金『見えねえよ』吉『見えなけりやア斯うして見ろ』油斷を見澄した吉松、懷ろへ手を入れ、不動國行の合口を引拔くが否突然突いて掛つた、立花金五郎ヒラリ體を轉したから、ヨロ〳〵と吉松前へのめつた　金『馬鹿野郎大方斯んな事だらうと思つた、千葉周作の免許取拔打切りの名人と人に知られた金五郎、汝等に切られて堪るものか、ヤイ吉松人を斬るなら斯うして斬れ』とサツと引拔く刀の光り、バツと後ろへ飛退く途端、今のやうに堤が高くなつて居ない其の頃のお茶の水、餘り退り過た爲に、ズルリ、タ、、、と轉び落ちたが途中木の根が草か手に觸れると確かり其れへ捉まつてブラリ下つた。

## （第五席）　吉松半次の家に赴く事、並田宮隼人の仲間になる事

崖の央に僅かに留つた吉松がヒヨイと見ると眞暗で譯が分らないがバツチリ鍔音がして　金『サア上れ、上れ吉松、汝等に殺される俺ぢやアねえ、五十や百の金が欲い譯ぢやアねえが、三萬兩の加賀屋の若旦那といはれ、アノ美い娘の亭主面をして汝が帳場に座つてるのが癪に障つて堪らねえのだ、此の儘汝が加賀屋の家へ歸つて居やア躍り込んで汝と嬶アの首を切つて、戀の意恨を晴らしてやる、若し又汝が是ツきり姿を隱せば、加賀屋の家に火をつけて、家内中撫切りにしてや

るぞ、何處へなりと隱れて居て加賀屋の燒けた噂を聞いたら俺がやつたと然う思へ、態ア見やがれ馬鹿野郎」と其儘雪駄の後鐵をちやらつかして何所ともなく行つて終ひました、お話變つて淺草田町二丁目武藏屋半次實は御旦那半次の家、夜も更けて彼是モウ九ツといふ頃、ドンドンと表を叩くものがある、身に兇狀を持つて居る身體だから油斷はない　半「何方でございます」吉「一寸どうかお開けなすつて下さいまし、武藏屋さんのお宅は此方でございましたな」吉「ヘエ糶呉服屋の武藏屋半次は私でございますが、何方でございます」吉「吉松でございますよ」半「ア、本鄕の加賀屋の吉松さんでございますか」吉「左樣でございます」半「ハテナ、野郎も元盜人だつたが、堅氣になつて今ぢやア加賀樣の出入町人、三萬兩の大家の若旦那、一度ならず二度までも往來中で遇つても、互ひに口を利かねえ間柄でありながら、何で俺の家へ來やがつたか」と獨言をして居たが　半「今開けますよ」吉「ヘエ、どうも遲く出ましてお氣の毒でございます」半「アノ聲は確かに吉松に違ひねえ……」唐紙をサラリと明け、昇り口の障子を明て駒下駄を履てガチン、ガラガラ〳〵と格子を開け、其から雨戸へ手を掛て　半「吉松さんでございますか」と猶念を入ると吉「ヘエ吉松でございます」ガラ〳〵　半「オ、吉能來た、サア入んねえ」吉「御免なさい」ピタリと戸を閉め、又格子を閉め、頓て上へ昇りました　吉「どうも御機嫌克しうございます」半「何だ、夜更小更に來て、今俺は寢ようと思つた所だ、お前が堅氣になつてから途中で遇つても俺の方ぢやアロを利かねえ、といふなアお前が口を利いて呉れるなといふ賴みだから、顏と顏を合しても知らね





え態をして居るのに、お前の方から尋ねて來るたア約束が違うぢやアねえか……ア、小糠三合持つたら婿養子に行くなといふ譬があるが、大方汝本鄕通りの商人衆の交際で吉原へでも行つて、養子の身の上で持合せ

もねえ所から、耻を掻くのが辛えといふので、俺の所へ借りに來たんだらう、借りに來たら貸してもやらうが、堅氣の商人になつて盜人の俺から金を借りたら筋が違うだらうぞ』吉『イヤ兄哥、然んな浮いた話で來たんぢやアねえ、實は來られた義理ぢやアねえが、面を被つてお前の所へ來たのは少し話があるんだ、改めて兄哥頼みがある』半『ウム、モット前へ出ろ……オヤ汝手を二三ケ所摩剝いて、衣類も破けて泥だらけになつてるが何うしたんだ、喧嘩でもしたのか』吉『ナニ兄哥斯ういふ譯だ、立花金五郎の奴が三月ばかり跡に、本郷伊豆倉横丁の嬉野といふ料理屋から俺の所へ手紙を附けたんだ』半『ウーム悪い野郎だなア、汝が堅氣になつた後は彼奴と俺と二人で相變らず悪事を働らいて居たが、どうも面白くねえことがあるから、どうか彼奴に別れてえと思つてる中に、俺の留守に有金から呉服物を引攫つて夫ッきり行方知れずになつたのが、今から丁度三年前だ、忌々しくつてならねえから、野郎見附次第酷い目に遇はして呉れようと探ねて居るが、ツイゾ姿も見せやがらねえで、汝の所へ行て然んな事をしやがるとは太え畜生だ、其からマア何うなつた』吉『俺に金を貸せといひ、嫌だといやア加賀屋の養子吉松は巾着切だ累解脱の文身のある祐天吉松といふ者だと、俺の家へ來て怒鳴りさうな鹽梅、固より舅や女房は巾着切を承知で婿にしたんでも、店の者や世間へ知れたら、舅姑や女房子に耻を掻せるやうなものだから口には強い事をいつてもマア〳〵と我慢をして三月ばかりに二百兩の金を取られた』半『ウム』吉『今夜又嬉野から迎ひを遣したから、思案を定めて是々いつて甘口で、野郎をお茶の水へ引張り出し、





殺しちまはうと思つたンだ』半『ア、止せば宜いのに、奴は千葉周作の免許取り、汝の痩腕ぢやア敵はねえ』吉『尋常ぢやア及ばねえと意ふから、油斷をさして突然に切つて掛つたが、身體を轉されて、此の野郎味をやるな、汝等に切られるやうな俺ぢやアねえ、人を切るなら斯うして切れといやがつて突然引拔かれた拔かれちやア迚も駄目だから、後へ飛退つたのが、餘り退り過ぎたもんだから、堤がら下へ陷落た』武藏屋半次思はずアッと手を出して 半『エー危ねえなア、那から落ちたら命がなからうぢやアねえか』吉『其から後は是々斯々、前の次第を殘らず語り、何としたら宜らうと、思案に餘つて兄弟分の縁は切れても武藏屋さん、頼むは此方只一人、面目ねえが其ゆゑ俺はやつて來たんだ、元の好誼に何とか巧え工夫があるならどうか力を貸して貰ひてえ』半『アッハッハ然うか、イヤ吉松、汝なんざアまだ人が好いなア、那の金五郎といふ奴は恐ろしい女女しい了簡だ、本郷の加賀屋の娘は美い女だ、ア、美い女だと、汝が彼家の養子になつた其の當時、まだ俺の家に彼奴か居た時分、常々然ういつて居たからな、野郎嫉妬て〳〵仕樣がねえんだ、併し之やア吉、何だせ汝直に家へ歸らねえ方が宜せ』吉『ウム俺は歸らねえでも宜が今夜の樣子ぢやア舅を初め皆打ち殺して加賀屋を燒だらう』半『馬鹿ア其は聞かせといふもんだ、汝には恨みがあつても、女房子や奉公人や舅にやア恨みも何もねえぢやアねえか汝さへ居なけりやア宜いんだ』吉『ウム』半『明日斯ういふ手紙を一本書け』吉『どう書く』半『私は斯ういふ身體になりました』と、金五郎のことを書いて、女房子の縁を切りますから、どうか娘さんに立派な御亭主を持たし

て下さい、私に決して苦情はございませんといふ手紙を書け、俺が持つてつて加賀屋の家へ其の手紙を投り込んで來てやる、ナニ汝さへ居なけりやア立花だつて切込んだり何ぞする氣遣えねえ』吉『成程兄哥然うだな、然んなものを書くのは譯はねえが今度俺が捉まつたら何うしよう、金五郎に出遇つたら……』半『サア其所だ、捉まりやア汝殺られて了ふ』吉『其つア困る』半『其の時の用心に何うだ劍術を習つたら』吉『俺のやうなものが劍術を習つても出來るか知ら』半『人間其の氣を出しやア往かねえ、恁んな眞似をして居る癖に、堅つ苦しい事をいふやうだが、俺だつて靑表紙の一冊位讀んだことがあるから少しやア物の理窟が解る、君子は旦に道を聞て夕に死すとも可なりといふ事がある、出來るだらうかの、出來ねえのと云つてやらねえのは往かねえ、俺の劍術の師匠が常州茨城郡水戸中納言樣の御指南番二百五十石取り四の宮隼人といふ、此の先生の俺は內弟子で免許の腕前にまでなつた所、少し惡い事があつて先生に勘當され夫から江戸へ出て來たが、文通だけは免されて居るから、時々御機嫌伺ひをすれば、先方からも御意見の御手紙を下さる、手紙を附けるから其處に行つて、何でも隱し立をしねえで、私は斯ういふ身體だ、金五郎に出遇した時の用心に劍術を敎へて下さいといへば、必と親切に敎へて下さるから、行て事を打明けて話せ』吉『どうも半次兄哥誠に有難え、ちやア何分賴む』半『ア、宜いとも、何しろ今夜はモウ更けたから寢るとしよう』其の夜は寢る、翌朝食事を濟ませると吉松が差圖通り手紙を書くのを、脂下りに煙草を喫みながら見て居たお旦那半次が、半『ア、吉、能い手だなア汝は』吉『兄哥之で宜い





か』半『宜し〳〵、之を持てつて俺が投り込んで來て遣る、夫婦の緣は切つても忰の七松は汝の胤に違えねえ、是が後に加賀屋の旦那になるんだから、何も悔む所はねえ、然んなら吉家を賴むぞ』手紙を持て半次は表へ出る、留守番を吉松がして居ると稍二刻ばかり經つて半次が歸つて來ました　吉『兄哥御苦勞だつた』半『ウム番頭を呼出して奧へ內々だが御養子からの御手紙でございますといつて渡して直ぐ歸つて來た、今時分嘸驚ろいてるだらう』吉『イヤ大きに有難う』半『善は急げだ、明日の朝立つことにしねえ、俺れが手紙を書いて置くから……、其やア然うと其の破れた着物ぢやア仕樣がねえ、俺とお前たア行丈が違うから間に合うまい、今夜何處かへ行て着物をスツカリ借りて來てやるから明日立て』吉『種々と兄哥心配を掛けて濟まねえ、併し何所へ行つて借りて來て呉れる』半『俺の借りる所は、何所だか分らねえ、成たけ油斷をして居る所で借りて來る』變な借り方があるもので、其の晩半次は出て行たと思ふと着物を一ツ背負借りて來た、其の中から吉松の身體に合ひさうな着物を選り出し、合羽から脚絆脛掛道中差し、草鞋まで萬事揃へ金も十兩、呉れたから、吉松は厚く禮を述べ、手紙を貰つて半次に別れ、江戸を立つて二十七里中二晩泊りで三日目に水戸へ着し、四ノ宮隼人先生と尋ねると誠に評判の好い御方、御城內へ來て見ると立派な道場、出入町人の風體ゆゑ玄關へは掛りません、中の口へ參りまして、笠を脫り合羽を脫ぎ、裾を下して　○『お願ひ申しますお願ひ申します』○『ドーレ』神戸要助と云ふ若黨が出て來て　要『アヽ是は何れから參られた』吉『ヘエ私は江戸表淺草田町二丁目武藏屋半次といふ

糶呉服屋から、手紙を貰つて參りました吉松と申す者でございます、先生御在宅なればどうか宜しく御取次を願ひます』要助といふ若黨、手紙を受取つて吉松の顏と見比べて居りましたが、其の儘奥へ參りまして　要『先生、申上げます、江戸表淺草田町二丁目の武藏屋半次から手紙を附けて、吉松と申す男が參りましてございます』隼『ア、左樣か』手紙を披いて暫らく見て居りましたが、ビリ〳〵と裂いて火の中へ燻べて終ひました　隼『其の者を此方へ呼べ』要『ハイ……、ア、先生へ申上げた所が、此方へ昇れと仰しやる』吉『有難う存じます』草鞋を脱り足を洗ひまして、案内に連れて奥へ通り、次の間へ兩手を仕へまして　吉『エ、、先生に在らつしやいますか、初めまして御目通りを致します、私は吉松と申して、武藏屋半次から承まはつて參りました、半次も宜しく申ましてございます、同人書面にて御承知でございませうが、何分どうか劍術を御敎へ下さるやう願ひ度う存じます』隼『ウム然うか、貴樣は元兩國の巾着切で、脊中に累解脱の文身のある祐天吉松といふ者ぢやな』吉『ヘエ、惡い事は出來ないものでございます、能く御存じで……』隼『イヤ左樣に驚ろく事はない、手紙の内に委細認ためてあつた』吉『ア、左樣でございますか』つまらない事を半次め書やしがつた、併し何事も隱すなといつたのは此所だなと思ひました　隼『併し能く其方は堅氣になつた、手紙の趣きでは立花金五郎といふ奴の爲に劍術の稽古をしたいといふ望みの由、面倒は見て遣はすに依て充分に稽古をしろ』吉『ヘエ有難う存じます』隼『仲間に使つて傍はら劍術を敎へてやるから、先づ今日は緩くりと寢て、一日二日疲れを休めながら城下でも遊





んで歩いて土地の樣子を見て置け、其からウンと敎へてやる』吉『有難うございます』隼『金がある と、身體を突いて修業が出來んから、其方十兩小遣ひを持つて居るさうだが、其の金は此方預かつて置て遣はす』吉『有難う存じます、金は是だけ持て居りますからどうかソックリ先生お預かんなすつて……』ソコで吉松は城下へ行つて何屋の隣が何屋、何屋の向ふに何屋があるといふことをスッカリ見て歩き、愈よ四日目から紺看板に梵天帶、眞鎖鐺の木刀といふ仲間扮裝になりまして、高麗鼠のやうにクル〳〵働らく、固より巾着切でもした位の男だに依つて却々目端が利いて居りますから、先生も大層氣に入つて吉松〳〵といつて目を掛け、劍術を敎へると此奴持つて生れた器用な質で、ズン〳〵上達を致しますから、末賴母しく思つて居る、併し以前惡事をした者ゆゑ、人の油斷を見て又惡いことでもしはしないかと、折々釣つて見る、人を釣るといふは罪な話のやうではありますが、どうか眞人間に仕立てたいと思へばこそ、所が吉松一紙半錢たりとも怪しいことがない、其の中にハヤ五月も經ちましたが、給金を渡しても　吉『先生どうぞお頂かり置き下さい』といつて小遣ひ一つ使はない、段々聞いて見ると隣り近所の仲間小者などゝ飲みに行き、何日も吉松が勘定を拂ふといふ話どうも不思議でなりませんから、四の宮先生が或る時隼『コレ吉松』吉『ヘエ旦那御用でございます』隼『貴樣は給金を遣はしても皆な此方へ預けて終うか、前町の飲食店などへ隣近所の仲間小者と飲みに參り、何日も勘定は其方がするといふ話しだ、其の金は何所から入る、貴樣又惡い事を致しはせんか』吉『どう致しまして、決して然んな事

はございません」隼「然らば何うして金を持つて居る」吉「恐入りますが先生どうか一寸此方へ來て御覽下さいまし」何心なく先生立つて吉松の跡へ附て來て　隼「吉松是は貴樣の部屋ではないか」吉「ヘエ御覽なすつて下さいまし」見ると緣の離れた額、軸のない繪卷物、傍らに糊箱、刷毛のやうなものがありますから　隼「何だ是は經師屋のやうだな」吉「ヘエ私は元經師屋の職人でございます、夜の亥刻にお暇を頂きまして、亥刻から子刻丑刻と、此の間に寢る目を寢ずに仕事を致し、丑刻から寢まして明卯刻に起きて働らきます、先生の御用を潰して自分の仕事をしては濟みませんから、寢る間に內職をして其の賃錢を小遣ひに使つて居ります」隼「ウーム然うか、其では暮酉刻になつたら仕事を初めて子刻までやれ、人間の身體は使ふに度のあるものだから、二日や三日なら格別、長い間寢る眼を寢ずに働くといふ事が出來るものではない、併し貴樣は仕事が上手か下手か」吉「自分でいつちやア可笑うございますが、マア仲間の中でも指折りの方でございました」隼「ウム、シテ見ると上手と見える、仕事が能く出來るなら賴まれた所から成るたけ高く取れ、而して身共の親類と身共の分は安くやれ」吉「ヘ、旦那も却々旨い事を御存じで……ナニお宅に御用があれば只で致します」隼「マア然うして身體を大事に使へ、其の間に劍術を十分に致さんではならんから」吉「有難う存じます」と茲に五年の間修業をして吉松は立派な腕になつた　隼「扨吉松、其方も辛抱の甲斐あつてモウ一人前勝れた腕前になつた」吉「有難う存じます、旦那の御丹精に預かりまして何とも御禮の申しやうがございません」隼「ソコで貴樣にも話をして置くが、江戸小石

川の御舘に齋藤權太夫といふ一刀流の御指南番があつて、之が御家中の評判が餘り好くない、就て御前から此方に江戸表へ參れといふ御沙汰があつたが、齋藤へ對し遠慮致して居た所再度の御沙汰、最早之を背く譯には往かない、御受けを致して近日江戸へ出府する事になつた』吉『ヘエー左樣でございますか』隼『一ッ家中に二人の御指南番のあるは互に威勢爭ひなどがあつて面白からん事に思ふが、上の仰せで見れば已を得ない』吉『御尤ともでございます』隼『就ては一家殘らず引纏めて參るつもりだが、江戸へ立つた後で四の宮の仲間吉松に何程貸しがあつたなど、城下の町人や朋友に云はれるやうな事があつてはならんから、給金の外に長く奉公をした褒美として十兩遣はすから、是を以て總ての始末を致して來なさい』吉『先生、有難う存じますが、其御心配は御無用に願ひます、人に貸しはあるとも借は一文もございません』隼『隱すなよ』吉『何で隱しなど致しませう』隼『左樣か』とはいつたが猶念の爲め若黨の神戸要助に內々諸方を尋ねさせると、成程吉松に借りがあるといふ者はあるが、貸があるといふ者は一人もない、扨は全たく眞人間になつたと四の宮先生も喜こんで、愈よ五七日經つて水戸を立つて江戸表小石川の御屋形へ到着いたし、五日間御休息の上、隼人先生殿樣に御目通りも相濟み、以來御手を取つて御指南いたす事に相成ました、所が四の宮隼人の評判の好い事、御家中競つて入門いたすといふやうな譯で、奧樣お娘御は勿論吉松も若黨要助も喜こんで居ります、茲に一月ばかり別段のお話もなく或る日、吉『さて先生』隼『何だ吉松』吉『淺草田町二丁目の武藏屋半次から手紙を貰つて先生の所へ上りまして、永らく御丹精を受け、是までにして頂だきました、所が江戸へ出て參つてまだ顏出しを致しません、萬一途中でゝも遇ひました時、目と鼻の間に居ながら顏一つ出さねえ、不實の奴だといはれるも恥かしうございますから、今日一日御暇を頂だいて禮に行つて來ようと思ひますが如何でございませう』隼『ア、、其れは能く氣が着いた、物には謝する禮あり、拙者方へ參る手蔓を得た、其の禮は陳べなければならん、行て參れ〳〵、併し半次といふ奴は人間は却々出來て居るが何ういふ譯か隱れたる所に此方の氣に入らん事がある、其れは貴樣も知つて居るだらう』吉『ヘエ』隼『其ゆゑ永く居てはならん、惡い事には染り易いから、長く話して居る中に魔道に陷るやうな事があつてはならんからな』吉『承知致ました』隼『なれども彼は元我が門人、勘當はしたやうな者の、憎いとは思はん、只々困つた者だと此の方が嘆いて居たといふて呉れ』吉『畏こまりまして ございます、左樣なら行つて參ります』と部屋へ退つて吉松が、ア、良い旦那だなア、行つたらシンミリ意見をしてやらう、イヤ那んな利口者だから、何も彼も承知して居るんだ、人間の癖といふ者は仕方がねえものと考へながら、祐天吉松は新らしい法被に新らしい梵天帶、眞鍮錨の磨き立つた木刀を打込み、風呂敷の小さいのを懷ろへ入れて表へ出たが、之から本郷へ出るのが順だが、俺も本郷二丁目に暫らく居た、那れは加賀屋の養子だ、若旦那の吉松だ、加賀屋の家を出てアノ見そぼらしい樣は何事だと必らず人に云はれる、俺は宜いがお鼻さんや女房子に耻を搔かせるのが氣の毒だから頰被りをして行かうと、濃淺黃の手拭で鼻の尖先へ頰被りをして、壹岐殿

坂を上れば直ぐ本郷一丁目だが、忰は幾つになつたか、三ツの時に別れて四ッ五ッ六ッ七ッ八ッ九ッ、オ、〳〵モウ九ッになつた、どんなお父さんが後へ來たか、未練ぢやアねえがおぬひも無事で居るか、又舅や姑も變りはないか、外ながら樣子を見て行きたい、と本郷の大通りへ來て

吉『ア、世の中は三日見ぬ間の櫻哉、大分樣子が變つたナ、オヤ〳〵此んな所へ下駄屋が出來たア、立派の呉服屋が出來た、大層好い町になつた、ア、電車が通るなんだ大塚行き……』そんな事は云ひやアしません……ア、此所が加賀屋の家だと來て見ると無い、ハテナ……ア、嘉福寺の門前に空地があつた、加賀樣の御屋敷へ近いから越したいと云つて居たから彼方へ越したか知らん、滅多の所でも聞れないがと、氣が着て見ると兩側とも皆な家が新らしくなつて居る。

（第六席）　吉松加賀屋の災難を知る事、並に向島花見の事

吉松家並の殘らず新しくなつたのを見て　吉『ア、是やア火事があつたと見える、此の樣子ぢやア大分大きな火事があつたんだな……、向ふに煙草屋がある、半次は煙草が好きだから土産に百匁の煙草を一玉買ひながら聞て見よう、斯んな煙草屋は俺の居た時分にはなかつたから知れる氣遣ひなからう、ア、常陸屋か、俺は今水戸樣の御屋敷に奉公して居るやうなものだ、常陸屋といふ家で錢を使へば同じ事でも心持ちが宜い』と、其の前へ來て見ると、今の煙草屋とは店の構へが違つて居りまして、空ッ風を凌ぐ爲に障子が閉つて居る其の障子に、國府長崎雲井秦野大鹿など





と名所の地名が書て下に極彩色の煙草の葉で達摩が煙草を喫んでる繪があつて、其の煙の先から、世の中の人と煙草のよしあしは煙となつて後にこそ知れと歌が書てある、御亭主が店で頻りに煙草刻をして居ります、所を突然ガラリ障子を明けたから粉が鼻の穴へ飛込んで、吉『ハックション……ア、驚ろいた、モシ煙草を一ぷくお呉んなさい』亭『ハイお出でなさい、お掛けなさいまし』吉『百匁玉を遣ひ物にしたいんで……』亭『ヘエ〳〵是は何うでございます』一ぷくといふのは以前一玉買うに一寸一ぷく見本に吸つて見たもので』亭『是は旦那如何で……』吉『ア、是は宜うがすね』亭『ヘエ極上物でございます』吉『ぢやア包んでお呉んなさい、幾らになりますね煙斗や何か入れて……』亭『ヘエ、煙斗や水引はお負け申します』吉『然うですかえ、此所へ置きますよ』亭『ヘエ有難うございます』吉松は懷ろから風呂敷を出して煙草を包みながら　吉『エー旦那一寸物をお尋ね申ますが、私は暫らく跡に此の土地に居たことがありますが、丁度此の前の所に、加賀樣の御出入町人で加賀屋さんといふのが元ありましたね』亭『ア、加賀屋さんでございますかお聞なさるやうぢやア貴所御存じないと見えますね』吉『何だか些とも知りません』吉『アノ加賀屋から火事が出て此の界隈三丁全燒になつたんで……』中腰になつて居た吉松が、思はず煙草の包みを投り出して吉『エーッ』と腰を下して　吉『其やア怪火でしたか疎忽火でしたかえ』亭『私やア其の時分外神田に居たんで深い事を知らなかつた所が昨今此方へ來て聞きましたには、何でも今を距る九年前、加賀屋の家へ元兩國の巾着切で、祐天吉松とかいふ者が養子になつたんでさうで……』吉

『へエー』亭『所が其の巾着切をして居た時分の兄弟分で、エー何とかいつたッけの婆さん……』奥『ソレ此間聞いた加賀屋の婿の吉松といふ人の朋友たつた盗賊は』婆『立花金五郎さ』亭『ア、然う〳〵。立花金五郎といふ奴が伊豆倉横丁の嬉野から迎ひを遣しちやア連續に金の無心をするので、吉松が其の金五郎といふ者を殺して終はうと、欺くらかしてお茶の水の堤へ引張り出して殺さうとした所が、立花といふ奴が恐ろしく強いもんだから祐天吉松の斬つて掛るのを身體を轉して其の腕を逆に取つて肩に擔いでバッと投つたら中目黒まで祐天が飛んでッちまつたさうで……』吉松は驚ついた、虚ばかり吐きやアがると思つた亭『其やアマア嘘でございますがね』吉『誰が眞實にするものか……』亭『何しろ大變に吉松といふ人が酷い目に遇つて、鼻や姑に面目ないといふんで、女房子の縁を切つたといふ手紙を遣して吉松は其まゝ行衞知れずになつて終つたんださうで……』吉『ヘエ成程』亭『其が丁度今から五年前の事で、其の後立花といふ奴が、吉松がまだ居ると思つて斬込んで、老人夫婦に番頭二人、其の外仲働きの女中と飯焚に小僧を二人都合九人殺して其の上火を放けて燒いちまつだンですね』吉『ヘエ酷い事をしやがるなア、其で娘のおぬひさんと七松といふ子供があつた那やア何うなりましたらう』亭『其れが丁度其の晩本所表町といふ所に親類があつて其所へ泊りに行つて居て兩人だけ殺されずに濟んだといふのは運が好かつたので、夜が明けると知らせがあつたので駕籠に乘つて歸つて來て、親の死骸へ取附いて泣崩をれて居るのを、漸やく近所の人や何かゞ集まつて慰さ





めたさうでございますが、後々で聞て私共まで氣の毒に思つて涙が溢れました』吉『ヘエ、其から二人は何うなりましたらう』亭『何しろ其の始末で、手ふり編笠箸一本持たない乞食同樣、行方知れずになつて終つた、所が一年ばかり經つて此の土地に御油講といふ成田樣の講中があつて、其の講中の人が成田へ參詣に行た歸り掛けに船橋と小金ケ原の間の舞原といふ所に母子の者が乞食になつて居たのを見て、御油講の人達がア、加賀屋の娘さんだ孫さんだ、可愛想だといつて御金を遣つたら泣て喜こんださうでございます』吉『然うでございますか、種々どうも有難う存じました』亭『お前さんは大層能く御尋ねだが御緣合でもあんなさいますか』吉『イエ元加賀屋へ出入をして世話になつた者でございます、左樣なら大きにお喧ましうございました』亭『ア、モシ〳〵貴郎煙草をお忘れなすつては往ません』吉『ア、然うだつたッけねえ……』吉松は煙草の包を持つて表へ出たが、茫然としてモウ田町の武藏屋へ行くのが厭になつて水戸樣の御屋敷へ歸つて參り、主人の前へ兩手を仕て呈『ヘエ只今行つて參りました』隼『大層早かつたな吉松』吉『ヘエ田町まで參りませんで、途中で是々斯々いふ譯でございます』と煙草屋の爺の話を殘らず致しました』隼『ウーム憎んでも飽足らん奴は立花金五郎だ、千葉周作の弟子であつたといふなら周作に遇つて此方が話をしてやらう、猶貴樣も一層劍術の修業を致せ』と四ノ宮先生に勵まされて吉松は愈よ一心になつて劍術の稼古をして居ります中に、遂に免許といふ腕前になりました、或る一日四ノ宮先生隼『吉松や一寸此所へ參れ』吉『ヘエ何か御用でございますか』隼『昨日今日と思ふ中、江戸表へ

參つてからモウ跨ぎ三年經つたな』吉『左樣でございます』隼『所がまだ、奥も嬢も向島の花見を致さん』吉『左樣でございますな』隼『今日は三月十五日、花見日和とでも申すのであらう、埃一つ立たん好い天氣だ、若黨の神戸要助を附けて花見に遣はさうと存じたが、どうも要助は土地不案内の者で萬事に不都合であるから、貴樣一つ案内をして能く見物をさしてやつて貰ひたい』吉『ヘエ宜しうございます、私はモウ向島邊りは巣といつても宜い位能く存じて居ります』隼『然うぢやらう、貴樣は元巾着切であつたから、盛り場、殊に花の場所などは詳しく知つて居るだらう』吉『どうも恐入ます、先生どうかモウ、昔の事は御免を被り度う存じます』隼『アハ、、、、大きに之は惡るかつたかナ、併し時々お浚ひをしてやらんと元を忘れると往かんから……』吉『然んな事のお浚ひは、餘まり有難くございません』隼『イヤ冗談は扨置て、早速支度をしなさい、奥も嬢もモウ宜いのだ』吉『左樣でございますか、ナニ私は支度といつた所で法被を着替れば宜いのでございます』と例の新らしい法被に梵天帶、眞鍮錨の木刀を差し、草履を履いて 吉『ヘエ宜しうございます』と玄關先きへ立つた奥さんにお嬢さん、續いて要助吉松の四人、水戸樣の御門を出ました、要『吉松、どの方面へ向つて參るのだな』要『要助さん默つてねえ俺が案内をするから……併し要助さん』要『何だ』吉『斯うして後から御供をしながら見ると奥樣は盛りこそ少し過ぎたが天性ての御容貌美しで在つしやるなア』要『然うだ』吉『又御嬢さんも阿母さんに御似なすつて其上御年が若いから一層お美くしいなア、田舍侍の御新造なんてえ者は無闇に赤え物ばかり附けて、眞白に白粉





ばかり塗て外見ねえもんだが、家の奥樣お嬢樣は淡泊として居て、御供をして居る此方等も共に好い心持ちやアねえか』要『大きに然うだ』吉『どうだい往來の人が奥さんや嬢さんを振返つて見る所へもつて來て此の吉松が男振りが好つて粹で氣が利いて居て、法被を着たツてピタリ身體に合つてる、アノ御供さんは好い御供さんだと皆な噂さをして居る』要『ウム』吉『其に引替てアノ若黨は何だ』要『オヤ此ン畜生怪しなことをいふな』吉『どうも色が眞黑けえで、頭が縮れッ毛で大佛樣見たやうだ、小倉の袴の襞のヨレ〳〵になつたのを附けて雪駄の裏金が片ッ方取れた奴を穿いてるのは隨分可笑な樣子だと笑つてらア、雪駄といふ奴はチャラリ〳〵と音のするものだが、片ッ方金がねえから、チャラリグチャリ、チャラリグチャリてやがつて、埃がパッ〳〵立つてお前の後から行やアしねえ、おまけに面が醜いんだらう、鼻の高い人も低い人も隨分あるけれども、お前のは高くもなけりやア低くもねえ引込んでるんだ、オ、臭えと鼻を摘む人はあるが、お前のはオ、臭えと蓋をする大變な鼻があるもんだなア、之から淺草の觀音樣へ行つて、御堂の屋根を横から見ると、屋根に蹲踞で何か檀上げて居る人がある、其れに能く似て居るせ』要『巫山戯ちやアイけねえ、人を鬼と間違へてやがる……』奥『コレお前達は何だね、ベラ〳〵喋舌りながら供をする者があるものではない、妾達が外見ないから靜かにしなさい』要『ヘエ私しは靜かにして居りますが吉松が是々いひます』奥『其れは成程吉松のいふのが道理、見れば見るほど要助お前は醜い顔だ』要『是はどうも恐入りました』吉『ソレ見ねえ、誰の目も違ひはねえ』要『モウ宜い加減にしろ、

時に吉松是れは何といふ坂だ』吉『小石川のお屋形に居やがつて、本郷の壹岐殿坂を知らねえ奴があるか、是は壹岐殿坂といふ坂だ』要『ア、然うか』吉『ソレ上切つた、是が本郷の通りだ此所が二丁目左の方へ行くんだ』要『ア、賑やかだな』吉『是れが名代の本郷三丁目のかねやすだ』要『成程』吉『本郷もかねやすまでが江戸の内、之からが江戸で、此方から向ふへ行くと淋しい、眞直ぐに行くと駒込だ、此の右側が百萬石の加賀様の御屋敷だ』要『成程』吉『サア是から眞直ぐに下ると湯島切通し、天神様の社だ』要『ハア、お宮が二階家だな、綺麗な女が立つてる』要『巫山戯ちやア往けない、那やア御留守居茶屋だ、料理屋の二階だよ』要『ア、然うか、天神様の二階に女が居るなア訝しいと思つた』ダラ〳〵坂を下りて來たが　要『ア、是が御宮が小せえなア』吉『ナニ此のお宮は戸隱大明神で、此所の地主だ、天神様は地借なんだが、誰も戸隱山とは云はねえ、皆な湯島の天神山といふなア、詰り庇を貸して母屋を取られたといふンだらう』要『然うかなア俺が若黨で貴様が仲間だが貴様の方が幅を利かして俺の方が小さくなつて居る、マアこんなものかな』吉『プツ巫山戯なさんナ、オツト池の端へ出ねえで仲町を眞直ぐに行くんだ』要『然うか』吉『是が名代の錦丹圓』要『ア、話に聞いたが娘が池へ身を投げて蛇になつたといふぢやアねえか』吉『然ういふ噂もある、ソレ上野へ出た』要『ア、此所も賑やかだな』吉『ウム併し今日は向島へお出でのつもりで出たんだから、上野は又改めて來るとして、直ぐに向島へ行かう……此所が廣德寺前だ』要『ハア左甚五郎の門があると聞いたが是が廣德寺か、大層眞赤な門だな』吉『ナニ是やア下谷神社、稲荷様





だ、廣德寺は向ふ側だアな』要『成程然うか……、オヤ少さな橋がある』吉『菊屋橋といふんだ』要『ア、是やア大きな御堂だ、繪で見たには觀音様は赤い御堂だつたが赤くないな』吉『觀音様ぢやアねえ門跡様だ』要『ア、門跡様か』吉『ソラ之を眞直ぐに行くと觀音様だ、……他見をしなさんな』要『良い匂いがする』吉『奴鰻といふんだ』要『食ひてえなア』吉『外見ねえ止せ、サア……雷門風雷門ともいふんだ、仲見世から仁王門突當りの大きいのが御堂だ一寸八分の觀音様で十八間四面の御堂に住んでゐる、豪いもんだらう、エー奥様御嬢様參詣なすつたら向島へ御案内を致しませう』と之から向島の花を見て、歸りは竹屋の渡船を渡つて八百善で御飯を頂だかうといふつもりで、吉松が猶様々と面白可笑く話をしながら向島へ案内をいたしました、向島へ來て見ると花の盛り、人出も多く堤側に掛茶屋が列んで居る何處か明いた所はないかと見ながら來ると一軒葭簀で三間ばかりに間を仕切つて爺さん婆さんの出して居る茶店、其の隅の方に御武家が三人御酒を飲んで居る、其の眞中が明いて居るから　吉『御免なさいよ』婆『ハイ入つしやいまし、お爺さんお客様だよ』爺『お出でなさいまし、どうぞ御昇り下さい』吉『奥様お嬢様御昇んなさいまし、私共は是に腰を掛けて居ります、オイ爺さん、其方へ櫻餅に鰻か何か燒いて成たけ細かく裂て上げておくれ、茹玉子があるやうだね、其れも上げて、此方へも燒鰻で御酒を一本宜いかえ』爺『ヘエ畏こまりました』四宮の奥様とお嬢様はお茶を上つて櫻を見ながら暫らく休んで居りましたが　奥『アノ嬢やお前大分衣類がはだけて來たやうだから一寸立つてお直しなさい』娘『ハイ』といつてお嬢

さんが立上つて衣紋を繕らうとした時に、毛氈の敷いてある下に薄縁の縁と縁と重なつて居た其の敷合せの重なつた上へヒョイと乘つた爲めに跟蹌と跟ける途端に、隣から葭簀を破つて大小の鐺が二三本出て居た其の一本の鞘をバチリ踏割つたので驚ろいてアレといつて其れへ兩手を仕て座つて終つた 奥『マア嬢や、お前飛だ疎匆をおしだねえ』といつてる處へ三人の侍、抨取刀でバラ〳〵と其れへ飛出して來て ○『コレヤイ、女は月に七日の汚れのある身體、武士の魂たるべき刀の鞘を踏み割られては勘辨ならん、娘是れへ出ろ、打切るから……』奥さんが前へ進んで 奥『是は〳〵娘が飛んだ御無禮を致し、何とも申し譯がございません併し全たく疎匆に違ひがございませんゆゑ、どうか御勘辨を願はしう存じます、之にて御詫申上げお聞入れ

ございませんければ御屋敷を承まはり、明日改めて御詫に罷り出でますに依つて、今日の所は御免しのほどを願ひまする』○『默れ、只詫言を申せば其で宜といふ譯のものではない、武士たる者が刀の鞘を踏割られ、一旦切り捨てると云ひし上からは、何うあつても切らずに勘辨は罷成らん、耳くじらでも立つて見ろ、貴樣から先きに打切つて終うぞ』奥『左樣ならば斯くまで御詫を致しても、勘辨は出來んと仰しやいますか、嬢や 據ろない潔よく切られて終ひなさい、母が骨は拾つて上げる、其方も御屋形樣の御指南番の娘、臆びれたことして笑はれぬよう覺悟をしなさい』娘『ハイ、母さまキッと覺悟いたしてございます、サア貴所方斬り損はぬやう御見事に願ひます』容を正して兩手を膝に仕き、首さし延ばした覺悟の體、是は何うだと右の武士、威張つて見れば斬らぬ譯にも往かない、只さへ人出の花の堤、茶店の前は黑山のやう、吉松は此の樣子を見て居たが 吉『オイ要助さん〳〵、お前慈姑の團子なんぞ食つてる場合ぢやアねえ、御主人樣の一大事だ何とか口を利かなくつちやア往けねえ』要『マア宜いや、奥樣やお嬢樣は女丈夫だ、打捨つといつてもどうかならア』吉『どうかなるつて澄して居ちやア、若黨の役目が立たねえぢやアねえか、マア兎も角も慈姑を下へ置け』要『是が眞正の、くわいもの見たさだ』吉『平常に似合はず、嫌に沈着て居るなア』要『何家の奥さんやお嬢さんは劍術も體術も確乎御出來なさるんだから、イザとなりやア駄武士の三人位何でもない、今に見ねえ振上げた刀をもぎ取つて川の中に叩ッ込まれるから、要助さまが出るまでの事はねえ、マア吉松打捨つて置け』吉『成程其れも然うだな』要『併

し吉松、汝は四宮先生の免許取りだが道場だけの稽古で、まだ眞劍の立合ひをした事があるめえ、偶には眞劍の中へ飛込んで見なけやりア眞正の腕前は判らねえ、一ッアノ中へ飛込んで三人の武士を叩き据て見ねえ、些たア生物も對手にしなけりやア往かねえ、手に餘れば俺が腕を貸してやる、お喋舌は貴樣が達者だらうが、要助の方が腕は達者だせ』吉『其は要助さん眞正だ、大きに有難う、其ぢやア生を三人片附けやうか』要『ア、偶にやア生を對手にしろ』吉『承知した、奥さん嬢さんマア〳〵お退きなさい、ヘエ御武家さま』○『何だ奴』吉『ヘエ、甚だ相濟みませんが、奥さんと嬢さんが手を仕て御詫をして居るんでございますから、どうぞ御勘辨を願ひます』○『默れ、主人等が兩手を仕て詫言をしても勘辨ならんといふものを、供の奴が百萬言詫をしようと駄目のことだ、強て妨たげを致せば貴樣から先きへ打切つて終ふぞ』吉『へ、、、、、』○『何を笑ふ』吉『柔順しく詫言をして居る中に御勘辨をなさらねえと爲になりませんせ、私が怒ると穩やかで濟みませんよ、今の中が勘辨のしどころだ』○『何だ此奴、不埒の奴だ』吉『不埒の奴は汝の方だ』○『汝とは何だ』吉『何をいやアがる、駄武士め』○『駄武士とは何だ奴』吉『奴とは何だ』○『名前が分らんから奴といつたが何うした』吉『名前が分らねえから駄武士といつたが何うした』○『此奴怪しからん奴だ、仲間小奴の分際で武士へ對して惡口雜言』吉『武士だらうが、町人だらうか、物の理窟に違ひはなからう』○『何だ……』吉『何がッたつて態く聞きねえ、奥さんとお嬢さんのお在なさる座敷は此方で借りてる座敷だ、其の葭簀から其方の座敷が汝達の座敷だ、ナゼ其の葭簀から大小の鐺





を此方へ出して置やアがつた、早くいやア人の座敷内へ大小を亂入させたんだ、其れを踏んでも仔細はねえ、此方から葭簀を破つて其方へ轉げ込んで、大小を踏み破つたら何とでもしろ、汝の方から勝手に出して置やアがつて生意氣の事をいふな、グヅ〳〵しやがつて踏倒されるない、掛るなら三人一緒に來い、サア生を三人前持つて來い』○『此奴軍鷄だと心得て居る、其の儀ならば』と一人が切つて掛かつた、其の手を取つて逆に廻はし、肩に擔ついで投げ飛ばすと打ち所が惡かつたと見えて、ウーンといふと目を廻した、己れと又一人、柄へ手を掛ける中に、腰に差したる眞鍮鐺の木刀を拔くより早く利腕を打つたる事ゆゑ、大刀ボロリ取落しダヂ〳〵と後ろ蹌めく所を足を上げて脾腹を蹴たからウーンと是も目を廻した、殘つた一人が逃ようとする奴を、ピシリ脊髓の邊りを打つたから、ウーン目を廻して終つた 吉『態ア見やがれ……』要助が 要『イヤ吉松却々豪いものだな』奥さんとお嬢さんは驚ろく樣子もなく〳〵ニコ〳〵笑ひながら 奥『吉松大分上達をしましたね』娘『母樣面白うございましたねえ』奥『ホンに御芝居を見るやうで、好い心持ち……、オ、大分物を毀した樣子、お爺さん、此處へ茶代を置きます』と一兩の金を出して與へましたのは流石物馴れた奥樣、往來の者に見送られて其の儘竹屋の渡舟で隅田川を越して山谷の八百善で御飯を食べて小石川御屋形へ歸りましたが、奥樣はじめ皆口を拭つて居りましたから、三日ばかりは四ノ宮先生も御存じなかつた、所が四日目のこと奥さん嬢さん要助吉松を呼んでズラリ前へ列べ 隼『奥、嬢』奥『ハイ』隼『お前達は此間 向島へ花見に參つた節何たる事を致したのだ、切

るなれば立派に切れなど、女だてらに大言を拂つたさうだ、ナゼ飽迄云譯をいたさん』奥『恐入りましてございます』隼『要助』要『ヘエ』隼『御家中の人が其場に見て居つて、私に敎へて呉れたが嬢が疎匆をしたら貴樣が其れへ出て主に成代つて詫をするが當然、吉松がお前何とか口を利けといふを、慈姑の團子を食ひながら、偶には生を對手にやつて見ろなど、却つて吉松を煽動て面倒な事を仕出來すといふは不埒の奴だ』要『ヘエどうも恐入りました』隼『吉松、貴樣も身分を顧りみず、腕立を致すといふことがあるか』吉『ヘエ相濟みません』隼『以來は必と嗜なめ、殊に貴樣は何の爲に劍術柔術を習つたのだ、舅の敵立花金五郎のある事を忘れたか』吉『ヘエ恐入ります』隼『彼の武士はな、御當家一刀流の指南番齋藤權太夫の弟、讃岐高松の家來齋藤佐十郎並に門弟二人、拙者が出府致した爲に權太夫が家中の評判惡きに依て奥や嬢の花見に出でしを幸ひ、巧んで事を起したのだ、以來もある事能く心を注なければならんぞ』と小言をいはれて一同面目なげに先生の前を退りました。

（第七席）　吉松轟熊太郎と試合の事、並に吉松齋藤權太夫を殺す事

其の後吉松は猶怠たらず劍術の稽古を致し、益々腕前上達をしました、或る時先生御稽古休みで奥で御茶を入て召上つて被在る所へ神戸要助が　要『先生御客樣でございます』隼『ア、何方か御入來になつたな』要『下谷廣德寺の日桂樣が御入來になりました』隼『ア、廣德寺の和尚が見えられた





か、此方へお通し申せ』案内に連れて日桂和尚　隼『是は〳〵暫らく御目に掛らんであつた、今日は能うこそ……』日『イヤ御無沙汰を致した』隼『丁度三月ばかり御見えがなかつたな、其節圍碁の打掛があつたが、お出でを幸ひ今日は勝負を決しやうではござらんか』日『愚僧も其の心得にて參つた』隼『先づ今日は此方速かに止めを刺すから御覺悟をなさい』日『イヤ先生、愚僧速かに引導をお渡し申す』坊さんと武藝者だけに片方は止めを刺す、片方は引導を渡すといふ、早速碁盤を出し、之から碁を圍まうとする所へ要『先生御客樣でございます』隼『ア、何方が御見えになつた』要『本所相生町二丁目の法安坊周和先生がお入來になりました』之は本因坊のお弟子で六段の碁打でございます、隼『ア、法安坊か、丁度宜い所へ見えた此方へ御案内をしろ』奥へ通つた周和　周『是は是は廣德寺樣能い所で御目に掛りました』日『イヤ我々が圍碁を碁打に見て居られては大きに極りが惡い』周『どう致して頓と差支へござらん、充分に御圍みなさるやう私は碁打でございますから、御素人より少々は上手か知らんが、其れは當然、四ノ宮先生が劍術が御下手だつたら可笑いが碁はお樂しみお下手なればとて差支へござらん、和尚が佛學に疎いと云はれたら御恥辱であらうが、碁のお拙いのは當然でございます』日『成る程御道理千萬、然からば御笑ひ下さるな』周『私之にて拜見いたす』其から四ノ宮先生と日桂和尚が黑白を爭ふことになる、所へ又　要『申上げます』隼『何だ』要『八丁堀淺蜊河岸の鏡新明知流桃井春藏先生が御弟子轟熊太郎さんと御同道で御入來になりました』隼『此方へお通し申せ』春『イヤ是は皆さんお揃ひだな』隼『能う見えられた丁度

今日は稽古休みで徒然の所へ斯く大勢お集まり下すつて誠に喜こばしい』要『エー申上げます』隼『何だ』要『御家老武田伊賀樣御入來になりました』前名跡部彦九郎、當時武田伊賀守といふ水戸家の御家老、後に武田耕雲齋といつて水戸の天狗黨の巨魁となり、加賀國篠原といふ所で討死を致しました名代の人だ　隼『オ、御家老か』といふと、隼人先生玄關まで出迎ひ、座敷へ御案内をする　伊『ア、各々其儘〳〵、今日は非番であるから遊びに參つたが、斯く大勢集まつたのを幸ひ何うだ四ノ宮碁は止めて酒にしては』隼『承知致しました』伊『併し廣德寺和尚の前で嗜な碁を止めさして我々が酒を飲では濟んな』月『イヤ愚僧は甘昧で御茶を頂いて居ります』伊『ア、然うか』要『先生へ申上げます』隼『又御客か、誰だ』要『御出入の講釋師が參りました』隼『然んな者は追拂へ』宜い面の皮で、講釋師門前拂ひを食つた、其から御酒が初まる、締切つて居ては陰氣で往かんと、障子を明けると紺看板に紀伊國仕立の梵天帯、眞鍮鐺の木刀を腰に打込み、高箒を持つて祐天吉松が片肌脱いで累解脱の文身を出して、サッサッと庭を掃いて居る　隼『コレ〳〵吉松御目障りだ彼方へ行け』吉『ヘエ』肌を入れて手桶を提げ高箒を擔いで行かうとすると御家老の武田樣が之を見て　伊『ア、コレ〳〵暫らく待て〳〵』吉『ヘエ何か御用でございますか』と沓脱石へ兩手を仕へました　伊『貴樣は當家の吉松といふ仲間か』吉『左樣でございます』伊『脊中は累解脱の文身のある、元兩國の巾着切であつたさうだな』吉『ヘエどうも恐入ります』伊『イヤ〳〵恥るに及ばん、過ちを知つて改めれば罪は消えるもの、能く改心をして眞人間になつた、何か承まはれば立花金五





郎なる者を舅の敵と狙ひ居る由ぢやが、まだ出會はんか』吉『ヘエ殘念ながら未だ出會ひません』伊『ウム、何れに潜み居るか、憎つくい奴だ、其方は四ノ宮から稽古を受け、天晴の腕前ださうだな』吉『ヘエ先生の御丹誠に依りまして少々ばかり覺えましてございます』伊『桃井、是れに控へて居る轟熊太郎はお前が自慢の弟子だな』春『左樣』伊『吉松は四ノ宮隼人が自慢の弟子、自慢と自慢で立合はして見たいが何うぢやな』春『一應熊太郎に申聞けました上御挨拶を致します……熊太郎何うだな』御家老武田樣の御意、嫌といふ譯にも往かない　熊『委細承知致しました』伊『四ノ宮、吉松は宜らうな』隼『宜しうございます、吉松　轟　氏の御對手をいたせ』吉『畏こまりました』双方御受けをしたが轟熊太郎考へた、どうも滿らないな、武士たる者が仲間に勝つても當前だ、負ければ恥辱だ、勝つて當然、負れば恥辱といふは隨分割の惡い立會だと思ふに引換へ吉松は喜こんだ武士に仲間が負けたつて當然、勝てば大層な譽れだと思ふから、度胸が据つて居る　伊『扨吉松、下郎は物に張合がなくては往かんものである、其方が負けたらば金子を五兩遣はす』吉『ヘエ負けまして御褒美を頂けますか』伊『ウム、負れば五兩、勝てば十兩遣る』吉『ヘエー』吉松喜こんだ、勝つても負けても金が貰へる、どうせ汗を掻くなら勝つて十兩貰ひたいといふのは腹の内、吉『有難う存じます』伊『熊太郎』熊『ハイ』伊『其方は武士である、武士たるべき者は試合に勝つて金錢などを得るといふ、卑屈の事は好まんであらうな』熊太郎心中に武士だつて浪人だつて金は欲しい、けれどもイエお金が欲うございますとは云はれない　熊『左樣でございます』伊『然らば勝ても

負けても貴樣には一文も取らせん』猶可けない　熊『宜しうございます』伊『併し物には張合といふものがなければ往かんもの、持ち古したが勝たば此の印籠を遣はす』熊『有難う存じます』庭へ立出で、二人ながら手拭取つて鉢卷なし、襷十字に綾なして左右に別れ、素面素籠手、韜を取つて互に睨み合つて居ります、一同の者此の勝負如何あらんと見て居る中に、エイヤッと双方氣合と共に立上りポン〳〵ポン〳〵と十二三合打合つたかと思ふと、御面ッと一聲、吉松が打下ろすを心得たりと轟熊太郎ハッシと受けたが吉松に力があるから籠手が下つたので腦天を打たれ　熊『參つた』吉松韜を其れへ投捨て　吉『どうも　轟さん有難う存じました、仲間の私に勝を讓つて下さる貴所の思召、實に澁い御方だ』苦い顏をして轟熊太郎、何をいやがる、澁いも甘いもあるものか、俺だつて印籠は欲いや……、云ひもしないが滿らない事をしたと思つた、武田伊賀守腹を抱へてお笑ひになり　伊『イヤ吉松見事〳〵、サア約束の通り十兩、此の五兩は別に褒美として遣はす、熊太郎其方が勝てば當然だが負けたから面白かつた、是は座興といふもの、遺趣遺恨を含んではならんぞ、之を遣はすと、熊太郎に印籠を下すつた、兩人とも厚く御禮を申し、其から猶御酒を飲りながら武藝の話やら四方八方の話に興を盡して其の日は皆御歸りになりましたが、サア其から武田伊賀樣が大層吉松を可愛がり、四ノ宮から武田樣御屋敷への御使は吉松でなければならないやう、行く度毎に吉松を御庭前へ廻して、御自身御會ひになつては樣々の物を下さいます、今日しも四ノ宮隼人、吉松を呼んで　隼『吉松、御家老武田樣へ此の狀箱を持つて參れ』吉『承





知致しました』隼『御返事を頂だいて來るのだぞ』吉『ヘエ』隼『吉松、餘り御贔屓を頂だいて居ればといつて、御家老へ對し無禮を致してはならんぞ』吉『委細畏こまりました、ヘエ行つて參ります』と用箱を持つて部屋へ下り、帶締め直して吉松は四ノ宮の屋敷を出ると、何か知らんが踵の所をペロリ嘗めたからア、心持ちが惡いと、ヒョイと吉松振返つて見ると白といふ大きな犬　吉『ムウ犬か、仲間小奴の伴でもするのは犬より外にありやアしねえ、御家老の武田樣へ行くんだ道が遠いから歸つて來るのを待つて居ろ』いふと犬は耳を垂らし、前足の上へ首を載せて地上へ

ゴロリ寢ちまつたから　吉『ア、杖の下へ廻る犬は打てねえと能く譬にもいふが、可愛いものだ』と其儘二足三足歩き出すと又起上つて尾行て來る　吉『オヤ又附て來やがつた今夜も御菜を汝に取られて終ふのか、宜し〳〵其ぢやア俺と一緒に來い』言葉が分る譯でもないが人の擧動で分ると見えまして、犬は喜こんで吉松の跡から附いて來る御案内の通り小石川の水戸樣の御屋敷をグルリと廻れは一里もあります、其の隅から隅へ行くのでございますから、御屋敷内とは云ひながら可なりの所頓て武田樣の御屋敷へ來ると伊賀守は相憎御不在で、御歸りになつたら御渡し申し御返事は此方から持參いたすから歸つたら宜しからうといふので　吉『左樣ならば宜しく御披露を願ひます』と吉松は取次の者へ御手紙を預けて歸つて參りました侍小路、ポン〳〵御面、御籠手、御胴參つたなどゝいふ聲、振返つて見ると一刀流御指南番齋藤權太夫の道場だ、ア、御指南番の齋藤權太夫手前の腕の出來ねえのを知ねえで俺の家の先生の事を大分惡くいつてやがる、態ア見やがれ、面の憎い畜生だ、マア宜い、行かう』と獨り言をいひながら吉松が丁度齋藤の門の前まで來ると、門の親柱の所に三毛猫の可なり大きいのが香箱を作つて日向ぼつこをして居たが吉松に附いて來た白犬を見るとフーッと其の猫が四足を突張つて脊中を富士の山のやうに高くして銀鎌に等しい爪を尖らして、突然飛ひ附いて白の顏を引搔きました猫の爪で引搔かれては犬だつて堪らない、ダラ〳〵血が出た、サア白が怒つてワン〳〵ワン〳〵といふと其の三毛猫の脊中をガリ〳〵と嚙つてバッ〳〵と二ッ三ッ振つたと思ふと、遙か向ふの方へ振り飛ばして終つた、猫は





ギャッといつたぎり死んでしまひました、之が吉松の足下の騷ぎ　吉『エーマア驚いた〳〵、畜生同士の喧嘩でも、イザとなりやア斯んなもの何ぼ畜生だつて突然飛附やアがつて、顏を引搔いて血を出しやアがつた、眞正に亂暴な猫ぢやアねえか、可哀想に白の顏へ斯んなに疵を附やがつたから犬だつて怒つて嚙み殺すなア當然だ、此奴ア大方齋藤の飼猫だらう、何とかも釣方、宜い心持ちだ、白勝つた〳〵』といひながら其儘吉松は屋敷へ歸つて來ました　吉『ヘエ行て參りました、御家老樣は御不在でございますから、御手紙は御取次へお預け申して參りました、御返事は那方から御遣はしになります』といつて犬と猫の喧嘩の事などはいはず、自分の部屋へ下つて何か用を達して居ります、暫らくすると一寸用事があるから參れといふので、吉松何心なく主人の前へ出まして兩手を仕へ　吉『ヘエ先生何か御用でございますか』隼『吉松、貴樣は何をした』吉『エー何も致しませんが……』隼『イヤ、しない事はあるまい、齋藤權太夫の所から斯ういふ手紙が來た一寸見ろ』吉『ヘエー何の手紙でございます』隼『見れば分る』吉『テございますか……』取上げて吉松が右の手紙を見て居りました　吉『其ぢやア旦那何でございますか、彼所の家の三毛猫へ私が白犬をけしかけて喧嘩をして居る所を後ろから、私が眞鍮鐺の木刀で猫の脊中を叩き擲つて殺した、猫の敵だから吉松を此方屋敷へ遣せ、さもなければ御當家へ掛合に來るといふんでございますね』隼『然うだ如何に畜生なればとて、他人の家に飼つてある者を殺すといふ法はない、吉松馬鹿も大體にしたら宜らう』吉『ヘエ、此の手紙の樣子ぢやア猫の敵だから吉松を遣せ、首にして終

ふとある、篦棒めえ、畜生と人間と一つにされて堪るものか、先生實は是々斯々でございます丁度魚屋の島八といふ者が通り掛つて見て居ましたから、犬が怒つて嚙殺したか、私が木刀で打ち殺したかは、島八に聞きやア分ります、大方齋藤といふ奴が事を好んで、此んな事を云つて遣したに違ひございません』隼『ウム左樣か、眞逆に貴樣が然んな事はしなからうと思つた、兎に角吉松行つて言ひ開きを立つて來い』吉『ヘエ宜しうございます』隼『併し吉松、强て此方から事を好んではならんぞ幾度か謝まつて勘辨をいたさず、刀を拔いて斬て掛るやうな事があつたら、其時には吉松覺悟をいたせ、詫びるだけは詫びろ』吉『ヘエ宜しうございます、決して事を好みは致しません』隼『萬ケ一の事あれば此方骨を拾つて遣はす』吉『其のお言葉が百萬の味方、有難う存じます』と吉松は部屋へ入つて支度を仕直し亂れた髪を搔き上げまして、四の宮の屋敷を出で、齋藤權太夫の屋敷、中の口へ掛りました 吉『願ひます〳〵』○『ドーレ』若黨が出て參りまして ○『是は四の宮の奴吉松だな』○『ヘエ吉松でございます』○『先生が大層お怒りだ、庭前へ參れ』吉『ヘエ承知致しました』○『廻れ』吉『初めて參つたお屋敷、何方が庭前やら勝手が分りません、御案內を願ひます』○『此方へ參れ』乃で庭前へ廻り飛石傳ひに踏脫ぎの處へ來ると緣側に褥が敷いて莨盆が出て居ります、吉松は暫らく沓脫石の前へ座つて居ると、年頃四十三四、色飽まで黑く、身の丈五尺七八寸、藤の丸の紋の附いた羽織を着て、丹後平の袴を穿き、鞘は若狹の曙塗の小刀を前半に手挾み、左の手へ大刀を提げてヅカ〳〵と立出でました權太夫、緣側の褥へピタリ着座致しま

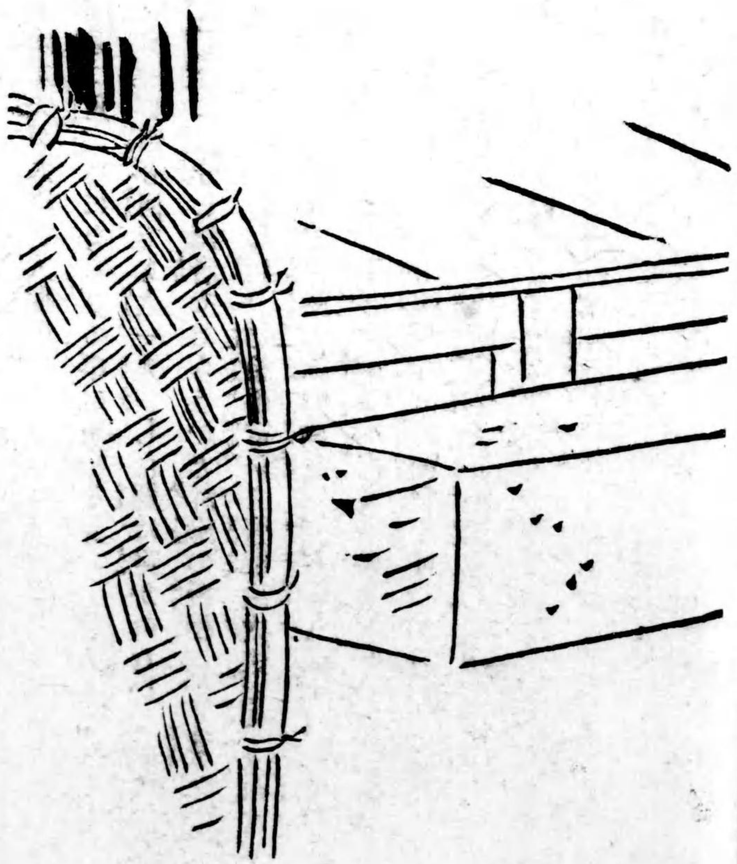




した、若黨が ○『是に居りますのが奴吉松でございます』權『ア、左樣か』ノベの煙管を取上げ、パクリ〳〵煙草を喫みながら吉松の樣子を見て居りましたが、頓て煙管を鐵扇構へに持ちまして權『コレ奴頭を上げろ』吉『ハイ』權『ナゼ其方は當家の飼猫を撲ち殺した』吉『ヘエ申上げます、私は今日主人の用で使ひに參りますと、主人の飼犬が手前の後へ尾て參りました、丁度御當家の御門前まで來ると、突然此方の猫が嵐を吹いて犬に飛附いて顏を引搔きました、嘘だと思召すなら犬を引張つて來て御覽に入れますが、血だらけになつて居ります、幾ら犬でも癇に障りましたものと見えて、猫の脊中を嚙み碎いて振り殺して終つたのでございます、私は只畜生ながら威勢の良いものだと、ビツクリして見て居りましたので、何で犬や猫の喧嘩の中へ飛込んで木刀などを拔きませう、尤も證據のない事はお聞き入れになりますまいが廻り魚屋の島八といふ者が側で見て居りましたから、島八をお喚び下すつてお問ひ合せになれば委しく分らうかと存じます』權『默れ、犬が嚙み碎いた疵か、木刀で撲ち殺した疵か分らんやうな拙者ではない、確かに木刀で撲殺したに相違ない』吉『其では猫の屍骸を拜見致しませう』權『疾に取捨てゝ終つた』吉『左樣でございますか、證據がなくては言譯を立てんとしても立ちません、只此の上は七重の膝を八重に折つて御詫を致しますゆゑ、どうか御勘辨を願ひます』權『汝のやうな奴が、詫言をしたればとて勘辨は出來んワ强て勘辨をして貰ひたくば、汝の主人の四ノ宮が是れへ參つて低頭平身をいたせば免してやるに依て隼人を連れて參れ』吉『御串戲仰しやつちやア往けません、犬や猫の間違ひから御主

人へ大地へ座つて詫びて下さい、然うすれば私の命が助かりますと、然んな事が何の面さげていはれませう、其やア駄目でございます』權『エー云ふな』といふと、突然片膝立つて持つたるノべの煙管をバッと投げた、アッと吉松が身を轉さうとしたが、轉し損ねて額へ煙管の雁首が當つたから堪らない、眉間が裂けてダラ〳〵と頰を傳はつて胸の邊りへ流れる血汐……吉『アイタッ……、モシ先生イヤサ齋藤の旦那、猫や犬の喧嘩に就て人間の眉間へ斯んな疵をお附けなすつたな……イヤ是も仕方がねえ、長え者には卷かれろだ、モウ斯うしたら大體御勘辨が出來ませうな』權『汝の如き奴の頭の一つや二つ打ち毀したればとて何の差支もあるまい』吉『エーッ勝手にしやアがれ、汝のやうな

木像に話をしたッて駄目のこつた、何うでもしろ』權『ナニ、武士たる者を木像とは何だと』飛び下り、齋藤權太夫スラリ引拔いた大刀、エイッと吉松の眞甲目蒐けて斬り附けた、バッと吉松身體を轉したからヨロ〳〵と前へのめつて出る奴を馬鹿野郎つといふと共に眞鍮鐺の木刀を引拔きざま打下ろした奴が見事腦天へ中つたから腦骨碎けて眼球が飛出し、キャッといふと齋藤權太夫其へ打倒れた、モウ一つ、モウ一つと、以上三ッ打たれて到頭縛切れて終つた吉『フ、、汝が惡いからよ』とセ、ラ笑つて吉松は悠々と表へ出たが、屋敷へ歸つては却つて御主人が迷惑をするだらうと、其の足で直ぐに御家老武田伊賀樣へ行て、



斯々いふ譯でございまして、齋藤權太夫を殺しましたと訴たへ出でました、折柄伊賀樣は御出先から御歸りになつて委細御聞き遊ばし、惡くは計らはんに依て、兎も角も當番目附藤浦源兵衞方へ訴へ出ろといふ御差圖早速藤浦殿へ出て是々と申立てる所へ程なく伊賀樣が御出でになつて、改めて逐一御調べの上、大體齋藤權太夫が犬猫を人間の命と共にするとは怪からん奴だ、其も全たく吉松が猫を撲殺したるなれば兎に角、さにあらざる事は現場を見たる證人もあつて見れば疑ふ所もない、正しく權太夫が惡い、併し假令何でも人一人殺した罪は免かれない、相當の御法に行なはなければならん、何ういふ工合に處分した者であらうかと評議の折柄、四ノ宮隼人初め、御家中の人々より、吉松の命乞ひを嘆願に及びました、勿論平常から齋藤權太夫は憎まれて居るから、却つて殺されたのを心地好く思ふ位、ソコで齋藤の家は斷絶、幸ひ妻子もなく、權太夫の死骸は取捨て、吉松は武田伊賀守の御計らひにて、下谷廣德寺へ參り一時出家いたせといふので吉松の命は助かり、一旦四ノ宮隼人が引取り 隼『武田樣から御書面を下すつから、之を持つて廣德寺日桂和尚の許へ參れ』吉『ヘエ有難う存じます』隼『尚御家老より小遣として十五兩下し置かれた、必らず此の御恩を忘れてはならんぞ』吉『恐れ入ます』隼『此方も十兩遣はす、其から此の手紙は別に拙者から日桂和尚へ賴みの書狀、二通持て參れば和尚も快よく計らつて呉れるであらう』吉『種々御心配下さいまして御禮の申しやうもございません、其では御暇致します』とこゝで奥樣孃樣初め若黨の神部要助にも夫れ〴〵暇を告げて二通の書面と二十五兩の金を懷ろにして吉松は





下谷廣德寺へ參りました。

## （第八席） 吉松出家して祐澤となる事、並に左甚五郎蝦を彫る事

乃で吉松廣德寺へ參りまして和尚に面會をして是々斯樣々々、皆樣が命乞ひをなすつて下すつて御家老樣の御計らひで此方へ出ましてございます、どうか宜しく御願ひ申します』日『ハ、其方御指南番の齋藤權太夫を打殺したとは飛んだ事をやつたな、併し御家老や四ノ宮先生の御賴みがあるから如何にも世話をして遣はす、持參の金子二十五兩は預かつて置くから此方へ出せ、出家する者が金を多く持て居ては修行の邪魔だ、兩先生からも金は預かつてやつて呉れといふ御書面だから、預かつて遣はす』吉『ヘエ確かに御預け申します』日『ソコで出家になるのだから、名前を改なければならん』吉『ヘエ宜しうございます』日『何といふ名を附けてやらうな』吉『ヘエ私のことを祐天吉松〳〵と云ひますから、綽名の祐天といふのを名にしてお呉んなさいまし』日『馬鹿をいへ』吉『ヘエ』日『馬鹿をいへ、飛でもない事だ、芝三緣山增上寺三十六世の大僧正 祐天大上人だ、然ういふ尊とい名前を其儘附けることは迚も往かん』吉『左樣でございますか、けれども祐天といふと何だか坊さんらしくて宜いと思つて……』日『然んなに祐天が欲ければ、祐天を逆さにして天祐は何うだ』吉『天祐てえと淺草の天麩羅屋みたやうで往けません、萬梅とか一直なら宜いけれど……』日『萬梅だの一直だのといふ坊主があるか、其なら祐澤となれ』吉『祐澤てえと、三助見たや

うだ贅澤なら少しは洒落て居るが」日「然んな事をいつては名の附けやうがない、祐澤となれ」吉「へエ……宜うございます」日「ソコで、髪を剃すのだ」吉「オヤ〳〵到頭坊主になつちまつた」日「鼻の敵、身代の仇と狙ふ立花金五郎を討てる時節が來た時に還俗をしろ、齋藤權太夫を殺した一件で假に坊主になるのだから……」吉「へエ」日「就ては明日から經を覺えろ」吉「經なんぞ覺えねえツて頭を圓めて衣を引掛けて、三十六文の梅の木の珠數を持てりやア其で宜うございませう」日「馬鹿をいへ、往來をして居て、若し御出家さん 志す佛がございます、どうぞ御經を願ひますと頼まれて呼び込まれた時に、私は御經は知りませんといつて濟むか、那れは廣德寺の出家だといはれゝば、詰り此の廣德寺の耻辱になる、經の一通り位覺えて置かなければならん、何事も覺えて置て損はない」吉「ナニ經などを覺えたつて敵に出遇つた時の助けにやアならねえ、其の位ならモツと劍術を覺えといた方が宜い」日「寺で劍術の稽古をする奴があるか」吉「併し今仰しやつた樣に不意に經を頼まれた時は、無茶苦茶をやつて置くから差支へありません、經が違つてるから浮ばれねえと、亡者が苦情を云つたといふ話を聞た事がねえ、坊さんを頼んで御經を上げた、アア宜い心持ちになつたと思やア其で宜いんでございます」日「無茶苦茶の經といふものがあるか」吉「今やつて見るから御覽なさい、先づ佛壇の前へ座つて、チーンと鈴を鳴らす」日「成程」吉「南無阿彌陀佛〳〵〳〵チリンと又鈴を鳴らして、跡は口の中でジャブ〳〵ジャブ、ジャブジャブ〳〵ジャブジャ〳〵ジャブ南無阿彌陀佛チリーンと斯うやりやア宜いんで……」日「何だい其は」吉





「何だか私にも分りません、三度いへば三度ながら違ふんで……」日「呆れ返つた奴だ、マア〳〵宜いから神妙にして居なさい」吉「宜しうございます」と祐天吉松愈々祐澤といふ坊主になつたが御經なんぞ覺えようといふ氣は無い、其の代り元經師屋の職人だから唐紙の破れたのだの額の緣の取れたのだのといふものは綺麗に直し、其外本堂の掃除など能く行屆いて、クル〳〵働らくので日桂和尚にも飛だ重寶がられて居ります、其から二月ばかり別段お話もなかつたが或る日日「コレ〳〵祐澤や、祐澤」吉「オ、誰だか知らねえけれども和尚樣が呼んでるぜ」○「何だ祐澤といふなアお前のことちやアな

いか』吉『ウム俺の事か、然うだつけな、俺は吉松とばかり覺えてるんで、ウッカリして居た違えねえ然うだつけ』笑ひながら 吉『ヘエ和尚樣何御用でございます』日『自分の名を忘れる奴がある か、呆れた奴だ』吉『ヘエどうも恐入りました』日『時に祐澤』吉『ヘエ』日『ナゼ貴樣は當山の耻辱に なるやうな事をいたす』吉『何も私は耻辱になるやうな事は致しません』日『しない事はない』吉『何 でございます』日『朝ムックリ起ると衣を引掛けて丸八の黄袋を持ち片房の楊枝を咥へて豆絞の手 拭を肩に掛けて朝湯に行くさうだ、どうも出家たる者が豆絞の手拭などを肩に掛て、くはへ楊枝 で歩くなどゝいふ法があるか』吉『どうも恐入ります』日『其ばかりなら兎に角、湯に行くと風呂の 中で今も昔は瓦町なんどゝ唄を謠ふ、然んな坊主があるか』吉『ヘエ、どうも恐入りました、中々 坊主といふものは難かしいものでございますね』日『難かしいどころではない、出家の行ひは俗 人に出來難いことだ、天麩羅の立食をして鼻唄を謠ひながら歩くなどゝいふは怪しからん事だ、 串戯にも南無阿彌陀佛といつて歩め、仕樣のない奴だ』吉『ヘエ以來氣を着けます』日『一寸是から 使ひに行つて來なさい』吉『ヘエ宜しうございます何處に參ります』日『本所相生町二丁目の法安坊 の家を知つて居るか』吉『ヘエ存じて居ります、四ノ宮先生の所で御懇意になつて御使に行つた事 もございます』日『ア、然うか、彼所へ行て來い』吉『畏まりました』日『先達て御願ひ申して置た古 畫古筆、先方より大分急いて參りましたが、如何致して宜しうございますかと口上を陳べて返事 を聞いて來て呉れ』吉『ヘエ宜しうございます』日『間違へないやうに口上を云ひなさい』吉『串戯い





つちやア往けません其ッぱかりの文句を間違へて何うするもんぢやアありません、先達てお願ひ 申した古畫古筆先方より大分急いて參りました、如何取計らつたら宜しうございますかと家の坊 主が申しました……』日『何だ家の坊主とは』吉『坊の主だから坊主で宜いぢやアありませんか』日 『生意氣に文字の解釋をするな、假にも住職だ、和尚樣が申しました位の事は云へ』吉『ヘエ宜しう ございます、行て參ります』日『ア、行て來いよ夜の四ッ頃までに歸れば宜いから……』吉『然んな に掛りやアしません、まだ八ッを打たばかりだから今から行やア日の暮れねえ中に歸つて來ます』 ○『何でも宜いから、夜の四ッまでに歸つて來い、急ぐ用でもないから……』吉『ヘエ』と暫らく顔 を見て居りました吉松が、ア、之は何だ、俺が寺に居ては酒を飲むことも出來ず、食肉を食ふ ことも出來ないから、格別の用でもないが、法安坊といふ碁打の所へ使ひにやつて、鮮魚で酒 を飲んで、夜の四ッまでに醉を覺して歸つて來い、寺の周圍でやつてはならないから、隔れた所 で飲んで來いといふ謎だと氣が着いたから 吉『成程能く分りました、其の有難え思召しに從つて 事に依たら二三日歸らないかも知れません』吉『馬鹿をいへ然んなに長く掛つてはならん、夜の四 ッまでには必と歸つて來いよ』吉『ヘエ宜うございます、お前さんも灰汁拔けた、年增惚れのする 坊さんだ』日『エ、痴言た事をいふな』吉松の祐澤喜んで廣德寺を出て、眞直ぐに菊屋橋から門跡 前・並木から卍堂の所へ出て右へ切れて少し行くと今の厩橋其の頃は御厩の渡しといひました、 船で本所へ渡つて河端を眞直ぐに御藏橋を渡り横網へ出て回向院から相生町一丁目二丁目とやつ

て來た　吉「ア、此所だ〳〵、エー願ひます〳〵」○「ドーレ」出て來た法安坊の御弟子チョイ〳〵四ノ宮へも廣德寺へも使に來たので祐澤を知つて居る、○「ヤア誰だと思つたら祐澤さんの吉松さん」吉「何をいつてやがる祐澤なら祐澤で宜い、吉松なら吉松で宜い、名前を二つ呼ぶな、カイワイに張らねえでヤリに張つちまへ」碁打のお弟子、何の事だか分らない驚ろいて居る　吉「先生がお在宅なら一寸御目に掛りたい」○「一寸待てお呉んなさい」と弟子が奥へ來て　○「先生是々でございます」法「アハ、馬鹿な奴だ、併し腹からの馬鹿ではない、交際て見る中々面白い男だ、宜いから此方へ通せ」○「ハエ……、エ、祐澤さん此方へお通んなさい」吉「ア、今度は一つしか名を呼ばねえな……へエ先生御機嫌克しう、和尚も宜しく申しました」法「ア、お前も相變らず好い機嫌だ、併し祐澤引續て能く廣德寺に辛抱して居るな」吉「へエ、其の節は又種々御骨折下すつて有難う存じました、今日はマア其の御禮旁々和尚さんの使に參りました」法「ア、然うか、御住持の用といふのは何だ」吉「先達てお願ひ申して置いた古畫古筆、先方で大分急いて參りました、如何取計らつて宜しうございますかと和尚さんの申し附けでございます」法「ア、然うか其は差支ない、明日夕景に廣德寺へ參り御住持に御目に懸つてお話を致すと斯ういふて置て呉れ」吉「へエ宜しうございます」法「マア緩くりして往きなさい、今茶を入れるから」吉「御言葉ですが先生、お茶よりは酒が宜うございます」法「お前は坊主ぢやアないか」前「坊主だつて宜いぢやアありませんか、酒を飲む位愚かの事、經を知らねえ坊主なんだから、齋藤權太夫を殺したホンの言譯に寺へ入つ





てるんで、立花金五郎といふ敵に出遇へば還俗をして立派に仇討をする身體なんで……」法「成程其ならば差支もあるまい、今何か肴を誂らへるから待て」吉「ナニ實は其つもりで、此の向ふの魚峯といふ魚屋に鮪の宜いのがあつたから刺身を五人前造つて先生の所へ持つて來るやうに誂らへて來ました」法「其は氣の毒だな、お前に馳走になつては」吉「ナニ此方の家の帳面に附けて置て呉れと云つて來ました」法「ナニ俺の家の帳面……酷い奴があつたものだ」○「ヘエ御待遠さま」法「成程刺身が來た、サア飲みなさい」と之から法安坊先生、吉松の祐澤を對手に酒を飲みながら話をして居る中に、廣德寺の噂が出て、此の廣德寺の門を作つた左甚五郎の話を法安坊といふ碁打の先生が、面白可笑く御喋舌を致しました、餘事に渉つて畏入りますが、甚五郎の廣德寺御門普請に就て法安坊に代つて伯山が一席申上ますが、毎度申す通り總て藝事にしろ作事にしろ上手は出來ますが名人といふ者は却々出來ませんものでございます、從前最上屋敷跡を天文原、爰に朝鮮長屋てえものがありました、人呼んで名人長屋とも云ひました、何で名人長屋かといふと、爰に仕立屋の名人で藤助といふ人が居りました、乙女鞘の名人で源兵衛、彫刻師の飛驛の甚五郎、三人名人が居るといふ所から、誰いふとなく名人長屋、三人共意け者で、間があると酒ばかり飲んで居ります、甚五郎は獨身者ですから、源兵衛と藤助を自分の家へ呼んでは御馳走をする、自慢で料理を拵へて呉れるんでございますけれども、甚五郎少し辛好きで、源兵衛や藤助の口には些と合ひません、朝湯で早く一緒になつて、藤助と源兵衛が　藤「さて源兵衛さん、毎日のやうに甚

五郎さんが家へ來て飲んで呉れと呼びに來るから、ツイ飲みに行くけれども、何か買つて行くと怒るし、先方の言ふなり次第に馳走になつて居るが、那れで宜いといふもんでない、何か返禮をしたいがどうだらう』源『サア私も其を考へてるのだが、どういふ事に返禮をしたものか』藤『此の先に今度店開きになつた吉野といふ家がある、兎に角那所へ引張出して一杯飲ませて、醉た所を木ぢやアなし、竹ぢやアなし、』勸めたら酒に醉た所で厭ともいふまい、一晩吉原へ行て遊ばうぢやアないか』源『さうか、其ぢやアさうしよう、兎に角引張出さなければ都合が惡いから、一ぱい飲まうと云つて引張出さうぢやアないか』藤助源兵衞と相談が出來まして、甚五郎の門口 藤『お早うございます、甚五郎さんお宅ですか』甚『オヤ之ア源兵衞さん藤助さん、能く來てお呉んなすつた、今支度をしてソロ〳〵お迎ひに上らうと思つて居た所だ、サア上つて下さい』藤『どうも毎も〳〵御馳走になつて相濟みません、所で甚五郎さん、今日はお願ひがあつて來たんだ私達二人に交際て下さるまいかしら』甚『ヘエ何ですな』藤『此の先に店開きをしたばかりの呑屋があるが、私共の引掛りで、是非行てやりてえが、一緒に行てやつて下さいませんか』甚『アヽさうですか宜うございます、何所で飲むのも同じだ、ぢやア御一緒に行きませう。』ソコで藤助源兵衞甚五郎の三人が打連立て吉野といふ小料理屋へやつて參りまして、一ぱい二杯と思ふ内に、飲んで調子の狂つて來るのが酒の價値、酒を飲んで眞面目で居る位なら飲まん方が宜い、お酒といふものは少し飲んで居れば百藥の長と云つて藥になるが、度を過せば毒なもの、御徒士町の青石横丁に何





といふ酒屋でしたかツイ屋號は忘れましたが、表に下戸酒の藥を知らず、其の脇へ、上戸酒の毒を知らずと、書いてありました五合飲める人は三合位ゐ飲んで置けば藥かも知れませんが、お酒といふ物はさう往かないもので五合しか呑めない人が二升も飲みます、其が爲に前後が分らなくなる、サア矢でも鐵砲でも持て來いなどゝいふのが酒に心を奪はれたので、度を過してお酒を飲めば誰しも身體の調子の狂ふのが當然、醉ばらつて表を千鳥足で歩きます下戸の方から見たら、那んなに身體が利かないまで飲まなくつても宜さそうな事だと思ひませうが、上戸の方に伺ふと、又醉ふのが樂しみなのださうでムざいます、餘事に渉つて甚だ恐れ入りますが、大分盃が重つて來て 源『どうですえ甚五郎さん、二人で之から吉原へ行て見ようと思ふんだが一緒に交際て呉んなさらねえか』甚『私は未だ行た事がないのだけれども、ぢやア御一緒に行きませう』源『行てお吉兵衞方へ上りました、源兵衞と藤助が相談をして自分達はどうでも、甚五郎の氣に入らなければならないと思ふから、お職女郎の中里といふ善いのを宛行ひました、女が傍へ來やうと來まいと然んな事は構はない甚五郎、宜い心持にお酒を飲んで居る、其の内にお引け、敷てある布團の上へ寢轉んだが、敵娼も來ず行燈の燈火がボンヤリとして居ります、寢ようと思ふが何だか寢られない、ヒョイツと床の間を見ると、絹地の横物の幅が掛けてある、海老の繪だが其の見事なこと、何といふ人の筆だが落欵はありませんが、行燈の灯を搔立て、床からソッと出て暫く眺めて

居りましたが　甚『ア、之ア見事なもんだ、斯ういふ物を見ちやア打捨つて置けねえ、肌身放さず持つて居りました革の袋へ入れてある六分鑿、之は飛驒を出ます時、自分の師匠三代目の内匠から貰ひました品、之を取出して床板を見ると紅の如輪で、甚『イヤコレハ結構な板だ』之へプツリと鑿を入れまして、床に掛つて居る其の海老を手本としてコツ〳〵鑿初めた、スツカリ鑿て來てプツリと一本鑿が入ると、ポツクリ取れましたが、床板へ大きな穴が明いちまひました、其の海老が鑿上りましたのが、丁度夜の明方で　甚『ア、自分ながら能く出來た、傍にあつた扇を取て其穴の明いた所へ載せて海老を傍らへ置きまして暫く考へて居る所へ、源兵衛と藤助が　源『サアモウ歸るんですから』といふので打連立て表へ出ました、兩國の廣小路へ來て湯豆腐で一杯やりながら　藤『どうでした甚五郎さん』甚『ヘエ餘り面白くございません』藤『ハア氣に入らなかつたか』

甚『氣に入らないといふ譯ぢやアないが人のいふ程面白い所ぢやアない』源『甚五郎さん、大層目が赤いがどうしました』甚『昨夜は遂々寢られませんでした』源『寢なかつた、ヘエ女が附いて居たんですか』甚『座敷へ行くと直ぐに彫り初めて、明方まで彫通して了つたので、どうもスツカリ疲れて……』源『冗談云つちやア往けねえ、其れで氣に入らねえもねえもんだ、ぢやア全で寢ずにほりとほしてしまつたんで』甚『さうで……』藤『イヤ相方は飛んだ災難と驚いたらふアハ、、』之は話が何だが二人には可笑く聞えたやうでございます、此方は姿屋で花魁の座敷を掃除をするので、扇を取ると床板へポコンと穴が明て居る、喫驚して內所へ飛で來て此の事を主人に話す旦那がビ





ックリしたのは、三河町へ自分で出て行つて買つたんですけれども、ねこやものといふ奴で、通常で買つたら中々安くないものだ、自分の座敷とお職花魁の中里の座敷へ使つて置いた　圭『アノ花魁が昨夜の客を職人だと思つて振つた爲めにア、いふ事になつたんだらう』と早速花魁を呼んで　圭『昨夜お前さん客を振つたな』中『ツイ忙がしいもんだから行きませんでした』圭『其の返報だらう、床板へ穴を明けちつまたつといふことだ行つて見やう……ア、酷く明けちまつた…オヤ』隅にある海老へ氣が付きました　圭『オヽ是ア何だ、此の床板で彫つたんだな……訝しいな、氣の性か今此の髯が動くやうな心持がする……』書記を呼んで帳面を調べて見ると、甚五郎、藤助、源兵衛と書いてある、圭『アッ、夫ぢやア那が天文原の甚五郎さんかしら、コリヤア結構な寶物が舞込んで來た、賴んだからといつて却々彫つて呉れるんぢやアない、花魁、お前能く振つて呉れた』と大層姿屋が喜こびました、其から甚五郎が彫つた海老が姿屋に在るといふ評判で、見に來るが奥帳場に飾つてあるから店から見えない、見ようと思ふ者は上がる、見て終へば夫で宜いといつて歸れない、姿屋が此の海老の爲めに大變に客を引くやうになり、表の暖簾へ海老を付け姿屋吉兵衛を改め姿海老吉兵衛となりました、スルと中里が中『ア、濟まない、私は何んだか訝しな人だと思つて振つたが、那のお客が甚五郎さんといふ人か、サツパリした面白い人だ自分も年期が明けて終つたが別に情人がある譯ぢやアなし、どうか那の甚五郎さんの處へ行きたい』と吉兵衛に話をしましたから　吉『先方で何といふか知らないが兎も角も先方へ行つて話をして見ようと

一緒に來た源兵衞、藤助の處へ來て話をした、源兵衞、藤助も喜こんで　兩人『さて甚五郎さん是是、碌々顔も見なかつたお職の中里花魁が、年期が明けてお前さんの處へ來たいといふがどうでげす、貰ひますか』甚『私のやうな者の處へでも、來て呉れるといふのなら結構だ、何日まで獨身者でも居られませんから貰ひませうと、話しが目出度く纏まりまして、姿海老吉兵衞、源兵衞と藤助へ賴んで、自分が送つて來る、心掛の宜い中里、却々衣類も澤山持つて居ります、勿論甚五郎、こんな物を的に貰はふといふ譯ぢやアない、勤をして居たものが職人の女房になつたんだから、嘸べラ〳〵した着物でも引摺つて居るかと思ふと、どうしてキチンとしたものだ、家が面白いから甚五郎この頃ではだらしなく酒も呑まず、朝仕事に行き、夕方家へ歸つて來て、夫婦差向ひで一ぱい呑むのを樂しみにして居る、昨日まで姿海老吉兵衞のお職花魁、今日は彫刻師甚五郎の世話女房　甚『オ、今歸つたよ』女『お歸んなさい、あの今日は例も來る魚屋が來ないから、表の魚屋へ見に行つたら、宜い鰯魚があつたから買つて來てあります』甚『さうか、其奴ア旨えな、河豚と來た日にやア堪へられねえ、ぢやアスツカリ出來て居るのか、湯から歸つて來て一杯飲まう』お湯から戻つて來る、夫婦差向ひでこの河豚で酒を飲みました所が甚五郎は何ともなかつたが、暫らく經つと、女房のおさとが急に身體が痺れて苦しみ出した、早速醫者を呼びましたが屆かずいたして、到頭歸らぬ人となりました、恐るべきは中毒でございます、甚五郎魂を取られたやうにボンヤリして了つて、どうして宜いか分らない、源兵衞、藤助が　兩人『どうも仕方がない、之





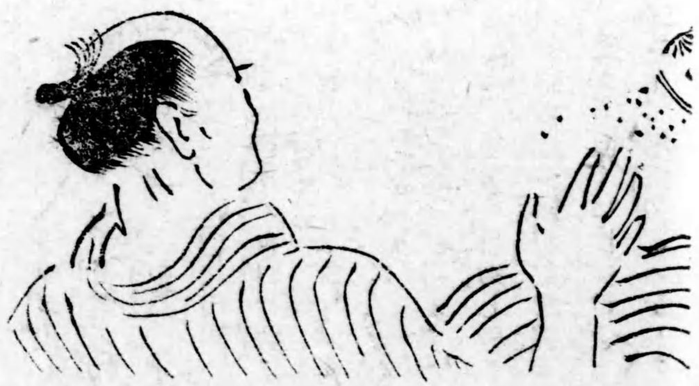
までの定命と諦めて、マア餘まり氣を落して病ひでもすると往けないから、シツカリしなさいよ』と其の晩は通夜、翌日が葬式、諏訪町の棟梁政五郎の家から、悴の長吉が若い者を連れて會葬に來る、寺は深川の靈岸でございます。

## （第九席）　甚五郎幽靈額を溝棚に納める事、並に廣德寺山門の事

ソコで、毒に當つたんだから心持宜く燒いた方が宜からうと、勿論甚五郎は行きません、長吉や、源兵衞や、藤助が靈岸の寺内の燒場へ、燒場へ行くと、大層燒場が混んで居ります』どうぞ暫らくお待ちなすつて下さい』といふから、早桶を置て歸つて來て一ぱい呑んで居ります、大層混んで居ると見えて、却々手間が取れる、其の内ガタ〳〵〳〵といふ音、何が始まつたか剛い騷ぎだ、處へ一人　○『エ、折角でございますが、佛樣を今晩燒く譯になりません』長『エ、何故だ』○隱亡が集つて博奕をして居ります處へ、今手が入りまして隱亡が皆な捕まつちまひました、折角でございますが、今晩は燒けませんでございます、お預けなさるなら、お預かり申して置ます』長『何だつて、隱亡が博奕をして捕まつた、釜が空て居るなら私達でやらうか』源『イヤ素人が燒かうたつて駄目だが、どうしよう佛を預けて行かうか』藤『イヤ今日此んなことになるなア佛がモウ一遍家へ歸りてエんだらう、仕方がない擔いで歸つて、又明日出直さうぢやアねえか』源『夫ぢやアさういふことにしよう』長『何んてエ馬鹿な目に遇んだらう……オヤ、此の早桶の繩が解けて居

る世、ハテな、誰も解く譯がねえが……』元の通りスッカリ縛つて、駕へ入れて擔いで天文原へ歸つて來て 藤『甚五郎さん、今歸つた』甚『どうもいろ〳〵有難う存じます』藤『イヤ妙な事で是々斯々だ、佛が家へ歸りてえンだらうと思ふから早桶を擔いで又歸つて來た、モウ一晩通夜をして下さい』甚『さうですかい、夫アマア何んたるお手數を掛けるんでせう、有難う存じます、モウ皆さんは昨晩疲れて居るから、今夜は私が一人で通夜をします、お前さん方歸つて下さい』藤『甚五郎さん、一人ぢやア淋しくつて往けなからう』甚『イエそんなことはございません自分の女房決して恐しいも何もございませんどうか靜かに通夜をしてやりたいと思ひます』藤『ぢやア明日の朝來ることにしよう』甚

『どうぞさういふことに お賴う申します』皆歸つた跡、早桶を正面の處へ直して、前の處へ線香を焚き、宵の中はさうでもないが、モウ九ツ時分、世間もシーンとして來ました、ボンヤリと前の處に甚五郎考がへて居ると、早桶の蓋をコツ〳〵と叩いて『一寸開けてお呉んなさい、一寸開けてお呉んなさいよ』ビックリして、ハテな魔がさしたといふものかしら、心を鎭めて窺ふと、確かに叩いて居る、繩を解いて蓋を取ると中から出たのは印袢纏を着た職人風の男だ、甚『お前は何だ』職『ヘエ此方樣は何處の何といふお宅で……』甚『此處は天文原の朝鮮長屋、俺は彫刻師の甚五郎だ』男『ア、さうでございましたが、お話には承はりましたが逢ふのは始めて、私は淺草阿部川町に居ります左官で熊五郎といふ者でございます、仕事が下手で何處へ行つても半人の手間さへ取れませんが、勝負事をすると、不思議な事に負けたことが一遍もなく、阿母は今年六十一でございます、一人の親を養なふのに、仕事をして居たんぢやア仕方がねえ、勝負事をすると屹度勝ちますから今日は仕事に行く、今日は仕事に行くと嘘を吐いて、家を出て彼方此方博奕をして歩きます、この頃燒場でもつて隱亡燒



が博奕をして毎日宜いのが出來ると聞きましたから、阿母には仕事に行つて手間を取つて來たが、實は今日もやつて居りまするとと急にお手當で、皆な逃げ出さうとしたが、充分の手配でやつて居た者が殘らず捕まりました、危ねえ處を逃げまして、外へ出たがモウ逃げる處がございません、傍を見ると早桶があつて、中に女の死骸が入つて居るのを引張り出して、隅の方へ投り出し、自分が中へはひつてスバリ蓋をして隱れて居ると、駕へ載けて擔ぎ出しましたから、今此處で聲を立つちやア危ねえと、何處までも窮屈を堪へて居りますと、身體の動きが止つて、他の人が居なくなつたやうだから、モウ之なら大丈夫と、今叩いて開けてお貰ひ申しましたので……』甚『エヽッ、ぢやア手前乃公ン處のおさとを何處かへ投り出して終つたのか』熊『ア、那れは此方の內儀なんでございましたか』甚『ウム不思議だな、屹度おさとがお前を助けたんだ、宜し、瞞家で案じて居るだらうから、歸つたら宜からう』熊『ヘエ有難う存じます』甚『錢がなからうな』甚『そんな工合で持つて居た錢も皆な何處へか落して終ひました』甚『此處に二分ある、お前にやるからこの二分を持つて早く家へ歸つて阿母に安心をさせな』熊『有難う存じます』と喜こんで熊五郎は出て行きました 甚『源兵衛さん藤助さんも付て居ながら、何てエ疎匆しいことだ、詰らねえ者を擔いで來て眞正にビックリした』と早桶の明いたのを隅の處へ轉がして甚五郎寢て了つた、夜が明けると源兵衛藤助 源『甚五郎さんお早う、ぢやア之から直ぐに出掛けよう今日は間違ひないからサア此方へ其の早桶を持つて來て……オヤ甚五郎さん、馬鹿なことをしち





やア往けねえ、何處へ佛樣を隱して終つた、串戲しちやア往けねえ』甚『何も串戲はしねえ、折角だつたが中が違つて居た』源『エッ、外の佛を持つて來たか知ら』甚『中には生きたのが入つて居た』源『生きたのが』甚『喋舌らねえで居てやつて下さいよ、是々斯う〳〵だ』源『夫アどうも何とも申譯がねえ、直ぐに燒場へ行つて見よう』燒場へ來ると、誰も窃む者もないチャンとしてあつた、之を燒いて此の葬式を濟みましたが、甚五郎氣になつて居るから、どうなつたか那方の樣子を尋ねて見ようと、阿部川町へ來て 甚『少々お聞き申します』○『ヘエ』甚『此の近所に左官で熊さんといふ方がございませうか』○『左官の熊さん、ヘエ此の荒物屋の裏でございまして、三軒目の家ですよ』甚五郎やつて來て見ると、門の處に六十ばかりになる婆さんが立て居る 甚『御免なさい』婆『ハイ』甚『此の裏に左官の熊さんといふのが……』婆『私の處でございます』甚『私は天文原の甚五郎でございます』甚『オヤ、貴所が甚五郎さんでございますか、この間は又悴が有難う存じました、お蔭樣で……』甚『イヤ阿母さん歸つて來て話しをしたかね』婆『スッカリ聞きましてございます』甚『默つて居れば宜いのに、どうしました』婆『一時は遁れましたけれども、矢張り隱亡燒の方が口を開いたと見えまして、お役人樣が翌る日になるとお出張んなすつて、遂々連てかれて了ひました』甚『オヤ捕まつたか』婆『其れで貴所御牢內で死んだといふ知らせがございました』甚『ナニ牢死をしたとえ』甚『ハイ私も何といふ情けない事だらうと思つて居りまする、と今悴が歸つて來ました』甚『何だか、お前さんのいふことは分らないね、牢死をしたといふ知らせが來て、又本人

が歸つて來たといふのは……』婆『ハイ、其からお前マア今御牢内で死んだといふ知らせが來たのにどうして歸つて來たと斯ういつたら、其ア嘘だ許されて歸つて來たから安心して呉れ、之も溝棚のお祖師様の御利益だ、お禮詣りに行くから阿母さん一緒に行つて突れといひますから、ちやア一緒に行かうといふと、阿母さんは足が惡いから乃公が脊負てやるといひまして、夫から忰に脊負て貰ひまして、お禮詣りに溝棚のお祖師様へ行つて、今歸つて來ました』甚『デ本人は何處へ行きました』婆『夫が訝しいのでございます、私を脊負て來て今茲へ下ろすと、本人の姿が見えなくなつて終ひました、ハテ何處へ行つたものかと思ひまして、今捜して居ります所で……』といつて居る處へ家主が　家『サア阿母歎いたつて仕方がねえ、生て居る中に交際た仲間の者へ知らしてやるから、心配しねえが宜い、死骸は下がるといふから』婆『イエ那の今忰は之へ歸つて……』家『婆さん何をいつてるんだ、そんな事はねえ、確かに御牢内で死んで終つたのだ』傍らに聞いて居た甚五郎が甚『ハテな、訝しなことがあるもんだ、婆さんを確かに脊負てお參詣に行つたといふ…ア、シテ見ると、孝行者の一念で亡靈が現はれて、此の阿母を脊負つて溝棚の御祖師様へお參詣をしたものかと、甚五郎氣の毒に思つて、熊五郎の阿母を引取つてやりました、幽靈の忰が母を脊負て行く處の繪を賴んで描て貰ひ、其の額を溝棚のお祖師様へ納めました、之が幽靈額といふ、誠に不思議なことのありましたもので、益々甚五郎の名前が高くなりました、茲に加賀様の御菩提所圓滿山廣德寺が普請をすることになつたに就て御作事係下山丹下殿より甚五郎と政五





郎とをお呼出しになり　丹『本堂は政五郎、門は甚五郎に任かせるから繪圖面を引いて出ます樣に就ては門の方は釘一切使つてはならぬが出來るか』甚『承知いたしました』兩人繪圖面を引いて出しましたか之れでよいといふことになり、愈々普請に係る、甚五郎も之から門へ掛らうといふ途端國から手紙が參りました取上げて見ると、自分の親甚左衞門が九死一生臨終の際に一目逢ひたい、直ぐに戻つて來て呉れるやうにといふ文面政五郎に見せて、甚『扨棟梁、國から斯ういふ手紙が參りました、據ろなく歸らなければなりません、就ては受合つた門はどういふことにしたら宜うございませうか』政『其奴ア甚五郎さん困つたな、困つたが親の病氣で行かなけりやアならないといふのを止める譯に行かず、本堂の方は私が受合つて居るから何だけれども、門はお前さんがやるといつてあるが……併し他の事ぢやアない、マア宜うございます、行つてお出でなさい、だが成丈け早く歸つて來て貰ひたい』甚『夫やアモウ言はれるまでの事はございません、濟み次第急いで歸つて來ます』政『甚五郎さん、そんな事もなからうが、萬々ケ一お前さんの歸りが後れて、此方が納まらないやうだつたらば、お前さんの引いた繪圖通り私がやつて置くがどうだね』甚『イヤ棟梁さうしてお呉んなさりやア結構でございます』政『だが甚五郎さん的になすつちやア困る、御作事方の下山さんへは、お前さんが作らへた事にするんだから、夫ア萬々ケ一の話しだ、成丈歸つて來て呉れなければ困る』甚『イエ屹度歸ります、ちやアどうか宜しくお賴み申します』政五郎に賴んで甚五郎、之から故郷を指して急いで來ました、途中別段のお話しもなく上尾、から

桶川へ出る心算であつたのが、どう道が迷つたのか訝しな處へ入つて來た　甚『御免なさいまし』○『ハイ』　甚『少々お聞き申しますが、之から桶川の方へ行くには、どう行つたら宜しうございませうか』甚『之から桶川へ行くにはこの先に大きい原があります、その原を横切つて向ふへ拔けると村がある、その村を越して行くんですが、日が暮ちやア此の先の原が通れませんよ、この近所へ貴所泊つたら宜しうございませう』甚『何で』○『何でといつて、惡い狐が居やアがつて、夜原を通るといふと、皆な化かされます』甚『アハさうですか、ナニ私はそんなことは些とも何とも思ひません、イヤ御親切に有難う存じます……何をいつてやアがるんだ、狐や狸に化されて堪るものか』と甚五郎、止めたのも構はず急いで來る原中、どうも廣い事、歩いて居る中に段々原が伸びて來るやうな心持がする、水溜りの膝と思ふ奴が胸迄ある、オヤ訝しいぞア、化されたんぢやアなからうか、ア、何んだか道が違つたやうだ、之ア人の通らない道、那方にチヤンと道が付て居る……ア、此方だ〳〵』と來て見ると田舍娘が二人居る、一人の姉らしい方の娘が大層苦しんで居る樣子、妹『姉さん確かりなせえましよ、モウ直き村に着くだから我慢をして歩かつしやい……姉さかりしなせエよ』と妹が頻りに介抱して居る甚『モシどうかしたのかの』妹『有難う存じます、姉さんが胸が痛いといつて苦しんで歩くことが出來ません』甚五郎腹の中で、ア、狐だ、こん畜生化かしに出て居やアがる、狐なら化されるものか、宜し、反對に此方で狐を化して呉れやうと　甚『イヤ乃公も村まで行くんだから、脊負てやらう』姉『ヘエ有難う存じます、ぢやア姉さん





や、脊負るかい』姉『どうかお願ひ申します』で甚五郎脊中へ脊負つたかと思ふと、ギユッと足の方を押へちまつた　甚『サア此の狐逃すものか』姉『何をいつてるだい、我等ア狐ぢやアねえ、アレッ、そんなに堅く押へちやア駄目だ』甚『何が駄目だ、サア案内しな、お前先へ立つて行きな』妹『アレ、そんなに酷く姉さんを捉まへちまつて……』甚『文句をいはねえで先へ行きな、オヤ姿が見えなくなつた、ホーラ茲だ、この脊負てる方を放さねえ』ヒヨイッと振向いて見ると石の地藏樣を脊負て涎掛けを押へて居たんだビックリして、甚『之ア往けねえ化されたんだ忌々しい、旨くやるもんだ、化さうと思つて居て化されちまつた、極りが惡くつて人に話しが出來ねえ』原を通り越したかと思ふと向ふに灯が見える　甚『ヘエ御免下さいまし、御免下さいまし』○『ハイ』甚『私は江戸の者でございますが、道を間違へて困ります夜の明けるまでお宅へお置き下さる譯にはなりますまいか』○『ア、さうかい、此方へお入んなさい、お前さん原を切つて來たんぢやアないか』○『さうでございます』甚『能く狐に魅まれなかつたね』甚『實は今魅まれました』○『さうだらう大抵やられるだから、土地の者は何をして居ても揶揄はねえが、始めてだときつと一ぱい食ふよ、サア此方へお上んなさいまし』甚『ヘエ』○『丁度宜い處だ、店番がなくつて困まるで、お前さん留守番をしてお呉んなさいまし』甚『ヘエ、さうでございますか』○『サア此方へお上んなさいまし……ナニ煩らつて居た女房が今息を引取つた那所に寢かしてあるんだ、一寸二三軒知らして置かなければならねえが、佛樣ばかり家へ打捨つて置いて行くといふ譯に往かねえ、濟まねえけれ

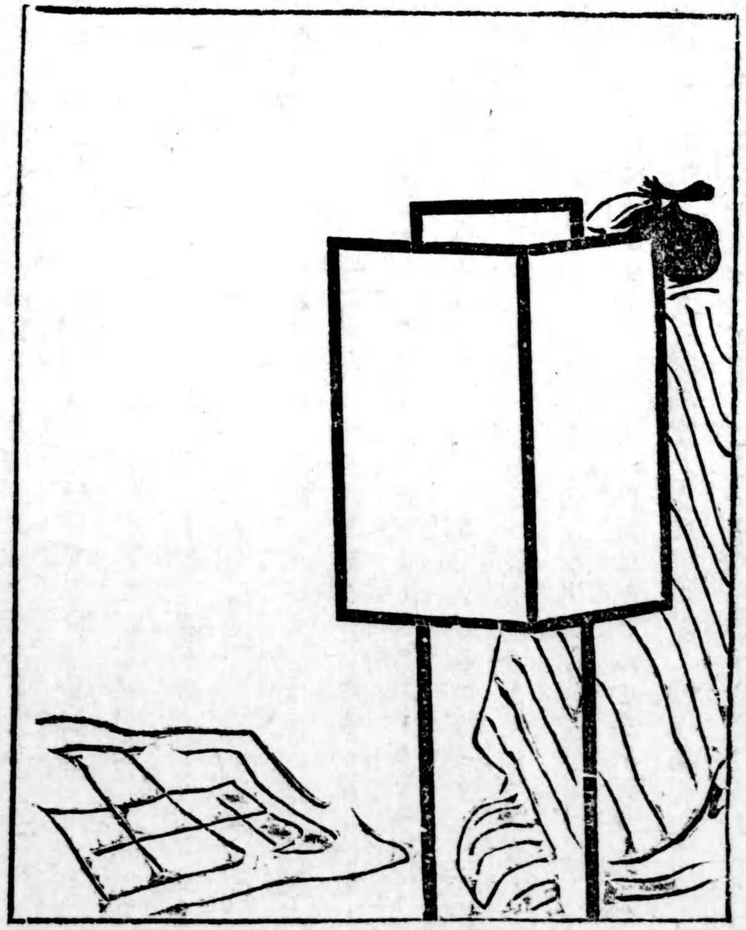
ども番をして居て下さい』甚五郎何んて間が悪いんでせう、宜い顔も出來ませんけれども仕方がない 甚『宜しうございます、番をして居ります行つてお出でなさいまし』○『ちやア賴みました よ』と喜右衞門といふ百姓、出て行きました、園爐裡の前に甚五郎・ボンヤリして居ると、逆さ屏風の内に寢かしてある死人、フラ〳〵と起上つて歩き出した 甚『オヤッ』ビックリした死人が歩き出したんだから之は無理はない、若し間違があつた日にやア留守居の役が濟まない、肌に付けて居た彼の六分鑿を取出して、突然怖さを堪へてスート胸の邊りを目蒐けて突くとバッタリ夫れへ倒れた、甚五郎も驚ろいて尻餅を搗く途端に門口がガラリと開いて、歸つて來た喜右衞門喜『どうも留守番を有難う存じます……アッ江戸のお客さん何だつてお死人を引張り出して相撲なんぞを取るんだ』甚『冗談いつちやア往けない、私は相撲なんぞを取るもんか、今是々斯う〳〵での』喜『ア、、其やアお驚ろきなさつただらう、さういへば門で黑いものが向ふへ飛んで行つた、幸祥寺の化猫が來やアがつたンだ』甚『何です幸祥寺の化猫といふのは』喜『此の先に幸祥寺といふ寺があつて、その裏に化猫が棲んで居て、どうも訝しなことをしやアがる、佛があると其奴が來て招ぐと歩き出すといふ、お前さんが鑿を持つて暴れたんで猫で驚ろいて逃げちまつたんだ、イヤ有難う存じます』と禮をいつて居る處へ知らせに依つて親戚の者もやつて來た 甚『イヤ其の幸祥寺の銀杏の洞に居る猫といふのは〳〵』喜『ナニ其の猫といふものも四五十疋居て、何處から集まつて來るか分りませんか』甚『一寸行つて見たいもんだが』喜『ア、行つてお出でなさい』甚五郎が來て





見ると、成程大きいのや、小さいのや、眠つて居るのもあれば、ぢやれて居るのもある、矢立を取出してサラ〳〵と其の猫の形を取りました、甚五郎後に天王寺、又は日光の猫を彫りましたのは、之が大層役に立つたやうで日を經て故郷の心添へ參りまするとと、親父の甚左衞門は中々の重體直ぐに側を離れることが出來ませんから、附添つて居りました、江戸では棟梁政五郎、廣德寺の御普請さう〳〵引張つて置く譯になりません、門を甚五郎が引いた繪圖面通りに自分でしまして、甚五郎の造らへたことにして御作事方下山丹下殿へ申上げた、スッカリ出來上つたのを見て、マア之れなれば大丈夫だ、ハテ斯造らへて見ると心持ち門の丈が低いやうだ、モウ二寸高いと素晴らしいが、ナニ此方が何うした譯ぢやアねえ、繪圖面通りにやつたんだ、之なら甚五郎さんに何ともいはれる氣遣はないと政五郎思つて居る所へ 甚『エ、只今歸りました』政『オヤ甚五郎さん能く歸つて來てお呉れだ、サア此方へ上つてお呉んなさい……甚五郎さんが歸つて來た、一ペエ爛けねえか』甚『どうも姐さん種々御迷惑を掛けて濟みません』姐『オヤ甚五郎さん、能くお歸んなすつた、家の棟梁と始終お前さんの噂ばかりして居たんですよ』と早速酒と肴の支度が出來た 政『さて甚五郎さん、日取がモウ迫つて來て、仕方がねえから、那の門はお前さんの引いた繪圖面で造らへましたよ』甚『ア、左樣でございますか、どうも有難う存じます』政『就ては甚五郎さん、一寸一緒に行つて見て貰ひたい』甚『ナニ棟梁見ねえたつて宜うございます』政『ナニさうでねえ見てお呉れ』甚『さうですか夫れぢやア行きませう』政『六尺杖持て行け』甚五郎政五郎、弟子を連れて

廣德寺へ參りました、尺杖を當てましてスッカリ甚五郎が見て　甚「どうも棟梁能く出來ました、私が自分でやつても斯うは往きません」政「ナニ甚五郎さん手落はないかい」甚「ヘエ、何處も手落はなく、結構でございます」政「遠慮のねえ處をいつて呉んねえ」甚「イエ克く出來ました」政「さうかい、夫を聞いて私も安心をしたぢやア家へ行つてユックリ飲まう」と諏訪町へ戻つて來て、又た差向ひで盃の數を重ねて來た、時に甚五郎が、甚「さて棟梁、私が居なくなつて代りに造らへて下すつて、誠に能く出來ましたが、口惜しいことには丈が少し低うございました」政「サア甚五郎さん乃公もさう思ふ、お前さんの繪圖面通りやつ







たんだが、甚五郎さん二寸ばかり低いね」甚「棟梁先刻尺杖を當て見ましたが私の引いた繪圖面通りぢやアないやうです」政「其れア甚五郎さん困る、お前さんの繪圖面通りなんだ」甚「イヤさうぢやアございません烏渡繪圖面を出して見てお呉んなさい」眞中へ繪圖面を置て甚「棟梁どうです、二寸低いぢやアございませんか」政「ウム、どうして甚五郎さん斯んなことになつたらう」甚「私は先刻尺杖を當てた時に考へましたが、切墨と胴突と間違へて切つたんだ、誰だか知らないが受合つた職人が前の晩に遊びにでも行つたんだらう、幾分か眠い處で鋸を宛てたから切墨を間違へて切つて了つた、一本の柱が二寸短くなつたから仕方がない、他の一本も知れないやうに切つた、夫れだから二寸短くなつたんでせう」政「成程さうか、此奴ア甚五郎さん言譯のねえ事をした、能く私が調なかつたのが惡かつた」甚「ナニ棟梁、二寸低いからつて別に障りもない結構で、兎角いふ處はございません」政「マア甚五郎さん出來ちまつたんだ、勘辨してお呉んなさい」胴突とは何の事だといふと、中墨といつて茲から斯うだといふ處へ墨を引く、さうして又切る處へ墨を引くもんだから、間違えて夫から切つたもので、快い心持になつて甚五郎二階へ上つて寢た眞夜中、棟梁政五郎が鑿を咽喉へ突き、身體中血だらけ　政「甚五郎さん何とも仕事を間違へてお前の名前を傷けて濟なかつた、勘辨して呉れ、私は死んで言譯をする、就ては悴の長吉、どうか一人前の大工にしてお呉んなさい、夫だけお前さんに賴んで置く、私の一念で那の門は、二寸上らないまでも、幾らか上げて見せるから……」傍に寢て居た弟子の六藏が　六「甚五郎さん、甚五

郎さん……」起されて目を開いて　甚「何だ、夢か、忌な夢を見るものだ」トン〳〵と梯子を踏んで下へ　甚「モシ姐さん」姐「ハイ」甚「棟梁は寢てますかい」姐「ハイ茲……オヤ便所へでも行きましたかしら」甚「一寸見てお呉んなさい……」姐「オヤ甚五郎さん、居ませんよ」甚「エ、ッ、ちやア長吉さんを起して下さい……一寸私と一緒に行つて下さい」二人を連れて甚五郎、先へ立つて下谷廣德寺の作事小屋に入つて見ると、棟梁政五郎は道具箱から六分鑿を取り出し、見事に咽喉を突て居りました、長吉も家内も嘆きましたが返りません、甚五郎は之を慰め、知れないやうにと死骸を擔いで立歸り宅で氣が違つて死んだことにいたしました、跡は悴の長吉、二代目政五郎となつて自分が後見となり力を添えて、親政五郎に劣らぬものにいたしました、處で廣德寺の門は、政五郎の一心か心持高くなつた、紙を一枚持つて行つて柱と臺石の間を通すと、其の紙がスッと通る、双方の柱とも然うであるから彼の門は途中にプラ下つて居るやうな形で、私はまだ實地紙を持つて行つて試しては見ませんが、然ういふ事を言ひ傳へて居ります。

（第十席）　祐澤兩國橋に身投を助ける事、並に祐澤繪双紙を見て珠數を切る事

扨長たらしく餘事を申し上げて恐れ入りますが、法安坊先生と祐澤は斯んな話をしながら酒を飲んで居ります中に、大分夜が更けて參りました　法「祐澤可なり過けるやうだな」吉「ヘエ十分頂きましたからモウ是で御免を被ります」法「其では飯を食べなさい」吉「イエ御飯は欲くございません」法「然うか、ぢやア早く歸んなさい」吉「ヘエ御機嫌克う大きに御馳走樣になりました」と吉松は禮をいつて法安坊の家を出ると　法「ア、祐澤待て、大分醉て居るやうだ、駕籠へ乘つて行け」吉「駕籠に乘るには錢が要ります」　法「五百もあつたら乘れるだらう」吉「ヘエ五百ありやア御の字でございます」法「其では一分遣るから、乘つて行け」吉「ヘエ有難う存じます、何だかおねだり申したやうでございます」と一分貰つて其儘表へ出たが、醉た所を風に吹かれて快い心地だ、吉「エ、、駕籠に乘れといつて一分呉れたが、どうして駕籠などに乘つちやア勿體ねえ、門前の花賣婆アが身體が惡くツて寢て居るから藥の錢の補足にしろと一分遣りやア、どの位喜こぶか知れねえ、俺は達者の足だ、ブラ〳〵歩いて行く方が宜い心持ちだ……ア、曇つて居たから日和下駄を穿いて來たが、大分道の惡い所を見ると、法安坊先生の處で飲んで居る中に降つたと見える、道理で表が淋しいと思つた……」と獨り言をいひながら回向院を後ろにして兩國橋の眞中へ差掛つて來て、向ふを見ると、平常賑やかの廣小路も雨の爲に淋しく、橋上も人ッ子一人通らない、丁度今中程少し過だ處まで來ると、欄干に片足掛けて老人が兩手を合せてアワヤ川へ飛込んとする樣子でございます吉松の祐澤が見て、ヤレ可哀想に是れは身投だ、其とも戸隱し樣へ梨でも斷つて拜んで居るのかと、立留つて樣子を窺つて居ると全く身投に相違ない、前へ身體をヌッと出してアワヤ飛込んとする體を見定めたから吉松が突然後ろから　吉「マア待ちねえ」といひながら抱

き留めた　爺『ハイ有難う存じますが、私は死なゝければならん者でございますから、どうか御見逓しなすつて下さいまし』吉『馬鹿をいひねえ人が身を投げて死なうといふのを見逓して行ける譯のものぢやアねえ、マア〳〵待チねえ、俺の目に入いつたからにやアお前を殺す譯にやア往かねえ』爺『大層貴所はイナセな口をお利きなさる坊さんでございますな』吉『然うよ何も左樣然らば と、改たまつて口を利くのが坊主といふ譯でもねえザッカケねえ口を利いたつて坊主は坊主だ、尤も俺は經一つ知らねえけれども、何も怪しい者ぢやアねえから安心しろ、而してお前何で死ぬのだ、金ゆゑ死ぬのか、外に何か理由があるのか、話をして見ねえ、俺はまだ死んだ事はねえけれども、ドブンと飛込んで水を呑んで土左衞門となるまでには餘ッ程苦しまなけりやアならねえ、然んな思ひをして死ぬにやア及ばねえ、其とも理由を聞いて成程尤もだ、其ぢやア死ぬより他に仕方がねえと極つたら、何も水の中へ飛込んで苦しまずとも、俺が目と鼻の間を一つ打撲つて一思ひに殺してやらう』爺『御親切に有難う存じます、實は金ゆゑ死ぬのでございます』吉『然うか、金で事の濟むことなら俺は無えが、俺を可愛がつて呉れる立派な人があるから、何んなでも相談に乘つて遣る、サア此方へ來ねえ、斯んな所に居ると魔が映して往かねえ』爺『有難う存じます、どうか貴所……』吉『マア宜ッて事よ、此方へ來ねえか』爺『ハイ』其の爺さんを引張つて、兩國橋を渡たり切つて、元柳橋の處ろへ來て、橋の袂に立て掛けてあつた大きな石へ手を掛けると、ウーン、バタンと倒して、懷ろから手拭を出して其の石の上をバッバッとはたいて　吉『サアお爺





さん是れへ腰を掛ねえ』爺『有難う存じます』吉『どう、いふ理由だか話をしねえ』爺『實は私は本所松坂町一丁目の者でございます』吉『ナニ本所松坂町一丁目、吉良上野介かえ』吉『御串戯ばかり、死なうといふ者を馬鹿にしちやア往けません』吉『何うしたんだ』爺『ハイ私は明樽買でございます、明樽買といふ稼業は、天秤の先きへ繩を附けて、樽はございい、明樽のお拂ひはございい、明樽の……』吉『オイ〳〵明樽屋は一遍云やア分つてる』爺『ヘエッイ稼業に身が入りまして…』吉『然んなに稼業に身が入つてるなら、何も死ぬにやア及ぶめえ』爺『御尤もでございますが、死なゝければならないといふ其の理由は、今から三年前女房が死ました何うする事も出來ません據ろなく人の世話で五兩の御金を、本所横網の金貸のおたつさんといふ人から借りました、

まだ年は四十になるかならないといふ年増でございますが、近所の人はおたつ婆ア〳〵と申します、此の借りた御金をどうしても返す事が出來ません、何うしたら宜らうと思つて居ると返せないものを無理に返せとは云はないから、此の證文を書き直して判を捺して呉れろと、新らしい證文に書き直して先の證文は破つて終ひました、マア親切に能く然うして呉れたと喜こんで居ると、四月ばかり跡のこと、モウ金を貸してから三年にもなつたが、迚もお前さんには返せない、娘のおえいといふのが、今年十九になりますが此の娘を家へ遣しなさい、奉公人代りに使つてやる、出入の多い家だから、貰ひも隨分あるから、其れを着被りと小遣ひにして、給金の方で元金へ段々入れて往くやうにしたら自然と形が着くからと、斯う申すので私も喜こんで、其ではどうぞ然うして下さいと娘を、おたつ婆さんの所へ遣りました』吉『ウム』爺『今日此頃になつて聞て見ると、有らう事か有るまい事か、娘に前尻を賣らせるといふことでございまして、實は私も吃驚致しまして仕方がないから今まで音信不通になつて居りました親類が、下總の行德にありますから面を被つて是へ參り、譯を話して十五兩の金を借りて來て、元は五兩でも餘ッ程間があつたから、何や彼やと文句を列べて、十兩位ゐな事はいふだらうと斯う思ひまして、家主さんを賴んで話に行つて貰ふと、元利揃へて五十一兩三分遣せと申します其は大變だ、然んな馬鹿の話しはない、元金が五兩の上に、假令三月でも四月でも娘を連れてつて働らかして置て、然んな澤山の金を出す譯がないといふと首と釣替の印形を捺して、立派に證文を入れて置きながら何をいふん





だ、金が出來ないから娘を其方へ渡すといつて遣したんだらう、金の代はりに取つた娘なら、燒いて食はうが煮て食はうが、此方の勝手だ、今になつて金を返すといつても少しばかりの金で娘は返されねえ、是まで着被りから食雜用殘らず勘定をして五十一兩と二分鐚一文缺けても娘は渡す譯に往かねえといふ恐ろしい權幕なので家主も歸つて來て是々といひますから、夫ぢやアモウ五兩出しますから其で話を附けて下さいと十五兩の金を持たして掛合ひにやりますと、何うしても承知致しません、家主さんも然んな判らない話はないと押問答をして居る所へおたつ婆さんの色男で二段目十兩の相撲取で、當時横綱を張つて居る稲妻雷五郎の弟子の荒磯權藏といふ者が奥から出て來て、グヅ〳〵云はんで是を持つてサッと歸れと家主の出した十五兩の金を懷ろへ捻ぢ込んで、何と亂暴な事をするぢやアございませんか、家主さんの襟髮を掴んで往來中へ投り出して終ひまして、御氣の毒な家主の藤兵衛さんは泥だらけになつて恥ぢを搔いて歸つて來て口惜がつて居ります、私はモウ年を老るし只た一人の娘は取られて了ひ、他人樣には迷惑を掛け、長壽すれば耻多し、死ぬより外は仕方がないと覺悟を致して今兩國橋から身を投ようといふ處へ貴所が御出でになりまして助けられたやうな譯でございます』吉『然うか、其やア爺さんとんだ災難だが、何にしろ首と釣替の印形を取られたのがお前惡かつた、モウ是に懲りて印形なんか捺す時にやア能く目の明いた人に見て貰つて事をしなくつちやア往かねえ、最初から巧んで惡い事をされた日にやア往生だ、マア〳〵心配しなさんな、人の事は人がすると極つて居る、俺が口を利いて

やるから安心しねえ、兎も角本所の松坂町へ行かうぢやアねえか』爺『へエ有難う存じます、どうか何分御願ひ申します』トボ〳〵して居る樽屋の爺を劬はつて來ると 爺『アノ此の裏でございます』吉『長屋の月番といふのは井戸屋の源七さんといふ人でございます』其所の家を叩き起して、吉『今是々斯々で此爺さんを連て來た明日の夕刻迄には話を着けて上るから、又爺さんが心得違ひをしねえように能くお前さん方で氣を着けて居てお呉んなさい』源『どうも是は御出家さん御親切樣に有難う存じます何分どうぞお願ひ申します』と云ふので長屋の者へ明樽屋の爺さんを引渡して、松坂町を出ました吉松ブラ〳〵やつて來ましたが、途中で手間取つたから廣德寺へ歸つて來るとガラリ夜が明けました 吉『へエ和尙樣、只今歸つて參りました』日『ア、祐澤か、遲いではないか、昨日四ッまでに歸つて來いといつて本所相生町の法安坊の所まで遣つたのに、今時分に歸つて來るといふは何ういふ譯だ』吉『どうも和尙さん恐入りました、實は途中で是々斯々いふ事がありましたので、其ゆゑ遲くなりました』日『然うか、其れは良い事をした、積善の家に餘慶あり人は良い事をすれば又良い報いがある、能く助けてやんなすつた、然んな事があつたとは知らんから遲い叱言をいつて惡かつた』吉『ナニ和尙さんは知らねえんだから、小言をいふなア當然で惡い事も何もありやアしません』日『其に就ても憎い奴は其のおたつとかいふ惡婆だ、是は愚僧が心利いた者を選んで話を着けに遣るから、お前が行くには及ばん、又お前が行つて喧嘩でもすると、穩やかに事が纏まらんから……』吉『イエ大丈夫でございます、私が口を利いてやると約束を





して來たんだから私が參ります』日『イヤ〳〵止しなすつた方が宜い』吉『然う云はねえで私をやつてお呉んなせえ、必と治めて來ます』日『お前は行つて何ういふ事に話を着けるつもりだ』吉『然うでございますね、先づ五十一兩三分といふんだから半分の二十五兩も出したら話が着くだらうと思ひます、就ては和尙さんに預けてある二十五兩お出しなすつて下さい』日『然うか、併し然うと聞いては廣德寺の住持たる者が、お前一人に押附けては置れない、乃公も幾らか出さう、又た檀家の御方に話をしたら、心ある人は其ならば乃公も一兩出してやらう乃公は三分出して遣らうといふて、二十五兩や三十兩の金はお前の貯金へ手を附んでも濟むだらう』吉『ナニ然んな面倒臭えことをするにやア及びません、私の預けた金さへ出して呉れりやア宜いんだ、出して呉れる事が出來ねえなら、お前さん私の金を使ひ込んだね』日『馬鹿をいへ、誰が貴樣の金なんぞ使ひ込むものか、其では出してやるから持て行け、併し祐澤、出家といふ者は頭に對しても事を圓く治めなければ往かんぞ』日『へエ宜しうございます』吉『宜しうございます』日『袈裟と衣に免じても圓く治めろ』吉『宜しうございます』日『分つたら行つて來い』吉松の祐澤、臺所へ來て御飯を食べ、新らしい衣と着換へて、三十六文の梅の珠數を持つて下谷の廣德寺を出て、例の通り淺草から御厩の渡舟を渡つて本所の御藏橋を眞つ直に横網へ出まして 吉『ハテ何所だな、聞いて見やう』八百屋さんが荷を下して休んで居るから 吉『八百屋さんお早うございます』八『へエお早うございます』吉『一寸物をお尋ね申しますが、此の近所に金貸のおたつ婆さんといふのがありませうか』八『ア、金貸のおたつさんの家は

此先きだが、彼所の家を坊さんが尋ねるなんてえ事は珍らしいが、何うかしましたか、何でも佛さまがあると供物だの何のと餘計な錢が要るといつて、佛壇を叩ッ毀し位牌を川へ流して終つた位の婆さんだから、坊さんにお經を賴むやうな事はありますまい』吉『ナニ經を讀んだり佛樣の事で來たんぢやアないんで、少し話があつて來ました』八『然うですかい、其ぢやア此所を眞直ぐに御出でなさい、彼所に赤い犬が寢て居るアノ、前の格子の簾つてる家がおたつさんの家ですよ』吉『有難うございます……、アヽ酷い婆アといふ事は今の話でも大體分る、アヽ此所だな』前へ立つて中の樣子を覗いて見ると、沓脫石の上へ俎板へ鼻緒をすげたと思ふやうな大きな履物が一足ある、アヽ是が荒磯權藏といふ相撲取の下駄だなとガラ〳〵〳〵格子を開けて　吉『ヘエ御早うございます』大きな聲で誰だいといひながら障子を開けたのを見ると大きな相撲　相『オヽ坊さんか』吉『ハイ、エーおたつさんの御宅は此方でムいますか』相『然うだよ』吉『少々御目に掛り度う存じます、どうぞ御關取御取次を願ひます』相『オヽ承知した……、オイ何だか知らねえが坊さんが來てお前に遇ひたいといふぜ、朝坊主は延喜が宜いといふぜ、アハハヽヽ』吉『畜生那んな事をいつて高笑ひをして居やがる憎々しい相撲だなア』たつ『アヽ、然うかえ、關取何だか昇げてお呉れな』相『オヽ、御出家さん此方へ昇んなさい』吉『ハイ有難う存じます』臺所で煮焚でもして居たものか、おたつ婆さん襷を取つてクル〳〵と圓めて其所へ置き、少し濡れた手を前垂で拭きながら出て來た、頭を見ると大きな丸髷、四十餘といふ年をして赤い手絡を掛け、誠にどうも色ッぽい婆アで





ございます、たつ『御出家さん何でございます』吉『おたつさんといふのは和女でございますか、初めて御目に掛ります、私は下谷廣德寺の弟子坊主でございまして、名を祐澤と申します、昨晩九ツ些と後れました時分兩國橋を通り掛ると、身を投ようといふ老人がございました、抱止めて段段話を聞くと是々斯々いふ譯、之を見逃して殺して終へば、御當家に居りますお榮といふ娘が親父は此の家の爲に死んで終つたのだ、何で妾が此所に奉公がして居られようと、是も身を投げて死ぬとか、首を縊つて死ぬとかしたら、只た五兩の金が原因で、二人まで命を捨てる事になる、モウ前にも間へ入つた人があんなさるさうだが、私は昨夜助けたといふ緣引きで此方へ參りました、どうか何事も仰しやらず、此の二十五兩の金を以て、お榮といふ娘と證文を私に返して頂だきたいものでございます、其お願に參りました、モシお關取さんえ、鶴の一聲斯うしてやれと一言仰しやつて下されば何うでもならうと思ひます、どうか一つお關取からも御口添へをなすつて頂だき度うございます、强い許りが力士ではありますまい、情には負けて頂だき度う存じます』たつ『關取默つてお在、お前口をお出しでないよ……、オイ坊さん、餘計な事をいつて來なさんな、金を借りて返す事が出來ねえで、娘を此方へ遣して置て、今になつて些かばかりの金で娘を取返し、借金も棒を引かうといふ、然んな勝手な事をされた日にやア金貸は御飯が食へねえよ、關取此の金を坊主の懷ろへ入れて敲き出してお呉れ』權『オヽ宜し、サア坊さん餘計な事をいはんで、サッサと行つしやい、斯なもの持つて來ても駄目だ』と二十五兩の金を祐澤の懷へ捻込み、胸

倉取つて一昨日來いと、力任せにウンと表へ突出された、固より力のある力士に突かれてヨロヨロと表へ蹌け出た、跡をピツタリ締めて　權『態ア見やがれ』たつ『アハ、、、可笑かつたねえ』權『ワツハ、、、』と二人は大口開いて笑つた、祐澤口惜くつて堪らない、力士だけに力がありやアがるから、人を突出しやアがつたが、篦棒めえ、相撲の上に行くのは柔術だ、四ノ宮隼人先生に教へられた劍術、柔術、飛込んで叩き附けてやらうかとは思つたが、廣德寺を出る時に、頭に兎じて我慢をしろ、袈裟衣に兎じて圓く治めて來いといはれた、喧嘩をして歸つたら、ソレ見ろ夫だから外の者を遣らうといつたのだ、と和尚さんに叱られるだらう、けれども口惜いなア、斯いふ時には土地の顔役とか俠客とかいふ人に口を利いて貰うのが一番だといふ話だ、中の鄕原町の三河屋萬藏といふ人は元博奕打の親分だつたが、今ぢやア水戸樣へ出入る人入稼業の元締、以前俺が飛んで歩いて居る時分に、此の親分に可愛がられた事がある、此つア三河屋の元締の所へ行つて顏役の男づくで口を利いて貰はう、初めつから那んな婆アや力士に遇はねえで然うすりやア宜つた』と道を急いで本所中ノ鄕原町の三河屋萬藏の家へやつて來て見ると、乾兒が下帶一本で表の掃除をして居る、元締稼業の若い者など、いふ者は、寒の師走も夏の六月も表などを掃除する時に着物を着て働くやうな事は無い、素裸體でやつて、其で暑い時に暑いなど、いはず、寒い時に寒いなど、泣言一ついつた事がない、今若い者がセツセと表を掃除して居る所へ　吉『お早う』○『ヤア誰だと思つたら祐澤の吉松さんだな、暫らく遇はねえな』吉『ウム富松、暫らくだつた





な、元締は居るか』富『ウム元締は奥に居る』吉『俺が來て遇てえと一寸然いつて呉れ』富『オ、吉さん、坊さんになつて然んな口の利きやうをする奴があるか』吉『篦棒めえ、姿こそ坊主になつてるけれども腹まで坊主にやアならねえ、齋藤權太夫を斬つたから假に坊主になつて居るが、敵の立花金五郎に遇ひ次第還俗をする俺なんだ、言葉なんざア何んだつて構はねえ』富『成程其は然うだなア』奥へ若い者の富松が入つて來て　富『ヘエ元締』萬『何だ富松』富『吉松の祐澤坊主が來て、貴所に遇てえと云ひますが何う致しませう』萬『然うか、面白い奴だ、此方へ呼べ〳〵』富『ヘエ、、、サア祐澤さん、元締が遇うといふから昇んねえ』吉『大きに有難う……、ヘエ元締御機嫌克しうございます』萬『オ、何した祐澤坊主、大層啖呵を切るつてえが、坊主になつたら假令假の坊主でも少し柔順く見せろ』吉『どうも性來で然う溫順くは出來ません、實は元締今日些とお願ひがあつて來ました』萬『ウム、どんな事か知らねえが、賴まれちやア後へ引かねえ三河屋だ、どういふ話だ』吉『ヘエ譯をお話し申せば、斯々でございます』と兩國橋の明樽買の投身を助けた一件から、おたつ婆アの家へ行つて、荒磯權藏に表へ突出された一伍一什を物語つて　吉『元締どうかお前さんの顏で、之を一つ納めて親子一つ所に居られるやうに、してやつて頂だき度うございます』萬『ウム惡い奴だな其の荒磯といふ力士は』吉『ヘエ』萬『成程然うか』吉『然うかとばかり聞てちやア往けません、どうか話を附けてやつてお呉んなさい』萬『其やア吉松御兎を被むらう』吉『ヘエ』萬『御兎を被むるよ』吉『何故でございます』萬『三河屋萬藏は昔から女出入に口を利いたことがねえ

から斷わる」吉「オットット親分戯言いつちやアー往けません、何が女出入でございます、何所の娘が何所の息子を婿に取つた、所が其娘にどういふ情夫があつて面倒な話になつたから其を纏めてお呉んなさいとか、又アノ人と關係てちやア仕樣がねえから手を切つて貰ひたい、とでもいふんなら女出入だが、色男でも色女でもねえ、只だ五兩の金の爲に金貸に娘を取られ、親子の情でどうか呼戻して一つに居たいといふ所から話をしても纏まらず、世を果敢なんで死なうといふ事になつた、其が何で女出入でございます」萬「何でも彼でも乃公にやア女出入としきやア聞ねえから、どうも仕樣がねえ」吉「勝手にしろい、モウ些と耳の穴の開いた人間だと思つたら、三河屋萬藏は耄碌をしたのか此方の買被りか、物の解らねえ奴だなア」萬「吉、汝乃公の

耄碌を今氣が着いたのか、乃公は三年跡から耄碌をして居る」吉「エー穴端へ腰を掛けた奴は、仕樣のねえものだ」萬「穴端へ腰を掛けたなア三年前、今の所ぢやア穴の中へ入つて上から土を掛けられるのを待つて居るんだ」吉「呆れ返つたなア」萬「汝は乃公に呆れ返つたか知らねえが、乃公は自分に呆れ返つた」吉「どうでもしろイ」表へ飛び出した吉松、プップと腹を立つて吉「エー、本所てえ所は腹の立つ奴ばかり揃つてやがる、馬鹿に間抜の野郎ばかり居やアがる、此所は本所中の郷原町といふが、俺が讀やア本所中、郷原町だ、斯んな癪に障るとこはねえ」と云ひながら歸つて來る、話變つて三河屋萬藏の一の乾分野州間々田から出た間々田の建次といふのが見兼ねて建「元締、お前さん力士が怖いんでございますか、何故口を利いてお遣んなさらないんで、人を助けるのは結構だ、平常の氣にも似合はねえ、何で斷わんなすつた」萬「イヤ知つてる、知つてるが、少し乃公に考へがあるんでな」建「考へつてなんですえ」萬「此間手前に乃公が養子にならねえかと話をした時に、手前乃公に斷わつたらう」建「ヘエ」萬「私は未熟者でもあり、且は野州に居た時分に、盆の上の間違ひで人を二人殺しました、萬一私の身體に繩でも附いたら、貴所に申譯が無えから、御斷りを致しますと斯いつたらう」建「ヘエ」萬「其所で乃公が他に養子をしなけりやアならねえ」建「ヘエ」萬「アヽいふ工合に乃公がいふと、吉松の奴が表へ出て、廣德寺へは歸る氣遣けへねえ、と云つておたつ婆アなどゝいふ女を對手にはしねえ、荒磯權藏といふ力士を對手に喧嘩をして、師匠の稻妻雷五郎といふ横綱相撲へ、汝の弟子だからと云つて喧嘩を賣掛ければ吉松が大

きなものになる」建「ヘエ」萬「其の大きな喧嘩になつた所へ俺が飛んで出、てマア待つて呉れろと間へ這入つて、横綱を對手に喧嘩をして、お辰婆アから女を引取り、金の證文も只貰つた上、荒磯といふ力士から詫り證文を取つて、吉松を男にしてやる」建「成程」萬「ソコで還俗をさせて否應云はせず俺の養子にして、奴の以前の鼻の敵、立花金五郎の居所が分つたら、年は老つても三河屋萬藏腕に覺えの長脇差、助太刀をして見事敵を討してやらうと思ふ、建次、其の時にやア汝も手傳つて、敵討をさしてやつて呉れ、立花金五郎などゝいふ、那アいふ奴を長く生して置くと此の世の中の妨げだ、さういふ者を退治るのも此方等の勤めの一ッだ」建「成程、さういふお前さんに考えのある事を知らねえで、餘計な事を云つて恐れ入りました」此方は吉松表へ飛出すと、プンプン腹を立て、アゝ口惜いなア、此の儘廣德寺へ歸つたら和尚さんに、ソレ見ろと云はれるだらう、忌々しくつてならねえが仕方がねえ……と吾妻橋を渡つて淺草雷門のゴタ〳〵して居る所へ出て來た吉松、どうも白面ぢやア歸れねえ、酒を飲つて歸つてやらうと、衣を圓めて懷中へ突込み珠數を耳へ引掛けて、田毎庵といふ蕎麥屋へやつて來て 吉「ハイ今日は」男「入つしやいまし、お掛けなさいまし、お誂へは盛でございますかかけでございますか」吉「天麩羅の拔きで熱い酒を一本附けて呉れ」男「オヤ〳〵御出家樣のやうでございますが、腥物を食べたり、お酒を飲んだり……」吉「大きにお世話だ、間違つて寺社奉行の手に掛つて、日本橋へ曝されても俺が曝されるんだ、汝達に迷惑は掛けねえ、修行の足りねえ坊主は腥物を食つたり酒を飲んだりしちやア往けねえといふが、一休なんてえ坊さんは悟つたもんだ、酒も飲みやア魚も食たと云はア、愚圖愚圖云はねえで早く持て來い」男「ヘエ〳〵御免なさいまし」吉「早くして呉んねえよ」男「恐ろしいイナセナ坊さんだ……ヘエお待遠樣でございました」吉「アゝ有り難え〳〵……モウ一本附けて呉んな」男「ヘエ」吉「モウ一本呉んな」男「ヘエ」吉「天麩羅蕎麥をモウ一杯呉れ」男「ヘエ」空腹へ三本といふから六合飲んだ、天麩羅の拔きと蕎麥を二ッ食つて 吉「アゝ快い心持になつた、幾らだ……アゝさうか、ぢや此所へ置くよ、剩金は要らねえ」男「どうも有難う存じます」咬へ楊枝で表へ出たが、坊さんの醉たのと、女の醉たのと、肩上をして居る子僧の醉たのは餘まり外見宜いものではない、ブラ〳〵出て來て繪双紙屋の前へ立て 吉「アゝ綺麗だな、何だ、河中島の三枚續きの繪が出てやアがる、上杉輝虎入道謙信と武田大僧正信玄の戰さだ、謙信が信玄の陣へ切込んだ所だが、何方も坊さんだが豪えもんだ、何だ次の繪は、石山本願寺の戰爭か、好い戰だな、石山の方の軍師は鈴木飛驒守と云つて、之にやア織田方も大層骨が折れた、根來寺の小密茶といふ坊主が、福島正則、後藤又兵衞を對手に打合て居る、根來の小密茶といふ坊主は强いなア、ヤア辨慶が五條の橋で牛若と打合つてる、其の次は何だ水滸傳の花和尚魯智深が海棠の文身を出して、五臺山文殊院の門前の仁王樣を叩ッ毀して居る、俺見たやうだ、坊主の癖に文身を繡つてやがる、待てよ、大きく云やア戰さだ、小さく云やア喧嘩だ、何も坊主だからと云つて、圓くばかり納めるもんぢやアねえ、大の蟲を助けるにやア小の蟲を殺すとお釋迦も仰しやつた、一殺多生といふ

事がある、之ア一番還俗をして空樽買の親子を助けてやらう、ダガお辰婆アや荒磯權藏を對手にしても滿らねえ、荒磯の親方の稻妻雷五郎は天下の横綱だ、之を一番對手にしてやらう、何の爲に劍術や柔術を習つたんだ、繪双紙屋、好い繪を出しといて呉れた、モウ坊主は止めだ』といふと數珠をブツリ切つて、バク〳〵ッと數珠子玉を繪双紙屋へ投り込んだから、繪双紙屋では驚ろいた。

## （第十一席）祐澤樽買の娘お榮を助ける事、吉松還俗して人入れ元締となる事

吉松ブッと腹を立て吾妻橋の眞中の處まで來ると、摺違つたのは大きな荷物を背負て吉原被りの男 ○『オウ誰だと思つたら祐澤坊主ぢやアねえか、吉松ぢやアねえか』吉『何を……オウ武藏屋の兄哥か、何所へ行た』半『今稼業に行て戻りだ、吉松、見りやア恐ろしく醉ぱらつて、坊主頭を振立て一人で理窟を云つて歩いてるぢやアねえか』吉『ウム、マア半次兄哥、聞いて呉んねえ、俺は腹が立て堪らねえんだ』半『又癇癪を起しやアがつたな』吉『殊に依たらお前の智慧を借てえことがあるんだ』半『何だ』吉『高利貸の婆アが正直者の老人を酷い目に遇はして、其の中に一人力士が這入つてるんだ』半『成程、兎に角往來ぢやア話が出來ねえ、俺の家へ來ねえか』ぢやアさうしよう』途中別段にお話もなく、田町二丁目の武藏屋半次の宅へ參りました、半次は相變らず獨身者、





燈火を點け湯を沸し、布團を敷て向ふ前、半『吉どうしたんだ』吉『マア聞いて呉んねえ、昨夜和尚の用で相生町へ行て、一杯飲んで歸つて來たのが、さうよ夜の九ッ頃だつたらうか、兩國橋を通り掛ると身を投げようとする老人がある、其奴を俺が助けたんだ』半『ウム、其ア宜い事をした』吉『聞いて見ると之が松坂町二丁目の空樽買の佐助さんといふ人だ、お榮といふ娘があつて、三年後に内儀さんが死んで金に困つた時に、横網に金貸しのお辰婆アといふのがあるんだ』半『ウム知つて居る』吉『お前知つてるか』半『知つてるが、俺の話は後でするから、お前の話をしちまいねえ』ソコで吉松が之々斯々と前件申上げた通りの筋を細かに話をいたし 吉『サア此な非道な奴を生して置たら此先何んなに難澁をする者があるか知れねえから、珠數を切て還俗をし金貸のお辰婆アを酷い目に遇はして、荒磯權藏といふ太え力士を驚ろかしてやらうと思つて其から先刻吾妻橋へ掛つて來た時にお前に出會した譯だ就ちやア兄哥、お前何か好い工夫はなからうか』半『ウムさうか實は俺がお辰婆アを知つてるといふ譯は、お前も知る通り俺は表向き糶呉服をして、呉服にしろ解き物にしろ持て行くと、どうせ資本の出ねえ代物だから、普通より安いに極つてる、金貸しをする位えの婆アだから安物買ひだ、チヨイ〳〵種々な物を買やアがつて、其で心易くして居るんだ』吉『ウム』半『さうして錢を出す處を俺がチャーンと見て置て、其の晩密と忍び込んで金を窃み出すんだ、晝間安い代物を買て、夜に金を盜まれるんだから、詰り高え物に附いて居る』吉『成程上にやア上のあるもんだな、餘程やつたか』半『三度ばかりやつた』吉『さうか』半『スルと四

度目に行つたら婆がア、半次さんお前の物を買ふと、其度びに盜賊が這入つて、延喜が惡いから今日は止すと云やアがつた、此時は流石に俺も氣が差た、兎に角俺が行て樣子を見て來るから」と吉松を待たして置て半次が女の氣に入るやうな物を五六反持つて出て行きましたが、暫らく經て歸つて來た　半「今歸つて來た」吉「ウム兄哥御苦勞だつた、何うだつたな樣子は」半「ウム、宜い事を聞いて來た」吉「何だ」半「下谷西町の、筑後柳川の城主立花左近將監のお留守居市川藤左衞門といふ人が、お榮といふ娘を見て大變氣に入て、百兩といふ金を出して自分の妾にするといふ話が屆いたんだ」吉「ヘエー、酷い事をしやアがる」半「ソコで明日改めて荒磯權藏とお辰婆アが附いて、お榮を駕籠へ乘つけて下谷の大茂へ連れて行くんだ」吉「ウム、松源の傍の大茂か」半「さうだ那の大茂へ行つてお榮を渡して、百兩の金を市川藤左衞門から受取るといふ事になつて居る」吉「成程」半「其に就て持てつた着物が丁度宜いといふんで、持てつたゞけ賣つて來た」吉「其奴ア旨えことをした」半「明日の朝、四ッに家を出るんだといふことだ」吉「成程其處で、どうしような」半「吉松、汝之から空樽買の佐助さんの處へ出掛けて行つて、此處に金が二兩あるから之を持てつて、モウ一晩經つと納まりが附くんだから、長屋の衆に是で一杯飲んでどうか佐助さんが表へ出ねえように家へ置て、娘の歸るまで番をして居て呉れと長屋の者に賴んで來ねえ」吉「ウム、然んなことは譯アねえ其から明日の朝汝と俺と家を出て、汝は途中で待伏せて、其の習つた柔術で、お辰婆アを投り出し荒磯權藏といふ力士に當身でも呉れて、娘を引浚つて了ひねえ、さうして佐





助さんの處へ屆けてやれ」吉「ウム、兄哥お前はどうする」半「俺はお辰婆アの家へ行て那んな奴だから留守番を置く氣遣えねえピッタリ締て出掛けるだらうが若し居た所で矢ッ張當て身を食はせて目を眩させて了ふが、マア大概留守番は居なからうと思ふ、中へ這入つて合鍵は俺れの手にあるから、簞笥の抽斗を檢めて、證文を探し出して片ッ端から皆な踏裂いて了ふ、着物なんぞが澤山あつたら、持出すなア面倒だから匕口を持てつて、ズブリ〳〵上から突通して、其上から油を打掛けてやるから着物は皆な着られなくなつちまふ、有金は無論引浚つて來る」吉「成程」半「どうだ、娘は表で浚はれ、家へ歸れば金や證文は失なつちまひ、着物は皆な着られねえやうになつて居たら、大概驚くだらう」吉「成程、此奴ア旨え考えだ」半「さうして稻妻雷五郎の所へ行て、弟子の戒めが附かねえやうな意氣地なし、其でも天下の横綱かと喧嘩を吹掛けるんだ」吉「ウム分つた其ぢやアさうしよう」二兩の金を半次から受取て吉松、松坂町二丁目へ來て長屋の者に賴むと、長屋の者も快よく承知をいたし、佐助は涙を流して喜こぶ、其の夜が明て翌日の四ッ少し前、二人は横網へ來て、遠くに離れてお辰婆アの家の樣子を見て居ると、辻駕籠が一挺來て、程なく力士とお辰婆アが出る、お榮は涙を拭きながら駕籠に乘り、此駕籠が上る、途端にお辰婆アが戸締りをして錠をピーンと下した　半「ソレ留守番はなからう、昨夜話した通りにやんねえ」吉「承知した」といふ内に駕籠が此方を指して來たから、二人は路次へ這入つて小隱れをして居る内に兩國橋の方へ行きました　吉「其ぢやア兄哥、俺は兩國の橋の眞中で喧嘩をするから……」半「宜し…」

とお旦那半次は直ぐにお辰婆アの處へやつて來て、裏口を密と開けて中へ這入り、逐々證文を探し出し、ビリ〳〵破つて、火鉢に火種が少し殘つて居るから、臺所へ行つて附木を持出し火鉢の中で證文をボーッと燃して了つた、簞笥の抽斗を開け、行燈の中の油を出して上から流し、懷中から匕首を出して上からズブリと〳〵突徹して了ひ、佛壇の下に二三十兩の金があつたのを取出して懷中へ入れ、ピッタリ裏口を締めて半次は、其の儘田町二丁目へ歸つて來て、吉松の歸りを待つて居る、話變つて吉松は、兩國橋へ先廻りをして待て居ると 辰『駕籠屋さん急いでお呉れよ』とお辰婆アと荒磯が附いてドンドン急いでやつて來た、處へバラ〳〵ッと飛で來た吉松の祐澤吉『ヤイ駕籠屋、待たねえかい』ポーンと駕籠の棒端を突いた、不意に突かれて駕籠屋は、ヨロ〳〵と跡へ蹌けて、ドーンと駕籠を落した駕籠屋二人が ○『エー何をする

乞食坊主』と言ひながら左右から打て掛るを、エイッと云つて當身を呉れたから、二人一遍に目を眩して了ふ、辰『オヤッ此の坊主は昨日來た坊主だよ、何をしやがる』と女だてらに武者振着いて來るお辰婆アを、足を上げてボーンと脾腹を蹴つた、ウーンといふと之も仰向け樣に引繰返る、途端に附け髷と見えて丸髷が取れた奴を、飛で來た赤犬が髷を咬えて、駒止橋の所まで飛で行つたが、ポンと投り出して犬『どうも婆アのは往けねえ』粋な犬があるものだ荒磯權藏 權『何をするッ』と拳を固めて打て掛つた奴を、體を捻つて後を見せ、利手を取てグイと擔ぎ橋の欄干の所へ持て來て、ヒョイと腰を捻つたから荒磯權藏、川の中へドブーンと投り込まれた『ヤア身投げだ〳〵』生れは越後の荒磯で、水に覺えのある權藏、命に別條はない、ザブ〳〵泳いで居る内に、此方は吉松、

直ぐに其から本所相生町二丁目の稲妻雷五郎の家へやつて來て　吉「ヘエ御免下さいまし」取的が出て　○「ヤアお出でなさい、何御用で……」吉「稲妻といふお關取はお在かね」今用達しに行うしとた稲妻雷五郎　雷「イヤ野郎共、取次ぐには及ばねえ、丁度出掛けねえ内で宜かつた」と黒の羽織にお太刀を極め　雷「ヤア坊さん、何か用かね」吉「ヤアお關取用があるから來たんだ、汝は稲妻雷五郎といふ力士か、其處へ座れ」稲妻雷五郎位ゐのお關取もカッとした　雷「洒落臭えことをいふな、此の坊主、賣僧め、今一遍云つて見ろ、何の事だ人を捉めえやがつてヤア力士かとは」吉「ヤア坊さんとは何だ、坊主は云はなくつても分つてる、横綱も横網もあるものか」雷「何を此の野郎、汝は狂人か」吉「狂人でも何でもねえ、下谷廣徳寺の日桂和尚の弟子で、祐澤といふんだ、本所松坂町の空樽買の佐助といふ爺さんが、お辰婆アといふ金貸から金を五兩借りた處、利に利を積んだといつて娘まで卷上げやがつて、五十幾らといふ證文に書直し、娘に前尻を賣らせて、其の佐助といふ爺さんが、一昨日の晩身を投げようとしたのを俺が助けて、昨日の朝俺が掛合に行たら汝の弟子の荒磯權藏といふお辰婆アの色男が、あらう事があるまい事が俺を往來中へ摘み出しやアがつて、疳に障つて堪らねえから、今兩國橋の上から荒磯の奴を川の中へ投り込んでやつた、水を食つて死だらうと思つたら、生憎泳を知つてやがるんで、命に別條はねえやうだが、死人の咽喉を括るやうな眞似をしやがる野郎、已れの弟子として、其の戒めも附かねえで天下の横綱もねえものだ、サア汝が對手だ、表へ出ろ、身に寸鐵もねえけれども、伊達に覺えた劍術ぢや





アねえ、汝の腰に差して居る其の脇差を引こ拔いて、汝が土手つ腹へ風穴を明けて呉れるから、さう思へ」○「エー喧ましいやい」と稲妻の弟子が五六人立上るを、何をしやがると足を上げて、先へ進んで一人の取的の隱囊の邊りを、ウンと蹴たから、キャッと云つて打倒れて目を眩した、味をやるなと大勢が、一時にドッと打て掛らうとする奴を、流石は横綱稲妻雷五郎　雷「ヤアコレコレ野郎共、其の人を然んな眞似をしちやア濟まねえ、俺に少し惡い所がある、俺の弟子の惡いのは、俺が詫言をしなけりやアならねえ、逸まつた事をしちやアならねえぞ」○「ヘエ左樣でございますか……」萬「ハイ今日は……」雷「オウ、之れは三河屋の親分さんでございますか……」萬「ハイ三河屋萬藏ですよ、吉や……」吉「オウ、元締」萬「イヤ荒磯の亂暴は何所までも俺が知て居る、何にも云ふにやア及ばねえから、俺に任せろ」吉「エーお任せ申しします、元々お前さんに話を附けて貰はうと思つた位だから」萬「モシ關取、何にも云はねえで私に任せてお呉んなさい、元を云へばお前さんの弟子が惡いんだから、どうか爰は吉の顏を立つてやつて貰ひてえ」雷「ハイ之は吉といふ坊さんでございますか」萬「イヤ之は祐天吉松と云ふ者だが、仔細あつて水戸の御指南番齋藤權太夫といふ人を殺した、御家老武田伊賀守樣が扱つて下すつて廣德寺の和尚に賴み、假に出家になつたんだ」雷「イヤさうでございますか、何か聞けば私の弟子の荒磯が惡い事をした樣子、今荒磯を呼びまして能く話をいたしますから、マア此方へお昇んなさいまし」萬「ちやア御免なさいよ」と上へ昇つた、所へ濡しよぼたれて荒磯權藏が體裁惡げに歸つて

來たのを捉まへて、稻妻が話を聞くと全く權藏が惡い　雷『扨吉松さんとやら荒磯の惡いのは能く分りました、權藏に能く詫言をさせて、私が詫まり證文を一本書きますから、どうか其で勘辨して下さいまし、三河屋さん、貴所どうかお扱かひを願ひます』萬『イヤ無學者論に負ずと云つて、理窟の分らねえ奴を對手にしちやア急に話が纏まらねえが、流石は横綱さんだ、能く早く分つてお呉んなすつた、さう話せえ分りやア何詫り證文を貰はねえでも宜からうなア、吉松』吉『エー宜うございます、其れて差支へございません』雷『どうも有難うございます、就ては其の空樽買の佐助さんといふ人は、誠に氣の毒でなりませんから、どうか之を何かの足しにやつて下さいまし』と十兩の金を包んで出した　萬『ア、其は結構だ、之を稼業の資本にして、どうやら取附く事が出來たら佐助といふ爺さんも、横綱さんの恩を忘れめえ』と三河屋萬藏も喜こんで、祐澤を連れて稻妻の家を出て松坂町へ參り、佐助親子に遇つて右の金を渡してやつた、二人は涙に暮て三河屋萬藏と吉松に禮をいふ、誠に結構な善根を施こしました、萬『扨祐澤、モウ爰で還俗をしたらどうだ、さうして俺の養子にならねえか、水戸樣のお屋敷に奉公をして居た事もあるんだから、水戸の元締にしてやるがどうだ』吉『有難う存じます、モウ大概餘炎も冷めた時分、水戸のお屋敷へ出入も出來るやうになつたら、さうしてお貰ひ申しやア結構でございます、けれども若し貴所の養子に私がなつたら、他の身内が承知しますめえ』萬『ナニ構ふものか、俺の子分で間々田の健次といふ此の男にさへ話をすりやア宜いんだから』吉『さうでございますか、ぢやア仰しやる通り貴所の





子になりませうが、夫れについてお斷り申して置かなければならない事がある、私の元の舅本郷一丁目の加賀屋七兵衞、わたしを養子に持つた爲めに殺された上三萬兩の身上は燒かれて了ひ、離緣をした女房のおぬひ、忰の七松は手振編笠、今は行衞知れずになつて居ます、勿論おぬひの行衞が知れた處で再び夫婦にならうといふ考へはないが、舅を殺して家へ火を放けた奴は立花金五郎、此奴を見附け次第舅の敵身代の仇、どうしても討たなければならねえんでございます、其の時貴所と親子になつて居て、然んな事はさせられねえと云はれると大きに困ります』萬『イヤさういふ事は決して云はねえ、其の時には俺も心持好く敵を討たせてやらう、手に餘つたら助太刀もしてやらう、年を老つても三河屋萬藏、腕に年は老らせねえ、尤も其の時親子になつ居て都合の惡い事がありやア緣を切てもいゝ、そうして天晴れ仇討を遂げ、上への言ひ譯も立た曉きは又改めて町人別に入れて、眞正に養子養父といふ事にならう』吉『有り難うございます、どうぞお願ひ申しますが、兎に角、廣德寺の和尚に話しをして』、と其れから廣德寺へ歸つて來て、日桂和尚に右の次第を話すと、和尚も喜こんで武田伊賀、四ノ宮隼人の兩家へ屆け、八方十方納まりが附いて、愈よ還俗をして元の吉松、三河屋の養子になつて若元締、若親分と身内の者に崇められるやうになりましたが、一寸頭の毛の延びる間は餘り外へも出られない、軈て一年ばかり相經ちますと土臺が怜悧者だから今迄とはガラリ樣子も變り水戸樣へ出入をして、之までの樣に戯けた事も云はず神妙に致して居りますから三河屋の若元締〳〵と云はれて、大層評判が宜い、或

時三河屋萬藏一子分の健次に向つて　萬『扨健次や』健『へエ』萬『マア俺も好い養子をして仕合せだ』健『でございますね』萬『就てはどうか女房を一人持たせやうと思ふんだが』健『へエ、私もさう思つて居ます』萬『併しどうも帶に短し襷に長しで好い加減のがねえなア』萬『元締眞實でございますねえ、此方で宜いと思へば先方で往かず、先方で何とかいふ奴は此方の氣に入らねえ、兎角緣組てえものは難かしいもんですね』萬『さうよ、どうかマア宜さそうな女を見附て呉れ』健『宜うございます』と親分子分が心掛けて居る內に、圖らずも爰に吉松の女房になる女が出來た、緣は異なものとやら申しまして、吉松が親の敵討の助太刀をしてやつたのが緣となつて、爰に夫婦になる

やうな事に相成りました。

## （第十二席）　稻毛屋おげん仇討の事、並におげん吉松の女房になる事

淺草田町二丁目と云ふ所に稻毛屋六兵衞と云ふ駕籠屋がございます、娘をおげんと云つて近所評判の美人、親父の六兵衞は稼業柄に似合ぬ堅氣で、阿母が御屋敷奉公をした事がある處から、娘にも行儀作法を覺えさして置きたいと云ふので、傳手を求めて雲州島根郡松江の城主十八萬六千石松平出羽守樣御屋敷へ侍女奉公に出しました、然るに此の松平出羽守樣が隨分妙な事を御好みなすつたもので、繡身師を二人もお抱へ入れになりまして、召仕の婦人の身體へ文身をさせ、其を樂しみと遊ばしますので、御家中の娘、侍女など皆之を迷惑に思つて居りますが、主命として已を得ず涙を呑んで文身を致します、其をおげんが擢んで丶殿樣へ御意見を致しました、其の膽力に出羽守樣大層御感心遊ばし、おげんをば重くお用ひになり、家中の娘達、後から參つた侍女など、おげんの御蔭で文身をせずに濟んだ者は皆喜んで居ります、其の中に阿母が不圖した風邪が原因で枕も上らぬ大病となり、看病にも差支へるので、親父の所から手紙を遣され、早々御暇を頂いて田町の宅へ戻つて參りました、阿母はおげんの歸つて來たのを見て嬉しく看護をされて居りましたが、壽命と見え到頭歸らぬ旅に赴むいて終ひました、泣々野邊の送りを濟ませましたが、其ぎり御屋敷へは上らず、親父の世話を致して居る、どんな方でも夫婦の中片方亡くなる

と殘つた方が甚く力を落して、耄碌をするか、氣が荒々しくなる者でございます、六兵衞はモウ年を老つて居りますから、女房に先立たれ力を落すと共に、大層頑固になりまして、家の若い者などに無理な小言を云つたりなど致します、固より部屋から部屋へ飛んで歩く若い者だから、少し小言でも云へば直きに飛んで行つて終ふ、其を加減なく口嚴ましく云ふから、おげんが心配をして、蔭に廻つて若い者に げん『定めし腹も立たうが、阿父さんは阿母さんが死んだ後氣も短かくなり、どうも少し耄碌をしたと思ふので、無理な事でも逆らはずに親父さんの云ふ事をハイハイと云つて居てお呉れ、親父さんの惡い所は私が代つて御詫をする、サア皆な今日は之で一ぱい呑んでお呉れ』と若い者が働いて歸つて來ると、おげんが酒の一ぱいも飲ませ、氣を着けるやうにするから。『アヽおげんさんは親孝行だ、感心なものだ、屋敷奉公をした者は折目切目が正しいや、那んなに此方等に氣兼をして賴むから、老人を對手にグヅ〳〵云ふのは野暮だ、何でも親方の云ふ事を聞かうぢやアねえか』と親父が幾ら無理な小言を云ひしても、娘に免じて若い者がハイ〳〵と云つて居るから、親父も段々柔しくなつて參りました、勿論若い者の養ひやうで老人は力附きます、老松が朽ち掛つた處へ若松を植ゑると、其の若松の勢ひで老松が又段々盛んになつて參ります、凡そ人の勤めとして若い者が老人を大切にするのは當然でございますが、近處では稻毛屋の孝行娘、怜悧娘、六兵衞さんは僥倖だと賞讃す、然う云ふ工合だから自然繁昌して、外の駕籠屋の宿から見ると大層稻毛屋は盛つて居ります、時は弘化元年正月十五日の事、親父





の六兵衞爐端に丸坐を搔いて、脂下りに煙草を喫んで居りましたが　六『オヽおげんや』臺所で汚物を洗つて居りましたおげん、げん『親父さん何んですえ』六『お前何をして居るんだ』げん『アヽ若い衆の御飯を食べた汚れ物を洗つて居るのでございます』六『打捨つて置け〳〵汝等の食つた膳椀を突放して置て、親方の娘に洗はしたら、彼奴等が罰が當る、打捨つとけ〳〵』おげんが之を聞いて　げん『夫は阿父さん往けないよ、皆な牛馬の眞似をして、駕籠を擔いで飛んで歩く此の大勢が働いて呉れるのでお父さんも私も世の中を樂に送つて居るんだらう、吉原に女郎買にでも行つて、朝歸つて來て御飯を食べ、其の儘御膳を投り出して、寢てゞも終つたものならば、片付けてもやりアしないが、御飯を食べる、片付ける間もなく仕事に出て行くんだから、洗つて置いて歸つて來たらサア〳〵疲勞れたらう、御晝の御飯をお上りよと、綺麗な御膳を出してやつたら、親父さん皆んなの心持ちはどんなだらう』六『ウム成程、お前のいふ通りだ、是ア乃公が惡かつた、けれどもマア夫は後にして今茶を入れるからお前も喫みねえな』げん『有難うございますが、モウ少しだから鳥渡片付けてから緩くりお茶を頂だきますよ』六『アヽさうか、夫ぢやアさうしろ……、成程世間の人が賞めて呉れるが、我子ながら彼奴ア怜悧だ、有難え〳〵、アンナ氣の柔しい娘を持たのは乃公の仕合せだ』と親父はニコ〳〵笑ひながら茶を入れて喫んで居る處へ、雪駄の裏金の音をさして一人の侍が入つて來ました、六兵衞が其の樣子を見ると、年頃四十二三、赤ら顏のデップリ肥つた、身の丈五尺四五寸もある立派の武士で、頭は元結を五六本卷いて大髻、黑龍紋

の羽織に龍紋の衣類、唐出八丈の下着、丹後平の袴を着け、赤銅造りの細身の大小を差し、日動履の雪駄を穿いて居ります　侍「免せよ……」少し酩酊いたして居るやうでございます、六「へエ入らつしやいまし御武家様何ぞ御用でございますか」侍「アノ此方はな、虎の門相良遠江守の家來であるが、芝虎の門まで駕籠を一挺頼みたい」六「ア、左様でございますか、御武家様有難う存じますが、只今若い者が皆出拂つて居りませんので、何うでございませう、富士横丁の武蔵屋といふ駕籠屋がございますから、其處へ行つて、確かりした者を借りて參りますから、少々お待ちを願ひたいものでございます」侍「ア、宜いとも〳〵待つて居るぞ、イヤモウ昨夜は朋友二三人に誘はれて心ならずも吉原へ參り、今朝まで飲續けて充分酩酊いたして、漸やく只今大門を出て參つた今日は非番であるから、急ぐには及ばん、緩くりで宜い」六「どうも有難う存じます、マア此方へお入り遊ばして、お茶を一つ召上りませ」侍「イヤ茶も入らん、煙草も喫みたくない、少々酩酊いたして居るから軒口に立つて風に中つて醉を醒して居る」六「左様でございますか、オイ〳〵おげんや」げん「ハイ」六「お前聞いて居たらうが、お武家のお客様だから、武蔵屋へ行つて確かりした若い者を賴んで來て呉れ」げん「ハイ、宜しうございます、お武家さん、少々お待ちを願ひます、只今直ぐ呼んで參りますから」と履き古したる草履を突掛け、バタ〳〵駈けて參りました侍「爺々」六「へエ」侍「能い娘ぢやな」六「へ、どういたしまして」侍「幾歳ぢや」六「二十一でございます」侍「ハア二十一、男欲しやの年頃でありながら、姿にも構はず、裳を高く端折り上げ、切れた草履を





突掛けて、駈けて參るはどうも剛い者だな、紅白粉を付け、衣裳を飾つて美しく見えるのは眞正の美いのではない、作らず飾らずして美しく見える、彼が眞正の美人ぢやな、爺、お前の娘か」六「へエ左様でございます」侍「ハア親に似ぬ子は鬼ッ子といふが、お前には何處も似て居らんな」六「ハイ、死んだ家内に能く似て居りまするが、私には些とも似て居りません」侍「ハア、シテ見ると死んだ家内といふのは美しかつたと見えるな、マア〳〵お前に似んで結構だ」六「どうも恐れ入ります、自分を惡くいはれても、娘を賞められて忌な心持ちのする者ではない、ニコ〳〵して居る處へ　げん「アノお父さん行つて來ましたよ」六「ア、御苦勞〳〵どうした」げん「今直ぐ來ます」六「さうか、誰が來る」げん「佐倉の熊虎に籾川の伊兵衛の二人が來ますよ」六「ア、さうか、彼の二人は中々腕節が確かだ、且那様が待遠様でございます、只今達者の若者が參ります」侍「ア、左様か……」六「おげん」げん「ハイ」六「仕様がねえなまだ來ねえぢやアねえか、モウ一度行つて見て來ねえ」げん「どうしたんでせうね、ぢやアモウ一度行つて來ませう」と親の言葉を背かずおげんは再び駈出して參りました　侍「イヤどうも忙しい思ひをさして氣の毒ぢやな」六「どうもお待せ申して濟ません、マア且那様此方へお入んなすつて、お茶を一つ召上れ」侍「ア、然うか」といつて侍は閾を跨いで入つて參りました、此方は駕籠屋の親父の六兵衛、駕籠の棒が棚の上に載せてありますから、二人の若い者が來たら直ぐに舁ぎ出させるやうに支度をしてやらうと、其の棚の棒を下す途端に過つて手を放すとズドンと逆に落ちて來た奴が彼の侍の眉間へバッと當つた、アッと

いつて後へ退つたがモウ間に合はない、汐時と見えてダラ〳〵と血が流れました、稲毛屋六兵衞大地に兩手を仕いて　六『アヽモシお武家樣、飛んだことをいたしました、どうぞ御勘辨を願ひます』醉つて居るから堪らない、彼の武士ムラ〳〵として　侍『コレ、武士が面部へ傷を付けられて奉公が出來ると思ふか、無禮者めと』拔打ざまに、兩手を仕いて大地にひれ伏し詫て居る稲毛屋六兵衞の肩先から乳の下掛けて斬り下げた、キャツと一聲血煙と共にバツタリ前へのめる處を足を掛けてハラリと白髮首を打ち落し侍『イヤ町役人は居らんか、當家の主人六兵衞といふもの、此方へ無禮をいたしたに依つて討果した、コレ此の通り眉間を見ろ』と血刀を提げて稲毛屋の前へ突立つて怒鳴つたが、町役人は危險だから田町二丁目の自身番へ引込んで居て

誰も出て來ない、軈て武家は右の血刀を提げ、自身番の前へやつて參りましてガラッと障子を明けた町役人は眞蒼になつて　役『ヘエ入らつしやいまし』侍『稲毛屋六兵衞といふ駕籠屋の主人が此方へ對し無禮をいたしたに依つて、無禮討にいたした、事面倒になると往かんから其方へ記して置け』役『委細承知いたしました』腹の內で箆棒め、町內へ犬殺しが來て、犬一疋殺されても面倒だ、人間を斬殺して置て事面倒にならねえで濟むものかと思つたが口へ出してはいへません、役『ヘエお武家樣は何方樣の御藩中で……』侍『自分は相良遠江守藩中物頭役を勤むる十合五太夫と申す者だ』役『ヘエ左樣でございますか』五『見ろ、此の通り眉間へ傷を付けた』血を拭つて刀をピタリ鞘に納め　五『申分あらば虎の門上屋敷へ言つて參れ』役『委細承知いたしました』此方はおげん、富士横丁の武藏屋へ二度目に駈けて來て　げん『伯父さん』武『オヽおげん坊又來たか』げん『アノ若い衆は……』武『行つたせ、モウ家へ着いた時分だ』げん『オヤさう、親父さんが氣が短かいので、早く〳〵といふものだから私は菊屋といふ餅菓子屋の裏を拔けて來たんで逢はなかつたと見えます』武『マア茶でも呑んで行きねえ』げん『有難うございますが又遲くなると阿父さんに叱られるから後で若い者が歸つて來たら遊びに來ますよ』武『ぢやアさうしな』げん『伯母さんに宜ろしく……』おげんは急いで歸る田町の通り熊虎に伊兵衞の二人が駈けて來てバツタリ出逢ひ　虎『オオおげんさん大變〳〵だ今親父さんが武士に斬られて、武士は自身番へ行つて威張つてるげん『エー然うかえ、マア其やア大變……』と子を失つた鬼子母神のやうになつて、バラ〳〵〳〵と駈け

出した 虎『ヤアおげんさん危ないから行くのは止しねえよ、武士に手向ひをして、怪我でもしちやアならねえから……』といふ聲を耳にも掛けず、家へ飛んで來る、見れば情けなや、親父の六兵衛は首と胴と生別れに相成つて居りまする、孝女おげんに於ては死骸へ取付き、げん『エーッ親父さん、マアお前は何んで斯んな目に逢ひなすつた、お前が死んで終つたら誰を對手に私は生て居られよう、追刻敵の首を持つて後追駈けて行くほどに、三途の川とやらいふ處で待つて居て下さい』親父の首を抱へて上へ駈け昇り、佛壇へ母の位牌と並べて飾り、南無阿彌陀佛〳〵〳〵と念佛を唱へ、頓て臺所にありました出刀庖丁を取るより、バラ〳〵バラと駈け出した、熊虎に伊兵衛 兩『ヤアおげんちやん危ねえッてことよ、然んな物を持つて』げん『エ、親の敵を討ちに行んだから、邪魔立てをしてお呉れでない』と自身番の前まで行つた出逢頭 げん『ヤアお前さんだね、今家の親父さんを殺しなすつたのは、女でこそあれ稲毛屋おげん、御武家だつて勘辨が出來ない、サア私も死ぬ代りにお前の命は貰つて行く』と一生懸命出刀庖丁を逆手に取つて突いて掛るをヒラリ〳〵と右左へ避けながら十合五太夫、酔が醒めて見ると、アノ飛んだことをした、殺さんでも宜かつたものを、酒の爲めに心を奪はれ益ないことをいたした』と考がへ着て、親孝行の娘返り討にすることも出來ない、身を避けながら 五『コレ町役人は居らんか、此方迷惑いたす、コレ町役人……』『笑かしやアがらア手前が短慮で斯んなことをして置きやアがつて迷惑するもねえもんだ勝手に迷惑をしろ』と町役人は構はない、往來の者は怖い物見たさに、周圍を取卷いて





ワイ〳〵いつて見て居ります 五『コレ誰か此女を留めなければ此方身分に拘はるから據ろない、之へ斬つて了ふぞ』と腰の物をズラリ引拔いて振り被つた、脅かす心算だが命を投出して居る女だから驚ろかない、五『コレ怪我をするぞ、怪我をしたらどうする』といふが命を投出したら世の中に怖いものは何にも無い、おげんは烈しく突掛つて來るので五太夫も仕方がない、應らつて居ります ○『オ、、だから田甫を通らうといふのを田町の方が道が好いからといふから此方へ來たら道は好いに違えねえが、何かあるぢやアねえか、山のやうな人だ』△『ア、敵討だといつてますせ』○『ナニ敵討……モシ一寸伺がひますが何でございます』○『ナニ稲毛屋六兵衛といふ駕籠屋の親父が是々斯々で殺されたんで娘のおげんといふのか仇討をするといつて出刀庖丁を振廻して居る、女でも屋敷奉公をしたゞけあつて、度胸は宜いが、何しろ對手は武士だから、長くやつて居たら返り討になるに違ひない、可愛想にどうか助けてやりたいものでございます』○『ヘエーさうですかえ、どうも有難うございます』といふのは三河屋萬藏の養子になつた祐天吉松と間々田の健次、『ナア健次、丁度先月々旬に家へ來て竹馬の友は皆な死んだが、お前と乃公ばかりは生殘つて居ると父さんと話をした那の稲毛屋の六兵衛さんぢやアねえか』健『ア、さうですねえ』吉『夫ぢやア乃公も滿更知らねえ中ぢやアねえ、其の娘が返り討になつちやア氣の毒だ見てやらうぢやアねえか』健『見てやりてえが前へ斯う折重つて、人が居ちやア入ることが出來ません』吉『ウム其處に井戸がある、其の井戸側へ乘かつて見よう、宜いか、陷こちるな』と麻裏を脱いクル〳〵と

手拭に包んで懐へ入れ、ドッコイショと井戸側へ乗かつたが　吉『ア、釣瓶竿が顔を突つきやアがつて可けねえ』二ツ三ツたぐり上げてビシリッ竿を折つてポカンカチャ〳〵〳〵と釣瓶を中へ投り込んで　吉『サア健次、お前も上んねえ』二人井戸側へ上つて　吉『帶を押へて居ろ、陷こちると往かねえから……』健『大丈夫』吉『ア、此所は能く見える、強えなアおげんッてえ娘は』健『美い女ですねえ』吉『武士め弱つてやアがる、けれどもなア健次、アノ武士はまだ眞正に力を出して居ねえ、今に何だせ面倒臭くなるとおげんを叩つ斬つて行つて終ふせ』健『可哀想ですねえ、兄哥お前さん四の宮先生から教はつた劍術、伊達に覺えた譯でもありますめえ、一番アノ武士へ手裡劍を打つて、娘を助けておやんなせえな』吉『さうよなア、斯ういふ時に役に立たせる武藝だ、知らねえ仲ぢアねえから、おげんに助太刀をしてやらう、お前石を拾つて呉れ』健『宜うがす』バッと井戸側から飛下りた健次、切石だの丸石だのを三ツ四ツ拾つて　健『サア兄哥、此の位あつたら宜いかね』吉『そんなには入らねえ一ッで澤山だ』健『兄哥、足を踏み外すと往かねえ押へようか』吉『大丈夫だ、待ちねえよ、今此方を向いた途端に叩き付けてやるから……まだおげんを斬る氣遣はねえ、應らつてるんだからアノ丈の高え藥鑵頭の爺め、邪魔な處に居やアがるな見當が違ふと汝の頭へ飛んで行くぞ……』と吉松が狙ひを付けて待つて居る中に、エ、面倒なと十合五太夫、全く斬る氣になつて、太刀を振被つた途端にヤッと吉松の投げた切石が、目と鼻の間へ打付かつたから十合五太夫、アッといふと仰向様に倒れて太刀を投げ捨て、終まつた、おげんは得たりと





飛び込んで、鳩尾の邊りへブッーリ、出刀庖丁を突き貫したおげん、ホッと息を吐いて之で敵が討てひかと思ふと、流石やさしい女のこと氣の張弓の弦切れてウンと其處へ氣絶をした、見物は手に汗握つて見て居たが、武士に石を投げ付けたのは誰だか分らない、係り合になつてはならないと思ふから俄かにワッと東西へ散つて終まふ、吉松も健次もドン〳〵其の儘行つて終まつたから、宜い鹽梅に誰が打付けたといふことも分らずに終まひました、扨町役人がおげんを介抱いたし、町奉行へ訴へ奉行所から檢視の役人出張に及び段々取調べの上、相良遠紅守御上屋敷へ斯ういふ御藩士がございますかと問合せました處遠江守重役相談の上、當藩には疎匆で肩間へ傷を受け、それを怒つて町人を殺したり、また十九や二十の女子の爲め、出刀庖丁で胸を突かれて

相果てるやうな未熟者は居らんに依つて、其奴は當藩の名儀を騙つた者に相違ない、依つて死骸は町法に行つて然るべく、當家に於て一向構ひないといふ挨拶、十合五太夫の死骸は取捨て、おげんは親の敵を討つたとは申せ、私の仇討は天下の禁制、法を曲げる譯に行きませんが相手は武士、殊に太刀を携へ、此方は出刀庖丁を持つて之に當りましたことゆゑ、之を罰するといふ程のこともない、僅か十日の内町内預けといふことにいたし十日經ちまするとと、今度は親孝行の廉を以つて青差三貫文の御褒美を上から頂戴いたしました、扨火のない處から煙りは立ちません、其の節武士に石を投げたのは本所中の郷の三河屋萬藏の養子吉松といふ若元締であるといふ噂が世間へ立ちまして、夫がお上へ聞えましたが、敢て惡いことをした譯でないから別にお咎めもございません、おげんは親父の野邊の送りを濟ませ、百ケ日を過ると本所原町の三河屋へやつてまゐりました ○「元締」萬「何だ」○「エ、大元締にお目に掛りたいといつて、稲毛屋の娘のおげんさんが來ました」萬「ウムおげん坊が來たか、此方へ通せ〳〵」○「此方へお上んなさいまし」げん「ハイ有難う存じます」と品の宜い扮裝をして包みを持つて夫へまゐりまして げん「元締さん、御無沙汰いたして濟みません、親父が生前いろ〳〵お世話になりまして有難う存じました、又葬式の時は何や彼やお贈り下さいまして有難う存じました、何ともお禮の申上げようもございません」萬「イヤ何も屆きやアしねえ、又門の多い處を他人行儀に那んなことをしないでも宜いのに、嘸かし後は淋しからう、外に親類縁者もねえお前のことだ、お前の親父だア乃公は子供の時から朋友だ





つたから又何か思案に餘つたことがあつたら、俺の處へ相談に來るが宜い、智慧は貸してやるから……」げん「御親切の其のお言葉有難う存じます、就て伯父さん、今日上りましたのは外ではございませんが若元締の吉松さんに先達てのお禮に上りました、お羞かしうございますが、ホンのお禮の印、どうかお寢衣にでもなすつて下さいまし」と出したのは結城紬が三反 萬「イヤ夫は有難う、だが家の野郎に何の禮だ」げん「何の禮と仰しやらんでも、お聞き及びでもございませうが、私が親父の敵討の出來ましたのは、誰のお蔭といふことを知つて御禮に參りました、深い事をお尋ね下さいませんよう……」萬「ウム然うか、宜し、判つた〳〵オ、吉松」次の間から吉松が出て來て 吉「父さん何だ」萬「おげん坊が斯う〳〵云つて持つて來て呉れた、何にも言はずに貰つて置け」吉「之ア何だか知らねえが、おげんさん大きに有難う、丁度お前が敵討をする時に後ろの方で見て居たが、何處から飛んで行つた石が武士の顔へ打付つて倒れる處を、お前が乘し掛つて鳩尾を突いた時にやア恐しいやら嬉しいやら、見て居ても小氣味が宜かつた」げん「有難う存じます、其といふのも若元締貴所のお蔭と私は思つて居ります、親の敵を討つたといひながら、上のお情けで僅か十日の町預けで事濟みになり、其の上親孝行だといつて御褒美を頂きました、何たら有難いことでございせう」萬「マア〳〵宜かつた、女で敵討をしたり、親孝行の御褒美を頂だくなんてえことは、此の廣い世の中に何人と數へるほどはありやアしない、お前は眞實に萬人勝れの女だ」げん「どうも伯父さん畏れ入ります、モウ兩親はなし、他に身寄頼りのない私、どうぞ

此の上宜しくお願ひ申します』と話をして居る中におげんが吉松の方を、チヨイ〳〵見ては顔赤らめて居る、吉松も亦おげんを見て、何となく心ありげの樣子、其と悟つた三河屋萬藏 萬『フ、ン』吉『阿父さん何を笑つてるんだ』萬『マア宜いや、何でも無え』と其の場は別に何にもいはず、おげんが歸つた跡で 萬『さて吉松、汝を乃公の家へ養子に貰つたが、配偶せようといふ娘は家にねえ、何れ他から嫁を取り、夫婦養子の厄介になるんだが、就ちやア早くお前に女房を持たせやうと豫て心掛ちやア居るけれども、帶に短かし襷に長しで、どうも思ふやうな嫁も見當らなかつたが、どうだお前、アノ稻毛屋の孝行娘おげんを女房に持たねえか、汝さへ宜けりやア貰つてやるせ』吉『エー何でごせえます、其處のところはマア何で……』萬『何が何だか分らねえ、嫌なら嫌と判然いつて終へ』吉『ナニ嫌ぢやアねえ、父さん宜しくお願ひ申します』萬『さうか、宜し、其ぢやア早速話をしよう』ソコで三河屋の萬藏が、稻毛屋へ出て來ておげんに話をすると げん『私はモウ吉松さんと夫婦になれるといふことなら嬉しうございますが此の稻毛屋の家も私が立てなければならないゆゑ、どうか伯父さん三尺店でも稻毛屋の家を立てゝ下さいますか』萬『ア、夫は此の三河屋萬藏が必と立てゝやるから安心をしろ』げん『其では何分宜しくお願ひ申します』とおげんも喜こんで承知をして、早速話が纏まつて吉日を選み婚禮をいたし、誠に人の羨やむほどの良い夫婦が出來上りました、其の後彼是半歲ばかり話がなかつたが或る日三河屋萬藏が 萬『吉や』吉『ヘエ阿父さん何御用でございます』萬『外ぢやアねえが、大きくもねえ家に斯うして老人が一緒





に居るのもお前達が窮屈だらうと思つてるんだ』吉『阿父さん然んな他人行儀なことをお云ひなさんな』萬『マアよ、跡を聞きねえ……』吉『ヘエ』萬『實は彼方此方家を探して居た所が、淺草田原町に一軒氣に適つた家があるんだ、お前一寸一緒に行つて見て呉れねえか』吉『左樣ですかい、其ぢやア行て見ませう……』親子連れ立つて來て 吉『阿父さん成程是は良い家だねえ』萬『ウム、お前さへ宜りやア早速買つちまう』吉『エー宜うがすとも……』

## （第十三席） 吉松飛鳥山へ花見に行く事、並に忰七松に遇ふ事

ソコで持主も近所だから早速行て話をいたし、値段の所も折合て其の家を買ひ、造作廻りをスツカリ直して、改めて諸道具を買整のへ、店の若い者も半分分け、ソコで新三河屋といふ暖簾を掛けて、吉松夫婦が新世帶を持ち、小石川お屋形の出入元締になつて、夫婦代る〴〵原町の養父の所へ機嫌聞きに來る、今日と經ち明日と過ぎ、追々月日を送る中、益々吉松夫婦の仲は睦じくなりましたが、此頃吉松が博奕に凝て、どうも目が出ない、取られ續けで仕樣がない、丁度三月十五日、花見日和で大分朝から人が出て好い天氣だといふに、火鉢の前に安座を搔いて欝いで居る、其と見た女房のおげんが げん『ねえお前さん』吉『ウム』げん『何を茫然して居るのだねえ、今日は出掛ないのかい』吉『イヤモウ仕樣がねえ皆な取れちまつた』げん『惡いけれどもお前さんの三卷財布が出て居たから一寸見たらタツタ二兩しかない、二兩ぢやア成程何所へも行けまい、私が少

しばかりお金を入れて上げるから、遊んでお出でなさいな」吉「馬鹿を言ひねえ、何んなに困つたつて女房に金を借りて博奕を打ちに行くほど耄碌はしねえ」げん「水臭い事をお言ひでない、夫婦の仲で借りるも借りないもありやアしない、又勝たら下さいな」吉「イヤ女といふ者は金が大事だマア其方へ取つときねえ、俺が病煩ひをしたとか、人を助ける爲に困つてるとかいふ時なら、夫婦の仲で汝から出して貰ふのも當然だが、何も博奕をする爲に女房から金を貰つて行くにやア及ばねえ、無理な眞似をして負ると往かねえから」げん「其ぢやアお前さん氣晴しに、花見にでも行つてお出でな」吉「花見へ行くたつて懷中か淋しくつちやア面白かアねえ、男は闘を跨ぎやア七人の敵があるといふ、途中で藝人に遇つて、オヤ三河屋の若親分でございますか、とでも云はれて見ねえ、飯を食うとか、祝儀を遣るとかしなけりやアならねえ、幇間などゝ來ると、人の面を見りやア直ぐに取卷く氣になるんだからなア」げん「マア面の皮の厚い者だねえ、落語家なぞはどうだらう」吉「落語家もさうだ」げん「義太夫語りは」吉「義太夫語りもさうだ」げん「力士は」吉「相撲も天下の力士などといふけれども、裸體藝人と云つて、矢ッ張往けねえ」げん「講釈師はどうだらう」吉「さうよな、マア講釈師は先生といふ位ゐで、俺達に遇つても先方で御馳走をして祝儀を呉れる……」餘まりさうでもありますまい　げん「マア然んな事はどうでも宜いが、此處にお金が十兩あるから、是を持てぶらついてお出でなさいな」吉「ウム有難え、折角お前がさう云つて呉れるなら、其ぢやア行て來ようか」十二兩の金を懷中にして、吉松一本刀でブラリ表へ出たが、吉「ど





うも、淺草の奥山も只騒がしいばかりで面白くねえ、向島へ行かうかしら……何事ぞ花見る人の長刀、どうも何だ、土手で素ッ破抜でもするのを見ると、默つても居られねえ此方の性分、滿らねえ敵を儲けるのも厭だ、マア向島も止さう、上野は遊ぶ場所が狹くつて後水尾院樣の御勅額が懸つて居るお寺があるし、宮樣のお在なさる所、花見に行ても陰氣で往けねえ……ア、寧そ飛鳥山へ乘出して、土器投げでもして見よう、其の時分品川の御殿山、飛鳥山邊りに上器投げと云ふものがありまして、土器を買つて山から投げる、其の土器が風車のやうにグル〳〵廻りながら飛で行く、今でも京都の高尾などへ參りますと、紅葉の頃は盛んに土器投げをして居ります、之をやらうといふので、ブラ〳〵飛鳥山へやつて參りました、何しろ好い天氣だから人が出る、丁度今吉松が山へ登つて來ると、何を見たが突然駈出して行て、十五六の小僧の頭をポカリ毆つた吉「伯父さん何をするんだ」吉「何をするもねえもんだ、巫山戯やアがつて十人も十五人も掛つてタッタ一人の十二か十三の子供を毆りやアがつて、若し打ち所でも惡くつて怪我をするか、死にでもしたら汝どうする心算だ、見りやア九ッか十歳位の子供も交つてる、間違ひのあつた時然んな小さな子供が下手人になりやアしねえ、汝が一番年を成つてるから下手人にならなけりやアならねえ、宜い年をしやアがつて……」○「伯父さん然んな事をいふけれども、食ふと食はねえの境でやつてる稼業の喧嘩だ」吉「生意氣な事を云やアがるな、食ふと食はねえの稼業と云つて、何の稼業だ」○「伯父さん譯を能く聞かねえで人を打つて、隨分お前さんは半間だなア」吉「馬鹿にするな

い、大人を捉めえて半間だなんて……全體どうしたんだ」○「ナニ伯父さん、俺達は土器賣りなんだ、十三人土器賣がある所へ、今日、此の子供が土器を賣りに來たから、お前は初めてかと聞くと、初めてだといふから、初めてなら山番さんへ附屆けのお酒を上げて、其から皆なへ仲間金を出さなけりやアならないといふと、此の子が何を云やがる、山番さんへ附け屆けをしたり、仲間金を出せる位ゐなら、土器賣りなんぞはしない、巫山戯るなといふから、其ぢやア山から下りろといふんで、大勢で今引摺下さうとする時に、笊を引繰返して土器を打毀したんだ」吉「さうか、小僧泣くな」×「ヘエ有難う存じます」吉「郷に入ては郷に從へといふ事がある、汝が不意に來て然んな生意氣な事をいふのが惡い、斯うして皆な極つた稼業をして居る所へ這

入つて來りやア、仲間金も出さなけりやアならず、山番さんにも附け屆けをしなけりやアならねえ」×「其ア伯父さんさうだけれども私はお鳥目がないから、此の土器も借りて來たんだ、賣上げてから拂はうといふんだ……ダカラ却々仲間金や山番さんにお酒の代などを出す譯に往かねえんだ」吉「成程、ぢやア俺が拂つてやるから、泣くな」×「伯父さん濟みませんねえ、けれども山番さんへ附け屆けをして仲間金を伯父さんに出して頂いても土器を毀されちまつて、資本がないから、明日から賣りに來る事が出來ません」吉「其も俺が錢を遣るから宜い、心配するな」×「有難うございます」吉「オウ仲間金と云ふなア幾干だ」○「ヘエ皆なで十三人居ます其内へ百文入るんで」吉「一人前百文十三人で一貫三百か」○「一貫三百どうでも宜い」吉「酒落をいふな」○「十三人の中へ百文入れりや宜いんで」吉「さうか、山番さんへ附け屆けといふなアどうするんだ」○「お酒の切手を上げるんでございます」吉「酒の切手といふと五升とか三升とかいふのか」○「五升なんてやつて堪るもんぢやアありません、三合か五合の切手で」吉「ウム、大層な切手だな」○「ダカラ伯父さん、物價騰貴の今日、交際が張つて却々やりきれません」吉「長せた事を云やアがる、ぢやア山番さんに是で宜いやうにしてやれ、一分遣るから、汝達十三人の中へ一分、兩方で二分遣るから、どうにでもしろ、其の代り明日から此の子が來たら、仲好くしてやらなきやア往けねえせ」○「ウン伯父さん、大きに有難うございます、皆なお禮を云はねえか」△「ヤア伯父さん有難う、却々行屆いた伯父さんだ、今に賣出すせ」吉「生意氣な事をいふな、明日此の子が來たら泣しちやア往かねえせ」

○「ア、此の子が來たら、角店の方を讓つてやらア」吉「角店ッてえなア何所だ」○「アノ角の所の、一番好い寶場だ」吉「大變な所を讓つたな、サアア斯うしてやつたら宜からう」×「伯父さん有難う存じます」吉「泣くな〳〵、何時までも何だ、手を目の所へ當て居ねえで取んねえ……ア、好い子だけれども湯にも這入らねえと見えて、垢だらけの所へ泣いたもんだから、宛然猿の顏見たやうだ、此方へ來ねえ」櫻の暖簾の掛つて居る花見茶屋、眞鍮の磨き立てた甘酒の釜の脇の所へ種々の物を列べ立て、お婆さんが一人客待ち顏に立て居る、白粉臭え姐やの居る所にやア皆なお客が這入るが、婆さん一人ぢやアお客もねえ、此處へ寄てやらう　吉「ハイ御免よ」婆「入つしやいまし、まア親方、好い事をしてお上げなさいました、小僧さんや、能くお禮をお言ひよ」吉「ア、お婆さん、明日から又此の小僧が來たら、茶の一杯も飲ましてやつて呉れ」婆「ア、宜うございます、サアどうか此方へお掛け下さいまし……お茶をお飲んなさい」吉「ア、有難う」婆「アノ小僧さんや之で顏をお拭き、涙を流して外見ないぢやアないか」吉「ア、老人でなけりやア氣が附かねえ」婆「ナニ家にも此んな孫が幾人も居るもんでございますから」吉「ア、さうか綺麗に顏を拭きねえ……ア、綺麗になつた」×「伯父さんサッパリしました」吉「お茶を呑みねえ、どうだ甘酒を呑むか」×「伯父さん甘酒は大好きだ」吉「然んなら呑みねえ鰻の足の煮たのがあるが、食べるか」×「齒應へがあつて鰻は大好きだ」吉「ぢやア食ひねえ、壽司はどうだ」×「伯父さん、お壽司は一番好きだ」吉「茹玉子があるがどうだ」×「其ア一番好きだ」吉「嫌えの物はねえな、お婆さん、其の玉子を





食べさしてやつてお呉れ」婆「有難う存じます」大きなお皿の上へ、茹玉子が三十四五、盛つて崩黄の布が掛つて居る、其の布を左の手でサッと拂ひ上げると、彼の小僧が右と左の手へ一つづゝ取て、一ッを袂へ入れて、一ッの皮を剝きながらムシャ〳〵食べ初めた、脂下りに煙草を喫みながら見て居る吉松が　吉「ア、貧乏はしたくねえものだ、子供が卑しくなるなア、婆さん」婆「眞正でございますねえ」吉「小僧や」×「ハイ」吉「俺だから宜いが、他の伯父さんだと汝厭がられるぜ」×「ハイ」吉「玉子を食へと云つたら一ッづゝ沈着いて十でも二十でも食べろ兩方の手へ攝んで、一ッ袂へ入れて、一ッ食べ初めるなどゝいふ、然んなしみつたれた事をするな、人間は心だけの世を經ると云はア、之から然んな事をするなよ」食べ掛けた茹玉子を緣臺の上へ置て、一ッ袂から出して、お盆の上へ載せ、體裁惡さうに　×「伯父さん、どうも濟みません、何ぼ貴所が御馳走をして下さるからと云つて、然んなに食べては惡うございます、阿母さんが今日此の頃煩つて居て、枕も上らない始末で、苦いお藥を服ました跡で、口直しを食

べさせたいと思つても、何も買ふ事が出來ません、其故一ッ阿母さんの所へ土產に持て行つたら嘸喜ぶだらうと思つて一ッ袂へ入れました、どうか伯父さん惡かつたから勘辨して下さいまし」ック〳〵と顏を眺めて居た吉松が　吉「ア、さうか、なア婆さん、貧乏して居ても此んな子供を持た親は嘸喜ばしい事だらう、今日は陽氣な花見に來て、野暮に陰氣にされちまつた　阿父さんはねえのか」×「阿父さんもあつたけれども、モウ居ないんでございます」吉「ウム死んじまつたのか」×「阿母さんがいふには、死別れなら思ひ切れるけれども、生別れだから思ひ切れない、お前にモウ一遍遇はしてやりたいと云つて居ました」吉「ウム然うか、阿父さんは道樂をして行方知れずか」×「斯んな事は滅多に人に云ふなと阿母さんが云つたけれども、餘まり伯父さんが私を可愛がつて呉れるからお話しをするんで」吉「ウム」×「元私の阿母さんは、百萬石の加賀樣へ御出入をして居た本郷二丁目で三萬兩の身上だつた加賀屋七兵衞の娘でございます」ビックリ驚ろいた祐天吉松、扨は三歲の時に別れた我が子の七松であつたか、ヤア俺が親父だと云ひたいは山々だが、人目の多い花の山、殊には一旦捨てゝ出た者、今更自分から親子の名乘りも出來ず、堰き來る涙を瞼に留めて　吉「オ、然うか、本郷の加賀屋のお前は孫だつたか」七「伯父さん知つて居ますか」吉「ウム知らねえで何うするものか、俺も矢張り本郷よ」七「ア、然うでございますか、何でも阿母さんの話では、阿父さんが譯があつて家を出てから後に恰度阿母さんと私が親類へ泊りに行つた留守に、立花金五郎とかいふ盜賊が踏込んで祖父さん祖母さんを殺し、店の者も七八人切て家へ





火を放て燒ちまつたので、阿母さんと私は箸一本持たない乞食同樣になつちまつたんで……」吉「ウム、而して今何處に居る」七「下谷坂本の、三島神社の後に日除といふ所があります」吉「ウム、坂本から吉原へ行く道だ」七「いろは長屋のへの三番といふのを借りて居ますが、伯父さん餘まり宜い番號ぢやアないやうで……」吉「然うだなア」七「阿母さんが洗ぎ洗濯や針仕事をして、漸々生計を立つて居た所、此の頃患ひ附いて何うする事も出來ないので、家主さんが來て坊やお前遊んで居ては往けないから、飛鳥山へ行て土器を賣るが宜い、之だけ賣て來れば幾らか儲かるからと云はれて、今日初めて出て來たんでございます」吉「然うか、坊や何歲になつた」七「十二でございます」七「名前は」吉「七松といふんでございます」吉「ウム然うか、坊が夜中に起きて見た時に、お前掛けの伯父さんが阿母さんの枕許に座つて、何か話をして居た事がありやアしねえか」七「伯父さん、串戲いつちやア往ません、阿母さんは親父さんに別れてから男の猫でも膝へ戴けないといつてますせ、矢張り阿父さんに惚れてるんでせうねえ」吉「詰らねえ事をいふな、然んな事は誰にも云ふな」七「今伯父さんに話をしたッきり誰にもいやアしません」吉「ウム然うか、宜し解つた解つたモウ徐々出掛けよう……アノお婆さん、茄玉子を十ばかり呉んねえ」手拭へ包んでぶら下るやうにして　吉「之を阿母に持つてッてやるが宜い」七「伯父さん、斯んなに貰つても宜うございますか」吉「宜いとも、其から茲に金が十兩ある、之を持つてッてやんねえ」七「斯んなに……」吉「マア宜いから持つてきねえ、强情を張らずに……」吉「ハイ有難うございます、伯父さん名前は

何といふんで……」吉「名前なざア聞かねえでも宜い」七「其でも阿母さんが堅いから、名前も云はない人が斯んなに御金を呉れる譯がない、お前泥棒をして來たんだらうといはれると困ります、心配をさせると身體に障りますから、どうか伯父さん名前を聞かしてお呉んなさい、其でなければ私は此の御金は頂だけません」吉「ウム然うか、ちやア伯父さんが話すから忘れるなよ、湯島切通しの元家へ出入の疊屋の若い衆で今親ノ株になつた疊屋職人の松吉といふ者が呉れたといやア阿母に分らア」七「ヘエー疊屋の松吉、私の親父が吉松といふんださうだ、伯父さんが松吉ぢやア親父が鯱鉾立ちをしたやうな名前ですねえ」吉「馬鹿をいへ」七「親父さんは、好男子だつてえますよ、額の所に小さい黒子があるといふが、伯父さんにも此所に黒子がある……」吉「オイ後ろへ廻つて、帶を解かうとして何うするんだ」七「若しや脊中に累解脱の文物がありやアしないかと思つて……」吉「馬鹿アいへ、然んな物があるものか、止せ〳〵、オイお婆さん此所へ置くよ」婆「ハイ有難うございます、マア親方さん、お前さんはお若いのに情深い御方で、宜い事をしておやんなさいました」吉「どう致して、イヤ御喧ましう」婆「有難う存じます」吉「小僧や玉子を落すな、今の金を何うした」七「此の内懐ろへ入れました」吉「然うか落すな、下谷坂本まで一緒に行う」飛鳥山を降りてブラ〳〵歩き躾て坂本まで來た七「伯父さん此の横丁なんで……」吉「日除まで行かう……」七「伯父さん此裏の突當に便所がある、那を曲つて左り目の三軒目なんで、伯父さん寄つてお呉んなさいな」吉「イヤ寄らねえ又來る時もあるだらう」七「其ぢやア伯父さん左樣なら……」吉「ア、小





僧モウ一度顔を見せろ」七「ハイ」弗「阿母さんを、大事にしねえよ」七「ハイ有難うございます」パタ〳〵バタ〳〵、溝板の上を駈け出して行く、後ろ姿を見送つて居た吉松、家へ歸つて阿母に話をして金と玉子を出した時、扨は俺だと氣が着いて、子供を連れてアノおぬひに出て來られては面倒だと、道を急いで坂本の通りへ出ました。

## （第十四席）　吉松先妻の貧苦を知る事、並におげん身賣の事

斯て吉松小野照樣の前までやつて參りまして　吉「オ、駕籠屋、淺草の馬道までやつて呉んねえ」甲「是やア元締でございますか」吉「ア、知つてるか、急いでやつて呉れ」甲「ヘエ……」籠駕屋を急がせ馬道まで來ると　吉「オ、此處で宜い〳〵、町内乘り打ちをしちやア濟まねえ是やア些とばかりだ」甲「ヘエ有難う存じます、オ、棒組元締に頂だいたせ」乙「どうも有難う存じます御氣をお着けなすつて……」家へ歸つて來たのはモウ日の暮方　吉「今歸つて來た」○「オヤ元締お歸んなさいまし」吉「お歸んなさいましちやアねえ、日暮になつたに神棚へお燈明を上げろ、成田樣へ御神燈を點けねえか、何の態だ、脛押しや腕押ばかりして居ねえで、日暮方になつたら表を綺麗に掃除をして、水の少しも打つて置け、間抜ばかり揃つてやがるぢやアねえか」○「ヘエどうも濟みませんでございます」吉「ヤイ〳〵騒ぐない只さへ騒々しい商賣で世間樣方へ御氣の毒でならねえんだ、然う家の前ばかりでなく、向ふ三軒兩隣の前を掃除をして上げねえか」げん「オヤお前さん御

お歸んなさい」吉「おげん些とはお前小言をいはねえぢやア往けねえぜ」げん「どうもツイ屆かないですみません、お着換へなさるか」吉「イヤ着換へねえでも宜い」げん「其ぢやア御湯に行つておいでなさいな」吉「ナニ湯に行かねえでも宜い」火鉢の前へドツカリと安座を搔いて何か考へに沈んで居る樣子、喧嘩でもして來たのかと女房のおげんは心配して げん「お前さん御酒を燗ませうか」吉「イヤ酒も飲みたくねえ、飯も食ひたくねえ、おげんや」げん「ハイ」吉「お前モウ其方の用は濟んだのか」げん「丁度今片附けて終つた所で……」吉「ぢやア一寸此處へ來て呉れ」げん「ハイ、お前さん何え」吉「之を見て呉れ」懷から取出した本天の胴卷 吉「中を開けて見て呉れ」げん「ハイ……、何も此の中にないぢやアありませんか」吉「サア無からいふんだお前の入れて呉れた十兩の金を皆な使つて來て了つた」げん「何だねえお前さん、水臭い事をいふもんぢやアない、使ふ爲めに入れて上げたお金、使つて來たつて頓と差支ないぢやアないか……」吉「イヤ其れが博奕で負けたとか、藝人の一人も連れてつて飯でも食つたといふなら仔細もねえが、其の使つた筋道を一通り話さなけりやアならねえ、實は斯ういふ譯だ、マアおげん一通り聞いて呉れ、先刻家を出掛けたが向島の堤は分内が手狹、其上亂暴な奴が多くつて花を見ても面白くなし、上野は宮樣の御在なさる處で三味線太鼓で騷げねえ場處だから陽氣でなし、寧そ思ひ切て飛鳥山へ行つて土器投げでもして見ようと、飛鳥山へ行くと大勢の土器賣に一人の小僧が打擲かれて居るのを見たから、中へ入つて是々斯々で段々話を聞いて見ると其れがお前、三歳の時に別れた悴の七松だ」げん「オヤ〳〵





マア……」吉「其の後零落に零落をして、おぬひといふ先の女房は亭主も持たず、散々苦勞をして今ぢやア下谷坂本の三島神社の後方の日除といふ處の裏長屋に住んで、おまけに病つて居ると聞て、別れた女房に未練がある譯ぢやアねえが、一旦救ひ上げられた義理を思ふと知らねえ態もして居られねえ、名乘もしねえ遇ひもしねえが、其となく七松に十兩の金を呉れて來た、元を質せば俺ゆゑに舅姑二人を初め多くの奉公人を殺し、三萬兩の身代を潰し、母子二人を乞食同樣の境界に陷したと思ふと氣の毒だから遣つたんだ、まだ御舅の敵討をしなけりやアならねえ事は、常々俺がいつて居るからお前も其の譯は知つて居るだらう、萬一お前が考へ違ひをして別れた女房や子供にやる爲に、私は十兩の金を入れてやつたンぢやアねえと、理窟をいは

れると往かねえから、明ら様に話をするンだ、斯ういふ譯だから惡く思つて呉れるな、ア、今日は陽氣の花見に行つて、えらく陰氣にされッちまつた」吉松の話を默つて聞いて居たおげん、差俯向て頻りに涙を飜して居る樣子、之を見ると吉松が　吉「おげん、何を泣きやアがるんだ、俺が隱してゞも居たのを汝が跡で聞いたとでもいふなら幾らでも怒つて泣け、俺が打明けて話をしたのを何を泣きやアがるんだ、汝ぐれえ分らねえ奴は……」げん「イエマア吉さん少し待つて下さい、何で妾が惡く思つて泣くもんぢやアない、能く別れた女房さんや子供衆に、夫となく御金を遣つて來て下すつた、貴郎といふ人は何といふ優しい心を持つて居なさるだらう、合せ物は離れ物、若しも妾がお前さんと離れ〳〵になつて、然んな工合に零落をして居た時にお前さんが見たならば、矢張り然うして下さるだらう、何といふ賴母しい了簡かと思ひ、又其のおぬひさんといふ先の女房さんの御胸をお察し申して思はず涙が溢れました、殊に通常の良人とは違ひ、お前は妾の親の敵を助太刀をして討たして呉れた恩人、何で悋氣などして濟みませう、どうぞ思ひ違ひをして下さるな」吉「ウム然うか、其とも知らずに拳突を食はして、我儘の亭主だと思つたらうが、勘辨して呉れ、ア、頭が痛え、今夜は俺は早寢をさして貰はう」げん「サアお寢みなさい」と床を延り衣類を着換へさせ、吉松を寢かし、おげんも其の夜枕に就いた、明る朝吉松が目を覺まして見ると、傍におげんが居りません、吉松の衣類三尺帶、揚枝齒磨煙草盆煙草入チャンと其處に列んで居ります　吉「ア、モウおげんは起きちまつたか、オ、次の間へ來たのは誰だ」○「ヘエ元締御早うござ





います」吉「オ、作兵衛かおげんは何うした」作「ヘエおげんでごぜえすか」吉「何をいやがるんだ」作「誠に相濟みませんでごぜいます、姐さんは今朝お起きなさいまして、元締が起きたら然いつて呉ろ、中の郷の親父さんの處へ一寸用達しに行て來るからと、斯ういつて御出掛けになりました」バッと飛起きた吉松　吉「ア、七人の子はなすとも女に肌を免すなといふのは是だ、那れほど云つてやつたのに、先の女房子に金を遣つたと聞いて悋氣を起しやアがつて、扨は父さんの處へ言附に行やアがつたンだな、態ア見やがれスベタ阿魔め……オ、俺も一寸行つて來るから跡を掃除をして置け」作「ヘエ、お顏をお洗ひなさい」吉「顏なんぞ洗はねえ」○「御飯は食りませんか」吉「飯は食はねえでも顏は洗うんだい」○「ヘエ矢張りお洗ひなさいますか」吉「當然よ、何をいつてやるんだ、間拔めえ」ポン〳〵怒つて吉松は顏を洗ひ着物を着換ると表へ飛出し、雲駄の裏金をチャラチャラ鳴らして、本所中ノ郷の三河屋の前へ來ました、掃除をして居た若い者　○「オヤ若元締お出でなさいませ、大層お早く……」吉「おげんが此方へ來て居るか」吉「ヘエ姐さんは先刻御出でになりました」吉「俺が來たと然いつて呉れ……、ア、取次ぐにやア及ばねえ俺が直ぐに行く」と足音荒く奥へ入つて來て　吉「お父さんお早うございます」萬「馬鹿野郎何だ、汝も水戸樣の元締で立派な親方顏役になつて居やがつて、何ぼ舅の家だつて、案内もなくバタ〳〵入つて來やがつて見苦しいぢやアねえか」吉「親父さん誠に濟みません、此方へおげんが來て居るでございませうから、どうか出してお呉んなさい、巫山戲た阿魔だ實は昨日是々斯ういふ譯で、スッカリ打明けて

話をしたのを恪氣がましい事をいやがつて、お前さんの處へ言付に來たんでございませう、然んな阿魔を持つて居ても仕樣がねえ、離緣をして終ふから此家へ出してお呉んなさい」處へ次の間から出て來た間々田の健次、健「アヽモシ兄哥」吉「兄哥ぢやアねえ、俺の足音を聞いて、おげんを逃しやアがつたな、サア此處へおげんを出して呉れ」萬「健次打捨つて置け、コレ吉松」吉「ヘエ父さん何でございます」萬「おげんは今朝乃公の處へ來た」吉「然うでございませう」萬「マア沈着てろ」吉「ヘエ」萬「阿父さん朝ッぱらから來て誠に濟みませんが、どうぞ一通り話を聞いて下さいといふから、是やア何か珍らしく夫婦喧嘩でもして來たかと思つて聞くと然うぢやアねえ、家の人はマア何といふ優しい了簡でござんしやう、恐ろしい人情のある人で、私は一層賴母しく思ひますと斯ういふんだ、何んだ馬鹿〳〵しい朝ッぱらから亭主の惚言に來たのかといふと、イヽエ惚言なんぞぢやアございません、其れに就いて貴所に御相談に來たのは外ではありませんが、私といふ者は、親の敵を討つ時に已に危ふく返り討にならうとした處を、吉松さんが投げて呉れた石が對手の眉間へ當つて、其が爲に首尾能く仇討が出來ました、其が緣で夫婦になつたのでございますから、亭主とはいへ大恩人でございます、處が先の內儀さんのおぬひさんといふ人は、吉松さんが元惡い仲間に入つて居たのを承知で夫婦になり七松とふい子まで出來たが、吉松さんを亭主にしたばつかりに、親父さん阿母さんを殺され奉公人も殺され家へ火を放られて三萬兩の身代を失し、夫婦親子の緣を切られて、乞食同樣な身になりながら、二度の夫も持たず、其の子供を手





一つで育て、殊に今下谷坂本とやらに幽かな暮しをして病らつて居るといふ話、其を聞いて私は今の女房でございますと、澄して居ては浮世の義理が立ちません、是非とも困つて居るおぬひさんへ、纏めたお金を持つて行つて上げたいが、貴所や吉松さんの手で作らへた御金では先方樣もお喜びが薄からうと思ひます、其故先の內儀さんへの義理立に、今度の女房のおげんを吉原町へ遊女に賣て身の代金を持たしてやつて下されば、おぬひさんとやらも私の心を知て快よく受て下さいませう、又然うしたら多い人の中には、能く三河屋萬藏も養子の吉松も、嫁のおげんも義理の爲に思ひ切つた事をしたと賞めて下さる方もあらうと思ひます、又一つには私が夫へ仇討の助太刀をして呉れた恩返し、此事を昨夜吉松さんへ話をしようと思ひましたが、溫順しい人ゆゑ、其れは成らないといふに違ひありません、留められた上は無理にもといふ譯にはなりませんから、今朝密と起きて貴所の處へ御相談に參りました、どうぞ宜しく御計らひ下さいまし、私は覺悟をして來ましたと涙ながらにおげんの話、此の三河屋萬藏も何と返事も出來無からうぢやアねえか、アヽお前は豪え女だ、兎も角も吉を呼んで相談するから待つてろと、話半へ血相變へてお前が飛込んで來たんで、おげんは驚ろいて次の間へ行つちまつた、サア〳〵おげんや、モウ宜いから此所へ來ねえ」げん「ハイ」とおげんは體裁惡相に夫れへ出て來て　げん「モシお前さん、連添ふお前さんへ前に話をしないで、親父さんの所へ來て斯んな事を相談したら面白くなく思ふか知らないが、どうか勘辨して下さい」吉「イヤおげん、何にもいはねえ、お前の志しを有難く思ふ、

實は乃公も昨夜寢ながら、何うしたものかと種々考へ、ヘタな事をしたらお前が氣まづく思ふだらう、と心配したは此方の淺はか、そんな立派な心も知らず、今朝起きて見るとお前が居ねえ、父さんの處へ來たと聞いて、扨は矢張り悋氣嫉妬で駈出したかと一圖に思つて慌たゞしくやつて來て、今更面目次第もねえ、折角お前が云つて呉れるんだから、濟まねえが乃公は然うして貰ひてえが、併し父さん何うだらう」萬「ウム是やアおげんの志しを貫さした方が却つて宜らう、けれどもおげんや三月や四月で身受をしたら、世間で何か作れえ事でもしたやうに思はれやう、折角だからせめて半年ばかり辛抱して貰はなけりやならねえ」げん「エー宜うございますとも」萬「アヽ、義理は辛えものだなア吉」吉「エー義理ほど辛えものはございませんねえ、おげん濟まねえ」げん「ナニお前さん、私から望んで出たこと、固より覺悟して來たんだから、濟むも濟まないもありやアしません」萬「ぢやアおげん賴むぜ」げん「マアさう貴所方に云はれては私が却つて心持が惡うございます」萬「さう極つたら早が宜い、オヽ、源七や源七」源「ヘエ」萬「汝は足の早えのが自慢だな」源「ヘエ、大元締の前でございますが、早えッたつて早く無えたつて、自分ながら何うすりやア斯う足が達者かと思ふ位ゐで、人間の競馬でもあつたら出掛けやうと思ふんで……」萬「馬鹿ッ、人間の競馬てえ奴があるかい、汝は然んなに足が早えんだから、駕籠に乘らずに吉原まで大急ぎに行つて來て呉れねえか」源「ヘエ成程、人の使ひやうが御上手でございますねえ」萬「揚屋町の松葉屋へ行つて、玉の相談があるから、店の若い衆二人に來て呉れとさういつて來て呉れ」源「ヘ





エ」萬「店の若い者頭の赤三尺の安に一人は、信州伊助といふ者だ」源「ヘエ宜しうございます、行つて參ります」ドン〳〵急いで源七といふ男が吉原へ參りまして暫らく經つて歸つて來ました、源「ヘエ只今」萬「オウ源七、早かつたな」源「今直きに參ります」萬「然うか、大きに御苦勞だつた」待つ間程なく表へ駕籠が二挺下りて中から出たのは赤三尺の安に伊助 安「ヘエ御免なさい……、是は三河屋の元締、オヽ淺草の若元締も、健次兄哥もお在でございますか、急いで來いといふ御使ひゆゑ早速飛ばして參りまして、駕籠を横着けにして濟みません」萬「オヤ御苦勞だつた、若い衆に茶を喫まして祝儀をやつて呉れ」萬「ヘエ元締然んな事を…」萬「宜いッてえ事よ心配するな」吉原で赤三尺の安さんといふのは有名のもので、明の元日から暮の大晦日まで赤い三尺でなければ締たことがない、是が大層人に知られて居るので、俺も一つ眞似をして見ようと、同じ安といふ名前の人て欝黄の三尺ばかり締めたので欝黄の安さんといつてる中は宜つたが黄色の安さん、玉子とちの安さんなどゝ冷評されて止して終つたといふ何でも附燒刃は往けません、信州伊助といふのは後に根津の大八幡の旦那になつた人で 萬「時に安、伊助」安「ヘエ」萬「女郎を一人世話をするが買つて呉んねえ」安「ヘエ宜しうございます、年は何歳で……」萬「年か年は二十二だ」安「ヘエー女郎にやア盛りを少し過ぎましたが、粧つたら若く見えますか」萬「ウム まア若えな」安「二十歳位ゐに見えませうか」萬「モッと若え」安「十九位ゐに……」萬「モッと若え、マア萬年新造だな」安「其やア有難え十七八位ゐに見えますか」萬「モウ些と若え」安「ヘエーどの位ゐで……」萬「七ッ

か八ッ位えだな」安『串戯いつちやア往けません』萬『マア粧つたら十八九だな』安『へエー其ぢやア無論上玉でございませうが藝はありますか』萬『女一通りは出來る』安『大した代物だが蟲があり やアしませんか』萬『蟲はねえが文身を繡てる』安『アー二の腕に命といふ字でも』萬『然うぢやアね え、脊中に大蛇の文身をして居る』安『ア、其ぢやア淺草の姐御ぢやアありませんか』萬『然うだ』 これは出羽樣に居た時刺つたので、殿樣に御意見をする腹で文身をしたのです、安『何ですッて 元締、淺草の姐御……』萬『ウム實は斯々いふ譯で身を賣るんだ』安『へエー若元締宜うございま すかい』吉『宜とも』安『健次兄哥宜うございませうか』健『ウム宜いんだ』安『姐さん眞正ですかい』 げん『安さん伊助さん、どうかお願ひ申します』安『お前さんが女郎に成りや其やア奇を好む世の 中、賣れる事は受合ひます』げん『餘まり賣れるも困るが、どうか一つお賴う申します』萬『俺が判 をするから宜いだらうな』安『へエ宜ございます、ソコで元締幾ら御入用で……』萬『百兩だ』安『百 兩……、どうも百兩といふ女は滅多にございません……』勿論今でこそ千兩二千兩といふ金を何 とも思ひませんが其の頃百兩といつては大した金、マア遊女では三十二三兩、四五十兩留まりで ございました、安『百兩は些と何でございますが、年一ぱい二十七アケ、二年の切廻しが附いて手 取百兩の證文で宜しうございますか』萬『其で宜いが今日の内に證文が出來るか』安『へエ宜しうご ざいます、後刻改めて出ます』話が極つて二人は吉原へ歸り松葉屋の主人に話すと 主『そりや ア可けねえ祐天吉松といふ亭主があつて、三河屋萬藏といふ親があつた日にやア、一つ間違やア何





とか彼とか因緣を附けられて、午蒡拔きにされて終はア』安『イエ先さが尋常の破落戸とか惡漢と かいふものなら然んな事もありませうが、御大名の人入稼業、男を賣つて居る人達でございます から其やア大丈夫でございます』主『然んなら六十兩出さう』安『へエ宜しうございます、貴所が六 十兩しきやア出せねえと仰しやるなら私共も受合つて來たもんでございますから、跡の四十兩 は二人で何うとか算段致しませう、其の代り其の北魁に出た臺の物から玉から總 ての勘定は四分六に割つてお呉んなさ い』主『マア待ちねえ、女郎屋が若い者と 分で女郎を買つたといつちやア外聞が惡 い、然んなら百兩出してやる』安『然うで すかい、ぢやア早速今日の内に證文をし て終ひます』とソコで赤三尺の安と、信 州伊助の二人の働らきに依て、百兩の金 の取引きが濟んで其の翌日おげんが吉原の松葉屋から名前も浦琴と附け、愈よ突出しに出る、此 方は三河屋萬藏と健次の二人が日除へ來て、おぬひ親子に遇つて、是々と委細を話して百兩の金 を出し、どうぞ是を納めて呉れろと聞ておぬひは涙を流して ぬひ『エー有難う存じます、之をの